

The HERO ～ロード・オブ・ガロウ～（仮題）

十五夜の月

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

怪人を目指したヒーロー狩りガロウはサイタマによつて倒された

目覚めるとそこは見知らぬ部屋、見知らぬ世界

本心ではヒーローに成りたかったガロウは、この世界で新たな道を進む!!

行き着く先は悪か!? それとも正義か!?

今ここから、ガロウの新たな道が始まる!!

目次

プロローグ	1	不穏な気配	98
入学試験・上	12	ヴィラン強襲	108
入学試験・下	22	ヴィラン強襲 下	119
雄英高校入学		V S 脳無!!	127
個性把握テスト 上	32	V S 脳無!! 2	136
体力測定 下	40	V S 脳無!! 3	147
戦闘訓練 上	49	V S 脳無!! 終	157
戦闘訓練 中	59	始まるよ、雄英体育祭	
戦闘訓練 中の二	69	挑発	164
戦闘訓練 下	79	第一種目!!	175
訓練を終え・・・	89	第二種目【前編】	187
		第二種目【後編】	195
		実力差	206

既視感

格

ましな試合

決勝戦

終了、体育祭!!

職場体験編

邂逅

目指すべき姿

職場体験へ

思い思われ

保須市 動乱

保須市 収束

先輩と有意義な時間

成長と、焦りと、退屈と

312 304 297 289 281 273 265 257 246 237 227 217

プロローグ

「つーー」

気付けばベッドの上で寝ていた。

「・・・何処だここ」

男は、ガロウは警戒しながら身を起こす。

見知らぬ、しかし生活感ある普通の部屋に自分は居る。

「確か、あのハゲに負けて彼処から逃げて・・・」

ブツブツと独り言を呟きながら自身を確認。

着ている服、シャツに短パン、普通。

体調、いつもと変わりない、普通。

体、怪我なくいつもと変わりない高校生位の体型、ふつーー

「いや、ちよつと待て!？」

姿鏡に映る自分を思わず二度見する。

明らかに身長が縮んでいた。

「……どうなってやがる。あの戦闘の反動が今になって出たのか？」

だが、他に体の異常はない。

「……兎に角、まずは現状の確認だ。」

近くに気配はない。そつと部屋のドアを開けて廊下に出て確認。キッチン、風呂場、ベランダに人は居ない。

結局、どうやらここはアパートかマンション、という事だけしか分からない。

「本当になんなんだよ」

唯一手掛かりになりそうなのはポストに放り込まれていた新聞。

それを開く。

「んくと、なになに……、ヒーローが見事銀行強盗の敵を確保……。」

「ヴィラン？ 怪人じゃねえのか？」

それに町の名前も変だ。A市、Z市、と言ったアルファベットの表記ではなく漢字で表記されているからだ。

ガロウはもう一つの手掛かり、新聞と一緒にポストに入っていた封筒に目を向ける。

表面には雄英高校受験票と書かれており、デカデカとキャッチコピーの様に『君もヒーローになれる!!』と書かれていた。

「ヒーローの育成学校？馬鹿馬鹿しい」

ガロウはそれをベッドの上に投げ捨てる。

そして、腹も減っていたので冷蔵庫を開けてみたが生憎あるのは水と卵のみ。

「情報集めがてらに、なんか食いに行こう」

机の上に財布が置いてあったのでそれをポケットにしまつて、ガロウは玄関の扉を開けた。



「……分からねえ事だらけだな。」

外に出てみれば何か分かると思つていたが今の所手がかりはなし。

誰かに監禁されていたとは考えられない。なぜなら「丁寧にマンシヨンの鍵が玄関に置かれていたからだ。」

「……考えられるのは二つ。誰かの手によって彼処に連れてこられた。若しくは、オレの数日間の記憶が吹き飛んでいるだけか。」

しかし、それでも自分の身体が縮んでいることの説明が出来ない。

「……身体は縮んでいるが、身体能力は下がっちゃ居ねえな。」

分かっていることは少なかった。新聞に載っていたヒーローの名前も聞いたことがないような名前だった。

もしかしたら、B級以下の雑魚かもしれない。聞いたことのない名前だと手がかりにしようがない。

「まあ、取り敢えず飯だな、飯」

丁度目の前には焼肉屋があり、更にタイミンクのいい事にサービスタイムと書かれている。

そして自身の鼻が僅かに香る肉の匂いを察知しここにしろと脳に呼び掛ける。

「寝起きだが、問題ねえな」

店に入り、店員に案内されて一番奥のテーブル席に座りメニューを開く。

ガロウの目を引いたのは777gと書かれていた特大のステーキ。

「すみませえーん。こいつ下さい」

「お、お客様。こちらの品はかなりの量が御座いますが、お一人で大丈夫ですか？」

「問題ねえーよ」

店員の心配に一言で答える。

それから暫くするとガロウの目の前に特大の肉の塊が香ばしい香りとともに運ばれて来た。

「んじゃ、いただきまーす」

大きめにカットして口に頬張る。圧倒的な肉の存在感で口の中が一杯になり、溢れ出す肉汁が肉の旨みを舌に伝える。

一口、また一口と続けるとあつという間にその肉は姿を消していた。

「ー足りねえな・・・」

あれだけの肉の塊を食べたと言うのに、満足感には程遠い。一瞬とは言え、怪人になつた影響かと思つたが気にすることなくメニューを開く。

幸い、今はサービスタイム中で料金も安く金に余裕もある。ガロウの決断は早かつた。

「すいません。ここからここまで、全部ください。あと、水も大量に」

「え・・・は、はい」

メニューのステーキの欄にある、安くて量のある物を片っ端から頼む。一瞬、店員が固まっていたがガロウは気にしなかつた。

そして数分後、ガロウの座っているテーブル席にはカラになった鉄板がこれでもかと積まれていた。

「ふー」

ガロウは満足感と共に店を出る。店員の声が消え入るようなものになっていたがガロウは気にしなかった。

因みにこの時のフードファイトが動画サイトに載せられていることにガロウが気付くのはもう少し先である。

「さてと、腹も膨れたしどうするかね・・・」

次の行動を考えていた時、ガロウの耳に助けを求める様な悲鳴じみた声が聞こえた。

「あ？なんだ？」

恐らくそう遠くない。

少しの興味がガロウの脚を動かす。

声ハハッキリと聴こえるようになってきてることが、そこに近付いていることを意味する。

「なんだありや？」

そこでガロウの目に飛び込んできたのは手が四本もある身体のでかい男が銀行強盗をしている光景だった。

二本の手に大型の機関銃のようなものを持ちながら警察に向けて発砲している。そして、空いている手には、人質だろうか？泣き叫ぶ子供がいた。

「おい！ヒーローはまだ来ないのか！」

「もうすぐ、シンリンカムイが到着するはずですよ！」

「クソ！人質を何とかしないと！」

「うああああああ!!」

幾つもの声がガロウの耳に届いてくる。

中でも特に子供の叫び声が大きく聞こえた。

「たく・・・ヒーローが助け遅れるとか、あっちゃダメだろ」

ガロウは人混みを掻き分けて一歩前が出る。

野次馬の最前列まで来た瞬間、アスファルトを陥没させる力で地面を踏みしめて飛び出した。

——旋風鉄斬拳——

振り抜いた手から発せられた斬撃が腕を切り落とし、人質にされていた子供を助け

る。

武術の達人、ボンブが使っていた旋風鉄斬拳。

ガロウの師匠でもあったシルバーファンクが使う流水岩碎拳りゅうすいがんさいけんに似たこの拳法は、例え鉄であろうとも斬り裂く。

「ぬうあああああ!!? 誰だテメエ!!」

やっとコチラの存在に気付いた男が二つの銃口を向けた。

しかし、ガロウは焦った素振りを見せない。

「止めとー」

言葉を言い終えるよりも先に、二つの鉄の口から火とけたたましい破裂音と共に大量の銃弾を吐き出した。

対するガロウは、既に構えを取っている。

「ー流水岩碎拳りゅうすいがんさいけんー」

迫り来る大量の弾丸を両の手で受け流し進行方向をずらす。ただし、真後ろには流さない。なぜなら子供がいるからだ。

「銃火器でオレを殺せないのは、デスガトリング戦で証明済みだ!」

最後の弾丸を流し切る。ビルの壁は幾つもの穴が空き、コンクリートは粉々に砕けていたが、ガロウの真後ろは全くの無傷!

デスガトリングの弾丸を弾いた時とは違い、手には擦り傷すらない。

「くっ——、こ、この化け物が！」

弾が尽きたのだろうか。銃を投げ捨てた男が残っている三本の腕を振り上げて、全力で振り下ろした。

「あめえよ」

「つ——————!!!」

だが、接近戦こそガロウの本領が発揮される事を当然ながらこの男は知らない。

拳はあらゆる方向へと流されて、がら空きになった胴へとアスファルトを陥没させる踏み込み、そのパワーが全て乗せられた拳がめり込む。

その威力は言うまでもなく強力で、道路を挟んだビルの壁に男を叩きつけた。

「ふうー………。」

おい餓鬼。怪我とか大丈夫か？」

「………」

「おい？」

「か、かつこいいい！」

「ああ？」

助けた子供がキラキラした目でそういった時、反応に困った。

「ねえねえ！お兄さんってプロヒーロー？」

「ああん？別にオレはヒーロー」

ヒーローなんかじゃ無い、そう言おうとして言葉が途中で止まる。

それと同時に、ムカつくハゲ頭の顔と言葉が脳内に浮かび上がっていた。

『本当はヒーローに成りたかったんだな』

『お前は妥協して怪人を目指したんだ』

『俺のヒーローは本気の趣味だ！』

『教えてくれたな、お前が何者なのか』

ヒーローだったら、今から本気で目指してやるよ

「ねえねえ！プロヒーロー何でしょ？」

「・・・違いよ」

ガロウはここに宣言する。

「オレは、趣味でヒーローを目指してる男だ」

入学試験・上

子供を助けた翌日、ガロウは椅子に座りノートに何かを書いていた。

それは、ここ数日で分かったこと。

——まず、考えにくいがここはオレがいた世界とは別の世界、と思った方がいい。

色んな方法（主にネット）で調べたが、シルバーファンクやキング、タツマキ等の自分が知ってる、他人も知ってる当然の様な有名ヒーローの名が見当たらない。

更にヒーロー協会も存在しない。

——ここでは個性と呼ばれる特殊能力が存在してる。

この世界では人口の約八割が個性を持っているらしい。その内容は多岐に渡り、特殊能力の様なものから先日の方の様に腕が複数あるといった異形型と呼ばれる物まである。

——最後にこの世界でもプロヒーローが存在。更に対する敵側はヴィランと呼ばれる。

れてる。

これはガロウがもといた世界とあまり変わらない。正義と悪が見事に分かれていて、非常に分かりやすかった。

「そしてヒーローになる為にー」

ガロウは雄英高校の受験票を手に取る。捨てようとも思ったそれは机の引き出しに大切に保管されていた。

「ヒーローについて学べる学校が、この世界にはある」

ガロウにとってこれが重要であった。

趣味とは言え、本気でヒーローを目指す以上、ヒーローについて学ばなければいけない。そう考えたからだ。

「それにしても……この倍率はねえだろ」

愚痴をこぼすのも無理はない。

調べればこの雄英高校のヒーロー科の倍率は300倍。いや、可笑的いだろ。

筆記試験と実技試験があるらしいが重要なのは実技だな。

「ここである程度カバーしねえと」

天才である自分には楽勝！という考えは捨てた方がいいな。足元すくわれたら元も子もねえ。

幸い身体能力はより向上している。もしかしたらこれが個性によるものかも知れないが、どっちにしろ悪いことは無い。

「流水岩砕拳も旋風鉄斬拳もキレッキレだし、戦闘には問題ねえ」

実技試験がどんなものか分からないが不安はない。筆記の分は必要そうな事は調べてその全てを頭に叩き込んだ。

試験は明日。

少しも不安のないガロウは寝坊しないようにそそくさとベッドに寝転がった。

◎

「はあー、でけえな」

雄英高校。

日本で一二を争うと言われるヒーロー養成学校。凄いとは思っていたが実際に見てみるとガロウの予想など軽く超えている。

「そしてこの人数か・・・」
倍率300倍。

こちらも疑っていた訳では無いが、実際に見てみると受験生の多さに圧倒されそうになる。

だが、ガロウは違う。

「……こんなものS級ヒーローのチームに比べりやどうってことねえ。」

見た目の歳は周りにいる少年少女と変わらなくても、かつての記憶と経験がガロウに余裕を持たせていた。

そんなガロウから醸し出される雰囲気を感じることができる者は、今この場には居ない。

だからだろうか……

「おい！その君！」

「あ？」

振り向くとそこには如何にも優等生と言った風貌の少年が立っていた。

少年はこちらに近付いてくると目の前で足を止める。

「なんだその服装は！」

「あ?」

ビシッと効果音がつきそうな勢いで少年はこちらに指を指してきた。

自分の服装を確認してから少年の服装を確認する。なるほど、指摘されるのもつともだ。

今の自分の姿は黒のズボンに黒のインナー。

とてもじゃないが、受験に来る格好ではないだろう。

「なぜ制服を着てこない!学生としての常識がなっていないぞ!」

どうやら予想通りだった。

なるほどなるほど、確かに受験に制服で来ないのはマナー違反かも知れない。

実際、家のクローゼットの中には何処の学校の物か分からない制服もあったが、ガロウはそれを着てこなかった。

「見たまんまに真面目だな・・・」

「なんだと?」

「受験には制服で来る。当たり前前だな。」

だが、その当たり前前のことをして無いつて事は理由があるからに決まってるだろ

?

「た・・・確かに」

「常に何が起きてもいい様にしておく。制服だといざと言う時に不便だ。

何か起きた時に対応出来なきや、ヒーローなんかになれねーぜ、真面目くん」

「……な〜んてな。」

ガロウはその場を立ち去りながら笑いを堪えるのに必死だった。

さっきの言葉は殆どが出任せ。実際には制服に着替えるのがめんどくさかったただけだ。

それをまさか、あんな風に受け止めるとはな。

「……やっぱりどいつも餓鬼だな」

外見は同じだがちよつと観察してみると受験という特別な状況だからか緊張してるのが手に取るように分かる。

こんな状況で冷静になれないやつが、果たしてヒーローとしてやっていけるのか。

そこで考えるのを止める。

自身もヒーローを経験したことは無い。なら条件は一緒なのだからこんな考えでは足を掬われかねない。

立場は同じ、ヒーローを目指す者。ならば見下さぬように気を付けようと自身に強く念を押した。



「さてと……いよいよ実技試験だな」

ふう、と息を吐きながら呟く。

正直この実技試験が一番楽しみだった。別に内容に興味がある訳では無い。今現在の自分自身の力を知るいい機会になるかもしれない。強くなるには、まずは自分を知るところからだ。

「リスナーども今日はオレのライブにようこそー!!エビバディセイ!」

『……………』

急にうるせえ。耳を抑えながら音の発生源に目を向けると一人の男が立っていた。

「……あれは確か、プレゼント・マイク。」

「コイツはシヴィー!テンションが低いぞリスナー共!」

勝手に騒いでるが、どうするんだこの空気。完全に凍りついてるぞ。静かにさせたいと思つてたなら大成功だが。」

「入試要項通り、リスナーの諸君には模擬市街地演習をしてもらおう」

「うわあ、感激だなあ。本物のプレゼント・マイクだ。……ラジオ毎日聞いているよ。それに雄英高校の教師は全員がプロヒーローだし」

・……後ろの方がボソボソとうるさい。

説明を聞き落すことは無いだろうがそれでも多少気が散る。近くにいる奴らはたまつたもんじゃない無いだろうな。

「持ち込みは自由だ。各自指定の演習場に向かつてくれ！」

雄英高校の配慮か持ち込みは自由らしい。

しかし、ガロウにとつてはそんなルール関係ない。使うものは己の肉体のみ。

「演習場には三種の仮想ヴィランがいる。それぞれポイントと危険度が違うからそれぞれの方法で撃破しろ！」

説明を聞いてガロウは口角を少しあげる。

遠慮なしに壊せるのならコチラも暴れるだけ暴れられるというものだ。

「勿論！アンチヒーロー的な行動は御法度だぜ！」

「質問よろしいでしょうか！」

「構わないぜー！」

手を挙げて立ち上がったのは何と先程の真面目くんだった。

「プリントには四種類の仮想ヴィランが記載されております！プレゼント・マイクのお言葉が正しければ仮想ヴィランは三種類の筈！誤載であるなら日本最高峰の雄英において恥ずべき痴態！」

真面目目という言葉は撤回しよう。

どうやらアイツは超や馬鹿が付くほどの真面目だったようだ。

「それから後ろの君！さつきからボソボソと喋って、物見遊山のつもりなら即刻雄英から立ち去るべきだ！」

「……すみません」

ボソボソと喋っていた少年に対してガロウは心の中で合掌した。

「オーケーオーケー！素敵なお便りありがとうな、受験番号71111君！」

スーパーマリオブラザーズしてるか？あれにドツスンって居るだろ？言わばそれ。

四種類目のそいつは0ポイントのお邪魔虫って所だな！」

「ありがとうございませす！」

「他にも質問ある奴は居ないか。なら、俺からは以上だ！最後に我が高校の校訓をプレ

ゼントしよう」

校訓、という言葉にガロウは耳を傾ける。

「かの英雄、ナポレオン・ボナパルトは言った。『真の英雄とは人生の不幸を乗り越えていく者』だと！……」

Plus ultra!!それではリスナーの諸君！善き受難を！」

入学試験・下

プレゼント・マイクの説明も終わり、それぞれの受験者が自分に当てがわれた試験会場に移動していく。

ガロウの姿もその中であつた。

「まさか学校の敷地内にこんなもんだであるとはな・・・」

着いた模擬市街地は予想以上に大きかった。こんな物が敷地内に幾つもあると言うのだから驚きである。

〔Plus ultra〕、ガロウは先程聞いたプレゼント・マイクの言葉を思い出す。更に向こうへ、なるほど良い言葉だ。

ならこの試験、楽々と乗り越えてやるか。

『そんじゃあ、スタート！』

何処からともなく聞こえるプレゼント・マイクの声が試験開始を知らせる。

その音が聞こえた瞬間にガロウは駆け出した。

「……他が来ねえな、急な事に驚いてんのか？」

チラリと後ろを見ればやっと他の受験生たちが動き出した。しかし、既にガロウとの差は開きすぎている。

ガロウは笑みを浮かべた。

耳と鼻に意識を集中させる。

感覚が鋭敏になり、機械の駆動音を耳が察知しオイルの匂いを鼻が察知する。さながら人間リーダーである。

角を曲がると予想通り敵が一体そこに居る。

「……旋風鉄斬拳。」

ガロウを察知する間も無くその敵は切り刻まれた。

「へっ！腕い腕い！」

脚の動きを止めることなくより中心部へと向かっていく。

だがそこでガロウは急に横に飛び退いた。

建物の壁が爆砕されて鉄の腕がガロウに向かって伸びてきたからだ。コンクリートの壁を容易く破壊する威力は生半可な物では無いだろうが、ガロウは慌てない。

「音と匂いでバレバレだったの」

「……流水岩碎拳。」

攻撃を受け流し、拳を思いっきり叩きつける。それだけで敵は沈黙した。

撃破した事を確認してから更にガロウは中心部にと走る。そろそろ他の受験生たちも戦闘を始めている頃だ。

ならば出来るだけ敵の多くを撃破するには敵が固まってる所に行くのが最善。

「ガラクタじや相手にならねえ」

動きながら旋風鉄斬拳で切り刻み、流水岩碎拳で攻撃を流しながら敵を殴り沈黙させる。

これらの動作を軽くとは言えどかなりのスピードで走りながら行うガロウに追従出来る受験生などこの場に居ない。

だが、どうやら移動に特化した個性持ちも居るらしくぼちぼち他の受験生の数も増えだした。

「混戦状態だな・・・」

姿勢を変える。

両の手を軽く地面に触れさせてまるで獣の様に動く。かつて、S級ヒーローの番犬マシと戦いそこから編み出したこの姿勢。

敵と受験生、そして建物が壊れたガレキが障害物になっているこの状況なら、この姿勢が最適。

「いつきに片付ける」

敵に飛びつき頭部をねじ切り、その部品を一番近くに居た敵に叩きつけて粉碎。

壁に両手両足をつき、バネのように飛び出しながら三、四体程の敵を一瞬で破壊する。

同じように複数体の敵を倒した所で、倒れてピンチになっている受験生が目に入った。

「ボサつとしてんじゃねえよ」

振り下ろされる腕を流し、頭部を破壊。

「すまない、助かった！」

「.....」

礼には応えず、直ぐに動く。

見ればチラホラと怪我をしたり危うい状況の受験生が何人か居る。その近くに居る敵全てをガロウは一瞬で破壊し尽くした。

動きを止めない。正しく言えば久しぶりの戦闘による高揚で動きを止めることを身体が拒否している。

そして自分が何体の敵を倒したか分からなくなってきた時だった。

「つーーー!!？」

突如地面が、試験会場全体を揺らすほどの衝撃が走り、足を止める。ビルとビルの間

から超巨大なロボットが姿を現した。

ポイント0のお邪魔虫、そうプレゼントマイクは言っていたがはつきり言ってお邪魔虫レベルではない。

「・・・はは」

乾いた笑いが口から出た。歩く度に地面を揺らすのは良く怪獣映画で見るそれと同じ。

受験生たちもパニックになりながら、叫び声を上げて逃げ回る。

しかし、ガロウは笑みを浮かべて心を奮い立たせる。

「脅威に立ち向かってこそ、ヒーローだろ！」

地面を蹴って道を全力で走る。

周りを見れば逃げ遅れたり怪我をして動けないでいる受験生が何人か居る。

そちらに意識が向かないように近くにあった瓦礫を蹴飛ばして、意識をこちらに向けた。巨大な鉄の塊がこちらに向けて上から降ってくる。

僅かな不安を振り払い構えをとった。

「・・・流水岩碎拳！」

両足が地面に陥没し骨が軋む。

「……………だりゃ!!」

気合いの声とそれをかき消す轟音。砂塵が舞い上がりガロウの姿を完全に覆った。周りの受験生達は青ざめる。目の前で一人の少年が圧倒的な大質量に潰されたのだ。無事なわけが無い。

誰もがそう思っていた。

「あ、あれ！」

誰が言ったかは分からない。しかし、皆が向ける視線の先、砂塵の中から何かが飛び出し敵の腕を駆け上っていく。

何かとは勿論、ガロウのこと。

流水岩碎拳は成功していた。

その体に傷はなく多少砂で汚れている程度にしか見えない。

「デカイ分、動きが遅せえよ」

一息に駆け上がり、人体で言うのなら肩の部分に到達した。

息を吸い込み、思いつき踏み込む。金属の装甲板に穴が空くほどに。

——踏み込みが強ければ強い程、パンチ力は上がる。

誰かがそう言っていた。

そんな事を思い出しながらガロウは拳を振りかぶる。

——冥躰震虎拳！
めいていしんこけん

天才武闘家、スイリユーが使う冥躰拳。見た事しか無かったがガロウの使った技は正しくそれだった。

しかし、威力はスイリユーが使うものとは比べ物にならない。装甲が破壊され巨体が揺らぐ。

「更にダメ押し！」

——冥躰鳳昇拳！
めいていほうしょうけん

回転する拳が頭部をバラバラに粉碎した。

巨大仮想敵は倒れ込み、完全に沈黙した。

「—————！！」

巨大な歓声と称賛の音がガロウに叩きつけられる。

この場に居る受験生達の目にはガロウの事がヒーローの様に映っていた。

◎

雄英高校ヒーロー科の会議室には、校長やプロヒーローの教師陣達が重要会議を開いていた。

「いんや、今年も中々粒ぞろいだな」

「救助ポイント0で、2位とはな」

「対照的に、敵ポイント0で8位か」

「久しく見てなかったなあ、アレをぶっ飛ばしちゃうの」

騒ぎながら真面目に話をする教師陣たち。

そして話題が切り替わる。

「そして圧倒的な実力を見せた、拳獣けんじゆう 牙狼」

「救助ポイント、敵ポイントそれぞれ合わせてまさかの150ポイントオーバー」

「スタートから迷わず仮想敵の場所に行く判断力の高さ、敵を切り刻んだり粉碎する戦闘力の高さ、怪我をした受験生を見つける視野の広さ……。どれをとってもピカイチだ」

画面に映し出されるガロウの姿に教師陣は時に驚き、簡単な声を漏らす。

「コイツの個性って増強型か？」

「書類には一応そう書かれてるな」

「戦闘センスと相まって素晴らしい効果が出てやがるな」

「しかも、巨大仮想敵に潰されたと思ったのに無傷で飛び出して、最終的にぶっ飛ばしちゃったもんな」

そして、画面はガロウに向けて他の受験生が称賛を送っているところを移す。

「ふむ、ヒーローとしての素質は十分に持つてるのかもしれないね」

「それでは、決定ですね？」

「勿論さ！寧ろ、落とす理由が見当たらないよ！」

「それじゃ、次の生徒に移りましょうか」

教師陣の会議はまだまだ続いた。

◎

散歩から家に帰るとポストに封筒が入っているのにガロウは気付いた。

「雄英高校・・・合格通知か？」

封を切り開けると数枚の資料と一緒に、手のひらサイズの機械が入っていた。

「映像投影装置、か」

椅子に座って説明書を読みながらスイッチを押すと、起動音と共に映像が浮かび上がった。

『私が投影された!!』

「このおっさん・・・ランキング一位のオールマイト」

タンクトップマスターや超合金クロビカリにも負けない筋骨隆々の身体、堂々とした佇まい。

現在のヒーローの頂が映像で映されていた。

『はじめまして拳獣牙狼くん！私はオールマイトだ！この度、雄英高校で教師をするこのになった！』

「・・・うるせえな、このオッサン」

NO.1ヒーローであるオールマイトが教師をするというのに喜ばないのはガロウ位である。

『さて、君の合否だが・・・。』

文句なしの合格だ！筆記試験が少しマイチだったがそれをカバーする程の戦闘センスだった！合格者トップだぞ！

改めておめでとう！雄英で待ってるぜ！』

そして映像は終わる。ガロウは拳を握りしめた。

無意識に口角が上がるのが分かった。

「合格祝に、肉でも食いに行くかな」

雄英高校入学

個性把握テスト 上

春とは、一年という期間において全ての始まりである。

そんな一年の始まりにガロウはと言うと。

「ズガ〜・・・グガア〜・・・」

ただ寝ていた。

「グコオ〜・・・ンガツ〜」

目を覚まし、時計に目をやる。

時間は既に起床予定の時刻を大幅に過ぎていた。

「っ、やべっ!!」

ベッドから飛び起き、コンビニで買っておいた携帯食糧を片手に家を飛び出し――

「違い！制服だ、制服」

普段着ていないから忘れていた。今日から雄英高校の生徒として学校に通う事を。

新品の制服に腕をおして玄関とは逆方向、ベランダに足を運ぶ。

「こつちから行きや、間に合うか」

ガロウは躊躇うことなくベランダから飛び出した。

目の前の電柱に着地して、更に高く更に遠くへと飛ぶ。一般人からすればとんでもない光景ではあるが、当の本人、ガロウにとつては何かを食べながら出来るほどに簡単だった。

約数分後に普通に道を行くよりも早く、そして息を切らせることも無く、余裕で雄英高校にたどり着いていた。

「えーと、こつちの教室か・・・」

渡されていた資料に従い移動する。

そこは予想以上にデカイ扉。

「……ああ、バリアフリーってやつか。」

一人で勝手に納得しながら扉を開ける。

「だから先程から言ってるだろ、机に足を掛けるなと！」

「うっせえーな！関係ねえだろ、端役が！」

騒々しい言い合いが繰り広げられていた、うち一人はあの時の真面目君。巻き込まれるのも面倒なので手早く座席を確認して席に着いた。

「ねえねえ、君きみ！」

「ああ？」

担当教師が来るまで寝ようと考えたガロウは声のした方に目を向ける。

「君って確か0ポイント倒してた人だよな？私、葉隠 透、よろしくね！」

「拳獣 牙狼だ。ガロウでいい」

軽く挨拶を交わして寝ようと思ったのだが、この短い会話に他の生徒も反応してしまった。

「オレも見てたぜ！凄えよな！オレは瀬呂 範太だ、よろしくな！」

「オレは上鳴 電気。アレを倒せるなんてあんたヤベエよ！」

急に集まってきた生徒達を鬱陶しく思いつつも邪険にすることは出来ずにガロウはやりわりと対応する。

「お友達ごっこしたいなら、他所へ行け！ここはヒーロー科だ！」

入口の方から聞こえた声に全員の意識が向いた。目をやると二人の生徒、そしてその後寝袋に身を包んだ小汚い男が立っていた。

「はい、皆が静かになるまでに8秒かかりました。時間は有限、君達は合理性に欠くね。」

担任の相澤消太だ、よろしくね」

——担任かよ！

何時もは冷静なガロウも突然の教師に見えない教師の登場に心の中でツツコミを入る。

覇気も感じられなければ特別に強いとも感じられない・・・イマイチだな。

戦闘意欲は掻き立てられない。

「全員、これを着てグラウンドに出ろ。同じものが机の横にかかっている」

机の横を見るとぶら下がった紙袋の中に上下揃った体操服が入っている。

「先生、質問よろしいですか！」

「自分で考えろ、以上」

本当にアイツが教師なのか。

真面目くんの質問を無視して出ていく担任に疑いの目を向けつつも遅れば面倒になる事は何となく分かったので、ガロウは素早く着替える。

「何やってるんだ君！まだ女子が居るじゃないか！」

着替えてると真面目くんにそう言われたが、ガロウは別に気にしない。

「インナー着てるんだから問題ねえだろ。と言うより、お前らも急いだ方がいいぞ、あの人の性格的に」

真面目くんにそう応えると教室からグラウンドに向かう。

しかし、渡されていた資料には今日の予定は入学式とガイダンスと書かれていた、なのにいきなりグラウンドに出ろってどういう事だ。

考えても仕方が無いのでボーとしながらグラウンドで待つこと数分。やっとクラスの全員が集合した。

「やっと全員揃ったか、じゃあ今から個性把握テストを始めるぞ」

「個性把握テスト!?!」

何人か驚きの声を上げるが、別に驚くことではないはずだ。教師が生徒の個性を知らない訳には行かないだろう。

「入学式は?ガイダンスは?」
なるほど、そっちの驚きか。

「ヒーローにそんな事する悠長な時間なんて無い。雄英高校は【自由】な校風が売り文句だが、それは先生側も同じことだ」

という事は、定められたルールに則らなければ一発で退学も有り得る、という事。
はあ・・・笑えねえ。

「どうやら一人気付いた様だが・・・」

まあ、先に進もう。お前ら、中学の頃やっただろ?ソフトボール投げとかの個

性禁止の体力測定」

「それをやるんですか？」

「そうだ、それを個性を使ってやる。爆豪、お前の中学の時のソフトボール、記録いくらだ」

「67m」

答えた爆豪に先生はボールを投げ渡す。

「んじや、円から出なけりや何してもいいから個性使つて投げてみる、思いつきり」

「んじやまあ……死ねえ!!」

……死ね？

妙な掛け声と共に爆発が起こり、ボールは高く遠くに飛んでいく。

爆破の個性か、殺傷能力の高そうない個性だな。使い方も慣れてそうだ。

推測をしていると先生が持っている端末から電子音がなり、数字が表示される。

「まずは己の最大限を知るところから始める。それがヒーローの素地を作る合理的手段」
111705. 2m。

それは常人では決して出せないような記録だ。個性を上手く使えばこうまで変わるのか。

だが、自身には特に必要のないものだ。

「面白そう・・・か」

その声ガガロウの意識を思考から現実にと引き戻した。

「三年間、そんな腹積もりでヒーロー目指す気か？」

先生がかもし出す雰囲気に変化している。

「どうやら、覇気がないという前言は撤回しないといけないようだ。」

「よし、トータルの成績が最下位の者は見込みなしと判断し、除籍処分とする」

嘲笑うように宣言する。

周りの生徒の多くはかなり驚いた表情をしているが、ガロウからすれば別段気にすることではない。

「生徒の如何は俺達の【自由】・・・」

ようこそ。これが雄英高校ヒーロー科だ」

宣言を聞きながらガロウは退屈になる、と大きく欠伸をした。

「おい、拳獣」

「はい？」

急に自身の名を呼ばれて生返事を返す。

「そんなにこれからやる事が退屈か？」

「いやあ、まあ・・・はい」

どうやらこの教師にはバレていた様だ。そして聞かれたことに対してガロウは悪びれること無く肯定する。

「だったらお前だけトータル成績上位五位以内に、条件上げようか？」

不機嫌な事を隠すことない声音でガロウに問い掛けてくる。

周りからはガロウの事を心配する声上がる。相澤先生もガロウの態度を戒めるつもりで言ったのだろう。

それに対するガロウの答えは、先生も周りの生徒達の予想を思いっきり裏切った。

「良いじゃないっすか、それ！俄然やる気が出てくる！」

その答えにここにいるガロウを除いた全員が面食らっていた。

しかし、知らないのだから仕方ない。

ガロウという男は一度とは言え、人間で有りながら人間以上の存在になった事がある事を。

数分後、ここに居る全員がガロウの実力を目の当たりにすることとなる。

体力測定 下

その場で軽く、何度か跳ねる。

最初の種目は50m走。身体は、今朝の登校のおかげである程度温まっている。何も問題ない。

「オレの番だな……」

今までで一番の記録は、真面目君——飯田天哉と言うらしい——の3秒04。

男子生徒と一緒にスタート位置につく。

——脱力だ、思いつきり力を抜く。

クラウチングスタートの形を取り、姿勢を保ちながら全身を緩める。

計測の機械からスタートの合図が出された瞬間、全身に力が込められる。

極限まで緩められた肉体が一瞬で緊張する事により生み出される、圧倒的な爆発力。

それに巨大仮想敵を粉々にする程の威力を生み出す脚力が合わされば——

「余裕、余裕ー」

「……2秒53!!」

後ろを見ればガロウがスタートした位置はひび割れて陥没している。

「超速えーな、お前!」

「ほんとに凄いよ、君!」

葉隠と瀬呂がテンションを上げながらガロウに賞賛を送る。しかし、ガロウにとっては当然の結果なので、特に何も言わない。

「この競技は飯田の奴が圧勝と思ってたんだけどなあ」

「君ってなんの個性なの?」

そう聞かれて一瞬、ガロウは戸惑った。果たして特に個性を使って無いことを正直に話すべきかどうか。

だが、これと言って不味い訳も無いので正直に口を開く。

「特に使ってねえよ。こんなもん、ただ走れば良いだけだ」

ポカン、と（恐らく葉隠も）した表情の二人の間を通り過ぎガロウは少し離れた場所に腰を下ろして様子を観察する。

個性があるからと言ってズバ抜ける訳ではない。逆を言えば個性を使えないから落ちぶれる訳では無い。

50mを必死に走っている緑髪の地味目な男子生徒を見ながら思う。もし、あの少年が個性を持つていようが、無かろうが、個性を活かせないのなら身体能力が物を言う。——個性というものに頼ろうとするから、諦めるからそうなる訳だ。心の中でそう呟いて、興味を失った様に少年から視線を逸らした。

その後行われた測定も特に大した事は無かった。

持久走の時に女子生徒がバイクを使っていた時には反則だろうと思つたが、個性で作った物であるためよしとの事だった。

しかし、特に脅威では無かった。

「次は握力か・・・」

自分の番が回ってきて握力計を渡される。

「おい、ガロウ。思いつきりな思いつきり！」

コチラに向けて声を掛けてくる瀬呂の事を無視して、少し足を開く。万力を持ち出す生徒もいるのだ、体勢がどうのこうの言われはしないだろう。

腰を落として息を大きく吸い込む。

さて、ここで質問。

パンチの強さを決める要素は何だと思うだろうか。

それは、体重・スピード・そして——

「つ——!!」

握力。

バキント、という音を立て握力計は無残にも破壊された。超絶な威力を誇るガロウのパンチ、それを生み出す一瞬の握力に中の機器が耐えられなかったのだ。

「やべ……壊しちゃった」

「……気にするな、そこに置いとけ。記録は一応、測定不能の最高にしておくよ」

「そつすか、ありがとうございます」

体育館での測定も終わり残りはハンドボール投げとなっていた。唯一、ガロウにとってイマイチだったのは長座体前屈のみである。

次の種目はハンドボール投げ。

他の生徒が投げるのを見ながらガロウはどうするべきか考える。

普通に投げてもかなりの速さで飛ぶとは思いますが、遠くに飛ばすとなると話は違ってくる。

「野球なら簡単なんだがなあ……」

呟いてふと思う。

少し考えた後にガロウは口角を僅かに持ち上げた。

「次、拳獣」

名前を呼ばれて円の中に入る。

すると何を思ったのか、ガロウはボールを真上に投げて身体を後ろに捻り沈みこませる。

周りの生徒がざわつく中、ボールがゆっくりと落ちてきて丁度地面まで2 mを切った時。

——冥躰めいていほうしようけん鳳昇拳！

辺りに響く破裂音と共に拳が突き出されソフトボールを殴り飛ばす。更に加えられた拳の回転がボールに回転を起こし、安定したボールは一直線に飛んでいった。

暫くして出た記録は——

——964 m。

「だあくソッ！四桁行かなかったか」

悔しそうにするガロウ。

落ちてくるボールを捉えて殴り飛ばす。言ってしまうえば簡単だが、いざ実行するとなれば至難の業。果たしてそれを理解している者は何人いるだろうか。

「・・・・・・・・」

ただ一人、担任の相澤だけはガロウを鋭い目で見ていた。ボールを殴り飛ばすという発想力、落ちてくるボールを捉えて殴り飛ばす技術力。

それも恐ろしかったが、何より脅威に感じたのはそんな事を練習無しで試す度胸、自分に対する絶対なる自信。

これからの成長への期待と少しの警戒を込めた視線で眺めつつ、相澤は次の生徒の名を呼ぶ。

「次、緑谷」

ガロウは視線を向ける。

明らかにその雰囲気は沈みこんでいた。そう言えば、あの少年が個性を使った所を見たことなかった。どうやら、個性がない。若しくは使えない理由があるようだ。

しかし、どうやらその表情は何かを決心したような感情を見せている。

大きく腕を振りかぶった。

「・・・・・・・・なんだ？」

しかし、結果は46m。

おかしい・・・・明らかに緑谷は何かをしようとしたはず、恐らく他の生徒もそう思っている。

何より緑谷自身が見るからに驚いてるのがその理由だ。

その疑問は意外とすぐに晴れた。

「個性を消した」

特に何も言わなかった相澤がそう言って緑谷に近付く。

個性を消す能力。なるほど、個性が発現しまくってるこの社会にとってはかなりの抑止力になるのかもしれない。

ガロウ自身に取っては大した脅威にはならないだろうが。

「個性を消す……抹消ヒーロー、イレイザーヘッド!!」

緑谷が叫んだヒーロー名に聞き覚えはない。今までで調べまくったヒーローの中には無かった筈だ。

もしかしたら、メディアなどに露出するのを避けているのかもしれない。だとしたら正しい判断だ。自らの能力を晒すなんて愚の骨頂。

相澤は緑谷を近くに引き寄せると何やら小さな声で話している。

ガロウの聴覚からすれば聞き取る事は可能だが、あえてそうしない。知ってしまったら、起こった時の楽しみが薄れるから。

「……やっと、終わったか」

暫く話し合っていたようだがようやく緑谷が円の中に入る。下を向き何やらブツブ

ツと眩いているのは単に不安だけかそれとも何か策があるのか。

どつちにしろ、次で分かる。

ボールを掴んで軽く助走して、大きく後に振りかぶる。腕が勢いよく振り抜かれていく中、ガロウはハッキリと見ていた。

ボールが離れる瞬間、最後まで触れていた指先がバリツと光ったことに。

ボールは空高く飛んでいき、暫くしてから計測の音が聞こえた。しかし、緑谷の指はポロポロになっている。

「・・・個性に身体が付いてきてないな」

だが、それを差し引いてもお釣りが来るぐらいにあの個性は強力だ。指一本分であそこまでボールを飛ばせるパワー。もしあのパワーで殴られたと想像するとゾツとする。

「まだ・・・動けます！」

目に涙を溜めながら相澤にそう訴える。

確かに指一本の怪我だけなら動ける。もしも、片腕で個性を使っていたなら他の競技が出来たかは怪しかっただろう。

指だけ犠牲にする発想に感心していた時、何故だか爆豪が叫びながら飛び出した。

何にキレているのか分からないが止めるべきかどうかどうするか悩んでいると相澤の布が爆豪に巻き付き、その動きを止めた。

「あまり個性使わせんな．．．オレはドライアイなんだ！」

それであんなに目が充血してるのか。そこだけは残念だが、個性を消す個性とあれだけの縛法の技術力、かなり相性はいいのかもしれない。

残った種目もガロウは楽々と圧倒的な記録をたたき出した。最後の結果発表の時に

「除籍は最大限を引き出す為の合理的配慮虚偽」

と言われ何名かは驚き、何名かは分かりきっていたと言ったが、あの時の先生の言葉に嘘は無かった筈だ。

つまり、全員がお眼鏡に適ったという訳だろう。

発表されたガロウの結果は圧倒的な一位。

次いで二位には創造の個性をもつ八百万という少女が入っていた。

「．．．意外と退屈しないでもいいかも知れないな」

中々に面白そうな奴らも多い。

自分の結果に満足しながら、ガロウは一足先に校舎に戻った。

戦闘訓練 上

目が覚め、ゆっくりと身体を起こす。

起きてすぐの頭痛を何とかするため暫く布団の上で座り込み、ボーとする。

何分かそうして頭の痛みが引いてから立ち上がり洗面所で歯を磨き顔を洗う。

「くそ眠い……」

何故学生はこんなにも早起しなればいけないのか。面倒に思うが、これもヒーローになる為だとガロウは勝手に考えて勝手に納得する。

「そう言えば……何で食費が置かれてるんだ？」

この世界に来てからの不思議。

家は勿論のこと生活費や個人情報など、この世界での拳獣牙狼としての個人情報はしっかりと登録されてる。

誰かがしているのか。

「……………」

大きな疑問が一瞬脳内に浮かぶが、寝起きの頭で考えるのは諦め学校に向けて家を出た。

道を歩いていくのも面倒なので先日と同じようにベランダから飛び出し、電柱や屋根の上を飛び跳ねながら学校へと向かう。

「ん？あれって確か・・・」

学校の目の前に到着し校門をくぐるとちようど目の前に見覚えのある、緑髪のモサモサ頭の少年、緑谷が歩いていた。

「どうやら後ろに居るガロウの存在に気付いていない、と言うより他の事に意識がいていない。」

「電子レンジ・・・卵が爆発しないようにするには・・・、殻となる身体を鍛える、それともワットを下げるべきなのかな。・・・あまりに抽象的で掴めてない・・・身体を鍛えるのは別として考えるとやっぱり技術力を上げるべきなのかな？」

「・・・こわっ。」

緑谷の独り言に対する不気味さが勝り、ガロウは声を掛けるのをやめて追い越し、教室に向かう。

少し興味があつたが、あんな状態の人物に声を掛ければどうなるのかガロウにも想像出来ない。

「オッス、ガロウ」

「よお」

教室に入つて早々、瀬呂から声を掛けられて短く挨拶を交わす。そして席に座ろうとする。

「なああんたは、おっぱい好きか？」

「・・・何言つてんだお前？」

名も知らない小柄な少年が近付いてきて声を掛けられたと思つたら、突然妙な事を聞かれ思つた疑問がそのまま口から出た。

「だから、可愛い女の子のおっぱいは好きかつて聞いているんだよ」

「ちよつと待て、質問の意味は分かる。だが、その前にお前誰だよ？」

「俺の名前は峰田実。で、おっぱい好きか？」

「ーーぐいぐい来るな、こいつ。」

いきなりの非常識な質問に戸惑いながらガロウは考える。

「別にんなもんに興味はねえよ」

そう答えればこのよく分からない少年も自分の席に戻るだろうとガロウは思った。

しかし、少年、峰田は席に戻ることなくその場に留まり先ほどのガロウの言葉を否定する。

「いいや、オレには分かるね。絶対お前はおっぱい好きだ」

「いい加減にしないと殴るぞ?」

「・・・おい、そこ二人。早く席につけ」

どうするべきか悩んでいると、丁度相澤先生が教室に入ってきて、何とか峰田を引き剥がすことに成功した。

午前中は普通の授業。

普通の授業もプロヒーローが行うのは意外だった。だが、それ以外に特に目立った所はなく午前中の時間は過ぎていった。

「さーてと、飯だ飯」

授業が終わると同時に誰よりも早くガロウは食堂に足を運ぶ。その後、有り得ないほどの量の昼食をたいらげるガロウの姿が色んな生徒に目撃され、フードファイターとして噂されることになる。



「わーたーしーがーしー、普通にドアから来た!!」

高笑いしながら大声を上げてNO・1ヒーロー、オールマイトが教室に入ってきた。その様子はガロウの目に些か滑稽に映る。

「……これが、NO・1ヒーローなのか？」

浮かんで来た疑問。しかし、それを頭から振り払う。

見た目と強さは比例しない。もしそれで足元をすくわれれば滑稽なのは自分の方だ。

「オールマイトだ……！すげえ！」

「シルバー時代のコスチュームだ！画風が違うぜ!!」

どうやら午後からの授業、ヒーロー科にのみ存在する「ヒーロー基礎学」はオールマイトが担当の教師となるようだ。

この授業、実はガロウも少し楽しみにしていた。別にオールマイトに教えてもらえるからではない。自身のヒーローとしての人生、その大きな一歩になるという意味合いで楽しみだった。

「ヒーロー学、それはヒーローの素地を作る為に様々な演習を行う。」

そして、今日行うのは戦闘訓練!!」

「っ……」

戦闘訓練と聞きガロウの心が僅かに沸き立つ。しかし、表情に出す様なことはしな

い。

「そして、それに伴って・・・これだ!!」

オールマイトがリモコンを操作すると壁が動き出し人数分のケースが出てきた。

「入学前に送ってもらった要望に沿ってあつらえた、君たち専用のコスチュームだ!!」

「「オオオオオオオオ!!」」

教室が喜びの声で沸き立つ。

確かにコスチュームはヒーローには不可欠な要素であると同時に戦いを上手く行うためのキーアイテム。

こればかりにはガロウも僅かにテンションが上がり、口角を上げる。

「・・・バツチリだな」

ケースを開けると、要望に沿って完璧に作り上げられたコスチュームが入っていた。不備があつたらどうするかなどと考えていたが、そこは流石の雄英高校、心配する必要などなかったようだ。

「着替えたら順次グラウンドβに集まるように!」

「はい!!」

オールマイトの言葉に全員が返事して、更衣室に移動する。

「ガロウはどんなコスチュームなんだ?」

着替えようとした時、後から峰田にそう聞かれた。後ろを向くと他にも何人かコチラに目を向けており、何とも断りづらい。

「……これだ」

「黒……だな」

「なんと言うか、意外っつか」

「地味だな」

目線に負けてコスチュームを見せてみれば良く知らない奴からもダメ出しをくらい、少し切れそうになる。

「見せろって言って、その反応はないだろ。と言うより、峰田以外のお前らは誰だ？」

「ああ、悪い悪い。オレは上鳴電気、これから宜しくな」

「オレは切島鋭児郎だ！個性把握テストの時は驚いたぜ！」

「……拳獣牙狼だ。ガロウでいい」

パツパツと自己紹介を終わらせて服を脱ぎ、コスチュームを着ようとして、まだ視線が突き刺さつてることに気付く。

「まだなんか用か？」

「いや、筋肉がすげえと思つてよ」

「ザ・オトコ!!」って感じだな」

「・・・凄くもなんともねえよ。必要だったから筋肉が付いただけの話だ」

二人からの賞賛を受けて不思議とガロウは嬉しく思う。思えば最後に褒められたことなど何時だったか思い出せない。

悪い気はしなかった。

「つて、時間時間！遅れるぞ、ガロウ！」

「誰のせいだと思ってる！」

急いで着替えを済まし、駆け足でグラランドに出る。会話のせいで大分遅くなってしまうようだ。

「やつほーガロウ君！君のコスチューム変わってるね！」

葉隠に声をかけられ見渡せば全員、様々なコスチュームを身にまとっている。が、確かにその中でもガロウは異質なのかもしれない。

上下共に黒一色で統一しており、マントなどの装飾品の様なものは一切ない。付いているものと言えば腰部分にいくつかある、小さなポツケのみだ。

「ホントだ、変わってるね。あ、ウチは耳郎響香宜しく！」

「拳獣牙狼だ」

「オツケー。んじゃ、葉隠みたいにガロウって呼ぶよ」

明るく自己紹介した少女は耳郎響香と言うらしい。

ガロウの興味は耳郎が履いている靴に移り、次いで耳たぶから伸びているイヤホンジャックに移る。それだけで、耳郎が音に関連する個性とすることはよく分かった。

「しっかしなあ、黒一色って地味じゃね？」

「見た目は関係ない」

失礼なことを言う上鳴にそう返す。

「オレは身体を激しく動かすから、これ以上の付属品は要らねえ。それにこの布一枚とっただけでも、耐刃、耐寒、耐熱、それにしても筋肉の動きをサポートする役目もある」

「へえ、意外と多機能的なんだな」

「そういう事だ」

上鳴が感心したように頷いていると、オールマイトがみんなの前に立っていた。

皆の視線がそちらに向く。

「始めようか有精卵共!! 戦闘訓練の時間だ!!」

オールマイトの言葉に周りが一斉に沸き立つ。すると一人の生徒がビシツと手を挙げた。

「先生！また、入試と同様に市街地演習を行うのでしょうか？」

コスチュームのせいで顔は見えないが礼儀正しい物言いで、あれが飯田と言うこ

とが分かる。

そしてオールマイトは声を上げて応えた。

「いいや！さらに奥に踏み込む！今回行うのは屋内での対人戦闘訓練だ!!」

戦闘訓練 中

「2対2で屋内戦をしてもらおう!!」

「基礎訓練もなしに行うのですか?」

オールマイトの言葉に一人の少女（確か蛙吹梅雨で言ったか）が手を上げて質問する。それに対してオールマイトはグツと拳を握りしめながら説明する。

「その基礎を知るための訓練さ!」

ただし、今度はぶつ壊せば良いだけのロボットでは無いのがミソ!」

「勝敗のシステムはどうなるんですか!」

「相澤先生みたいに除籍はあるんですか?」

「どのように分かれれば良いのでしょうか?」

「ねえ、このマントヤバくない?」

一人の質問をきっつけかけに多くの手が上がりオールマイトに質問が投げ掛けられるが、いっぺんに言われて答えられるわけではない。

「ん〜・・・聖徳太子!!」

ほら、やっぱりな。

全部の言葉を聞き取れなかったオールマイトはポケットから紙を取り出してそれを見ながら話し始める。

ヒーローカンペかよ・・・。

だが、今年初めて雄英高校の教師についたのだ。いかにNO.1ヒーローと言っても新人教師なら仕方がないのかもしれない。

「状況設定としては「敵」がアジトに「核兵器」を隠しており、「ヒーロー」は核を回収しなければ行けない。

ヒーローは制限時間以内に核兵器を回収するか、敵を捕まえれば勝利。敵はその逆で、時間いっぱい核兵器を守りきるかヒーローを捕まえれば勝利!」

どこかのゲームみたいな設定だとガロウは思う。

「因みにコンビと対戦相手はクジで決めるからな!」

「先生、クラスの人数は奇数でそれだと一人余ることになるのですがどうするんですか?」

「その事についてだが・・・」

オールマイトはそこで言葉を区切ると何故かガロウに近付き、その肩に手をポンと置

いた。

「拳獣少年には一人で戦ってもらおうと思う。行けるかい？」

「まあ・・・大丈夫です」

思いもよらぬ言葉に少し驚きはしたが、特に問題は無いのでオールマイトの提案をガロウは簡単に了承した。

「という訳で、拳獣少年の相手は――」

「先生！何故、ガロウ君だけひとりなのでしょうか？この場合はどこかのチームに入れて3対2とした方が良いのでは？」

「――まあ、そう思うよな。」

飯田がオールマイトの提案に疑問を示す。飯田以外も何故、という風な顔でオールマイトのことを見ている。

「うむうむ！飯田少年の言うことももつともだ！生徒一人を特別扱いする訳では無いが、拳獣少年の入試と個性把握の結果から見てこうしても大丈夫だと判断した！」

「それでは、ガロウ君の相手はどうなるんですか？」

「うむ！拳獣少年の相手は今からやる組とは関係なく、二回やってもらおうを――」
「オレにやらせろや！オールマイト！」

突然、オールマイトの言葉を遮るようにして誰かが叫びながら一步前が出る。

爆発したような髪の毛に、凶悪な目付き、パツと見た感じはヴィランにも見えなくもない爆豪が自ら前に出た。

「いいよな、割れ髪野郎?」

「……割れ髪……?」

こちらを睨んでそう言ってくる爆豪。

ガロウにとつては別に問題無いので承諾しようとした時、別の人物が前に出た。

「オレにもやらせろ」

身体の半分を氷に覆われた少年「……確か轟とか言ったはず……」が爆豪より一歩前に出てそう言う。

「おいテメエ!俺より前に入るんじゃねえよ、半分野郎!!」

「……」

「無視してんじゃねえ!!」

険悪、それが二人の印象だった。

こんな二人がチームプレー等、果たして出来るのであろうかという疑問が真っ先に浮かぶ。

だが、そんな事はガロウにとつて関係ない。戦う以上は叩き潰すだけ。

「よし、ならば全ての組が終わったあとに拳闘少年には爆豪少年と轟少年のチームと

戦ってもらおう！」

「・・・うっす」

「全力でぶっ殺す！」

ヒーローらしからぬ発言と共に爆豪は掌で小さな爆発を起こす。轟はただ静かにたっている。

対照的な二人だ。

「それではチームと対戦相手を決めよう！」

オールマイトは何処からか箱を取り出して皆にクジを引かせていく。そして全員がクジを引き終わってから別の二つの箱を取り出し、それに両手を突っ込んだ。

「最初の対戦は・・・こいつらだ!! Aチームがヒーロー、Dチームが敵だ!!」

オールマイトによって引き当てられたのは、緑谷と麗日のAチームと爆豪と飯田のDチーム。

さてさて、この勝負はどうなるのか。

爆豪は何を思っているのかは知らないが緑谷を睨みつけているし、緑谷はそれに対して何処かオドオドしていた。

「よし！それでは準備と移動をしようか!!」

まずビルに入るのは敵側。核の位置をセッティングしたり作戦を話し合ったりする。

暫く時間が経った後、ヒーロー側が建物に突入。核の回収に向かい、敵はそれを阻止する。

非常に分かりやすくていい。

そして、戦闘訓練をしない生徒達は別室のモニターで訓練の様子を観察する。

———実力はどんなもんか………。

はじまりの合図と共にヒーローは慎重に建物に入り、核のある場所を探し始める。

定石にそった動きを見せる、悪くは無い。

対する敵チームは対照的で爆豪が飯田の静止を振り切り一人で部屋を飛び出したの階層に向かう。

どうやら奇襲をするつもりらしい。

「なあ、ガロウ。どっちが勝つと思う?」

いつの間に隣に來たのか瀬呂が画面に向けていた視線をこちらに向けて訪ねてきた。自分で考えるべきだろうに。

「実力で見れば敵チームだろ。麗日の個性についてはあんま知らないけど、緑谷の個性は諸刃の剣で使にくい。」

だが、爆豪の虚を上手くつけば勝つことだって出来るだろうな」
「流石の観察眼で」

感心したように瀬呂は呟くがガロウにとつて瀬呂の評価など興味が無い。

いま興味があるのは行われている戦闘訓練だけだ。

「ああ！爆豪のヤツ、奇襲とかズツケエ!!」

画面に目線を戻すと丁度爆豪が緑谷に奇襲を仕掛けたところだった。緑谷はギリギリの所で避けたようだが、爆炎が掠めたマスクの片側が焼け焦げて無くなってる。

奇襲がずるい……その言葉で程度が知れる。

「奇襲も戦略さ！彼等は今、実戦の真つ最中なんだぜ？」

オールマイトの言葉はもつともだ。

まあ、恐らくあの爆豪の奇襲は考えて行ったものとは言えないのかもしれないが。

飯田に言つてない時点で、それは一個人による勝手な行動。成功すればいいものの、こうして奇襲して誰も倒せてないのだから目も当てられない。

その場を離れて核に向かう麗日など気にもせずただひたすら緑谷を狙おうとする。

何か理由があるのかも知れないが、ハッキリ言つて馬鹿だ。そうこうしている間にも麗日は核の方に向かってるといふのに。

「うおつ、すつげえ！」

「やるなあ、緑谷」

ワアツ、と歓声が上がった。緑谷が爆豪の腕をつかみ綺麗な一本背負いを決めた所

だった。

焦り、手を爆発させながら振るった攻撃を緑谷は冷静に避けてその場から離脱する。そして、爆豪はそれを追う。

「――核の所に戻れば麗日を挟めるのに。」

才能は確かにある。しかし、冷静に動けないその性格が爆豪の全てを台無しにしている。

そう感じたガロウは短くため息をついた。

だがその後は冷静さを取り戻したのか中々にセンスのある戦いを見せてくれている。

一回だけ見せた超高威力広範囲の爆破には特に驚いた。だが、オールマイトに注意されて今後は使えないようだが特に問題は無いだろう。

「目くらましを兼ねた爆破で軌道を変更している……。考えるタイプには見えないが意外と繊細な動きをしてるな」

「左右での爆破の微調整も必要ですしね」

「緑谷君がカウンター狙っても即座に反応」

「才能マンだ才能マン、ヤダヤダ……」

感嘆の声を上げるのは構わないが、ボヤクのなら他所でやってほしいと声に出さぬように心の内で思う。

実力を理解しようとする奴は、その実力を得ることは出来ない。

「……………そろそろ、終わりか？」

呟きとともにモニターをじっと見つめる。じりじりと緑谷が爆豪に追い詰められていた。このまま行けば緑谷の負けは決定的、しかし、緑谷はまだ個性を使っていない。

恐らく、怪我の事を考えてギリギリまで使わない腹積もりなのだろう。

やがて、決心したのか緑谷が爆豪に向かって駆け出し、それに合わせるように爆豪も緑谷に肉薄する。互いに拳を振り上げながら、やがて射程圏に入った。

「……っ！」

そこでガロウはハッキリ見た。緑谷は構えを既のところであッパーをするように変える。

何故……。

その答えは直ぐに出た。

「……………なるほどな」

緑谷が放った個性による一撃は建物の天井を何枚もぶち抜き、やがて麗日と飯田が対峙している部屋、つまり核のある部屋まで達した。

突如のことに飯田は対応出来ず、その隙を突いた麗日が核を回収。

「ヒーローチーム、WIN!!」

オールマイトがヒーローチームの勝利を知らせて、彼等呼び戻しに出ていく。演習の内容からしたら緑谷も爆豪もとても褒められたものではない。

しかし、爆豪の戦闘センス、緑谷の機転の良さ。意外とこの二人はいいコンビになるかもしれない。

そう思いながらガロウは欠伸をした。

戦闘訓練 中の二

「勝ったのはヒーローチームだが、今回のベストは飯田少年だな!!」

「勝ったお茶子ちゃんか緑谷ちゃんじゃないの?」

オールマイトは指を左右に振りながら、残念ながら違うと言う。

「さてさて、この中で何故そうじゃないのか、分かる人は居るかなあ?」

「はい、オールマイト先生」

オールマイトの質問に八百万が手を上げるのを、ガロウはつまらないと思いつつ壁にもたれ掛かって見ていた。

「それは飯田さんが最も適切な行動をしていたからですわ。まず、爆豪さんの行動は完全なる独断。それに、これは緑谷さんも同様ですが屋内での大規模な破壊は愚策。

ハリボテを核として扱っていませんでした。もしもアレが本物の核だとしたなら、あんな風な戦闘はしてはいけません。飯田さんはハリボテをただ一人だけ核として扱っていたからあのような形で奪われた。ヒーロー側は反則勝ちのようなものですわ」

「せ、正解だぜ……くうく……」

最後は自分で締めたかったのだから八百方に思ったよりも全て言われてしまったオールマイトは悔しそうに八百万を褒めた。

確かに八百万の意見は正しい。だが、飯田も結局の所は核を奪われた。正しい行動であつたとしても、だ。

「まあ、そんな所だな！という訳で、この後に戦闘訓練をする皆はその事を考えて、ハリボテでも本物の核として扱うように!!」

そう言つてオールマイトは再び二つの箱の中からクジを抜き取り次の対戦相手を決めていく。

「……退屈だな……」

別のペア同士が戦うのをモニターを通してみていたガロウは、もう何回目になるか分からない欠伸を上げて臉を擦る。

はつきり言つて飽きてきていた。珍しく、強そうな個性は何人かいる。だが、結局の所は学生であり戦闘面から学べることはない。

「拳獣さん、最後とはいえ流石に気を抜き過ぎですわ」

「んあ？」

降り掛かってきた声に反応して無意識の内に閉じていた瞼を開け横を見ると、先程見事な回答を述べた八百万がこちらを睨んでいる。

「……べつつに良いだろ……見てたって意味ねえよ」

関係ない、とガロウは一蹴したつもりだったがどうやらガロウのその態度が八百万の何かに火を点けたようである。

「意味無いとは何ですか！ヒーローとは常に向上する者、していく者の事ですわ！」

「知ってるっての、んな事」

「でしたら——」

「しっかりと観察して、意味が無いとしか思えない。そう結論が出てんだから仕方ねえだろ？」

「……………」

当然の様に堂々と言い張るガロウに対して、八百万の口からは次の言葉が出てこなかった。

そうしてガロウの言葉により突然生まれた沈黙を意外な人物が破る。

「聞き捨てならねえな、拳獣」

それは戦闘訓練を終えて戻ってきた轟だった。

「これが終わった後に戦う相手にも、興味なしか？」

「そう聞こえたんなら、謝るが？」

「・・・随分余裕だな？」

「おう。と言うより楽勝だと思ってる」

ガロウは不敵に笑って、轟はその顔に僅かに怒りのこもった感情を露わにする。違う感情の灯った二人の目が交差し合う。

「拳獣・・・お前、個性把握テストの時のアレ、本気でやってたのか？」

「さあ・・・どうだろうな？」

「まあ、いい・・・この後の時は本気出せよ」

視線を逸らして後ろを向き、轟は場を去っていく。

「お互いになあ」

そんな背中に向けて、ガロウは笑いながら声を掛ける。その瞬間、轟の肩が僅かに動いたのをガロウは見逃さない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ガロウの言葉に轟は何も返さなかった。

「さあーと、どうすつかなあ」

目の前にはロケットの形を模したハリボテの核。戦闘訓練の最後を締めくくる戦いでガロウはヴィラン側になった。

あと少しすれば爆豪と轟がここに攻め入ってくる。

「核は一番上のここに置いたままにして・・・下に降りるか」

爆豪と轟、二人の性格を考えてみるとガロウ自身を避けて核に向かうことはまず考えにくい。

「・・・階段、壊しとくか」

少しの時間稼ぎのつもりでガロウは下に降りながら階段を壊して上に上がれないようにする。

「・・・こんなもんだな」

数分もしないうちにガロウはビルの一階にたどり着き、階段があつた場所は無数の瓦礫で埋もれていた。

「――敵のお二人方は、どうしてるかね・・・」

一階の構造を確かめるために歩き出したガロウはふと、そんな事を考えていた。

◎

「……む、無茶苦茶するなあ、拳獣少年……」

モニターに映るガロウが階段を全て壊し終えた所を見ながら、オールマイトは額に一筋の汗を流していた。

足止めの為とはいえ、階段を壊すという行動を取ったのはガロウが初めてだからだ。

「……って、次は壁を壊してるし！」

そんなオールマイトの少しの驚きなど気にもせずモニターに映るガロウが今度は部屋と部屋を区切る壁を破壊し始めた。

「うお！ガロウの奴、素手で壁を壊してる」

「オレみたいに硬化の個性でも無いのに、痛くねえのかな？」

生徒の何人かもガロウの行動に驚いたり疑問を抱いたりしていた。

「オールマイト先生！」

「ん？どうかしたかい、飯田少年！」

「建物の被害は最小限にするように仰っていた筈ですが、拳獣君のあの行動はどのようなのでしょうか？」

なるほど、飯田の質問ももつともである。誰から見ても今のガロウの行動はただただ

建物を破壊してただけにしか見えない。

オールマイトは、いい質問だ！と言ってから言葉が続ける。

「飯田少年の質問ももつともだな！だが、映像をよく見てみるんだ。拳獣少年が壊しているのは部屋と部屋を区切っている壁だけであって、柱などは壊していないだろう？」

「どうやら、ちゃんと建物にダメージがない程度で自分の戦いやすいステージを作っているようだぜ！」

「な、なるほど」

「……まあ、階段の破壊はやり過ぎかも知れないが……」

もし、轟か爆豪のどちらかが何らかの方法で上の階に行ってしまったら、階段を壊してしまつたガロウにそれを追う手段はない。

だが、ガロウがそんな事も考えずに階段を壊す訳がないとオールマイトは思っている。万が一、その様な状況になつたとしてもガロウならば対応出来る。

根拠は無い確信がオールマイトの心の中にはあつた。

「……さてさて、対戦相手の轟少年と爆豪少年は……」

『だから、オレが相手するって言つてんだろおが！半分野郎!!』

『いや、アイツの相手はオレがする』

「……やっぱりか!!」

半分、いや殆ど予想通りだった二人の現状に思わずオールマイトは心の中で突っ込んだ。

チームという事を少しも感じさせない二人。

「相変わらずだな、爆豪の奴・・・」

「轟さんも轟さんですわ。何を張り合っているのか・・・」

「ケロ。二人ともプライドが高すぎるからじゃないかしら？」

「だろうなあ・・・二人とも実力はあるのによ」

生徒達が言うことは的を得ていた。二人とも実力はある。それこそ、充分すぎるほどに。しかし、それ故に我が強いのだ。

「けど、それ以上にオレはガロウの方が気になるな」

「ケロ。上鳴ちゃんの言う通りね。拳獣ちゃん、本当に一人で大丈夫なのかしら？」

「個性把握の時は圧倒的だったけどなあ」

オールマイトも生徒達も改めてモニターのガロウに注目する。丁度、最後の一枚の壁をぶち抜いて準備が完了した所だった。

「なら、皆はそれを含めてよく見ておくように！結果がどうなるにせよ、きつと君たちにとって何かプラスになる筈だ！」



「よし、広くなった広くなった」

ホコリを払いながらガロウはぐるりと周りを見渡して呟く。

廊下と部屋を区切る壁は一切なくなり、残っているのは柱のみでもしもの時はそれを盾にすれば戦いやすい。

「……どう攻めてくるか……」

一応入口には階段の瓦礫をいくつか積み上げてバリエードを作っているが、直ぐに壊されるだろう。

警戒すべきは轟の氷結。

手足を凍らされた位であれば何とか対応できるかも知れないが、全身を凍らされれば脱出は難しいかもしれない。

そこまで考えたところで、オールマイトの開始の音が響いた。

それと同時に、辺りの気温がガクンと下がったようにガロウは感じた。

「……………来たか」

轟の水結が来ると警戒した時、入口にあつた瓦礫が爆発とともにガロウに向かつて吹き飛んでくる。

そして、ほぼ同じタイミングで壁を、天井を、床を氷がこちらに向かつて来た。

「おっ、意外と連携？」

瓦礫と氷が迫ってくる。

しかし、ガロウは慌てない。

タンツ、とその場で飛び上がり氷を回避しながら空中で向かつてくる瓦礫を砕き、流し、避ける。床を陥没させる程のガロウの脚力がこの浮遊時間を生み出す。

全ての脅威を空中でやり過ぎし氷漬けの床に着地した時、既に轟と爆豪の二人は入口よりこちら側に立っていた。

「んじゃ、始めますか」

戦闘訓練 下

「んじゃ、始めますか」

爆豪と轟の二人の前でガロウはゆっくりと構えた。その動きは非常に緩やかで、落ち着きがある。

だからこそだろうか、その余裕すら感じる動きを見て二人は僅かな苛立ちを感じた。

「随分と余裕そうじゃねえか、割れ髪野郎！」

叫びながら突っ込んで来たのは爆豪。

爆発の個性をフル活用しながら踏み込みなしで向かって来ており、轟は横に回り込もうとしている。

「死ねやあ!!」

爆発の勢いを利用して振り下ろされた拳を苦もなく避けるが、爆豪は避けられた拳を軸にして回し蹴りを放ってくる。

「よつと」

だが、ガロウからすれば別段気にするほどの攻撃でもなく上体を逸らすだけで避け、そこからバク転の要領で爆豪の顎を蹴り上げる。

「・・・凍れ」

気付けば直ぐそこまで氷が迫って来ていた。横まで回り込んで来た轟が使う、爆豪を巻き込まないようにした氷結。しかし、それ故に威力を抑えられているそれをガロウは当たり前のように躲す。

「邪魔してんじゃねえぞ、半分野郎!!」

「こつちのセリフだ」

「・・・チームワークの欠片も無いな」

お互いに悪態をつきあう轟と爆豪、そしてそれを呆れたような顔で見て思った事を呟くガロウ。

「・・・試験じゃ無けりや、死んでるな。」

爆豪が反応するより早く胸に蹴りを叩き込み、轟の顎を拳で撃ち抜く。

僅かな時間とはいえガロウから意識を逸らした二人にこれを防ぐことは出来なかった。

「おいおい、大口叩いてた割にはこんなもんかよ?」

膝と手をつき倒れ込む二人に対して、嘲笑うかのようにガロウは言い放つ。

二人はその言葉に反応するように腕と脚に力を込めて立ち上がった。

「誰が、こんなもんだって？ 割れ髪野郎!!」

そしてやはりと言うか、先に飛び出したのは爆豪だった。

だが、前に飛び出したせいで轟が高威力広範囲の氷結の発動を中断した事に気付いていない。

「視野が狭いな、爆豪」

呆れた様に言いながら突っ込んでくる爆豪にタイミングを合わせカウンターを叩き込むために拳を振るう。

「つーー!!」

が、その拳が爆豪を打つことは無かった。

爆発と共に爆豪の身体が宙を舞い、ガロウの頭上を飛び越えて後に回り込む。

そして、僅かの間も作らずに爆発。

「へえ……」

頬が僅かに緩む。

衝撃は僅かにあれど、熱によるダメージはコスチュームに防がれそれほど無い。しかし、笑みの理由はコスチュームの性能が凄かったからでは断じて無い。

初めて攻撃を防いだ。防御を強いられた事に頬が緩んだのだ。

「が、二度は受けない」

爆豪に狙いを定め飛びかかろうとして足を止める。いや、足が動かなかった。

見れば右足首から下が凍り付いていた。

「ギリギリ、間に合ったな」

「……なるほど、爆豪の攻撃を陽動に」

「……爆豪を上手く利用したな。」

性格から考えてこの二人が協力する事は無いと考えていたガロウは虚をつかれた。

「あんまり、動かない方がいいぞ。足の皮が剥がれる」

「てめえ、邪魔すんじゃないやねえよ半分野郎！」

「……………」

「無視かよー！」

なるほどなるほど、確かにこれでは逃げることはおろか動く事さえ出来ないだろう。

「オレじゃ無かったら、の話だけだな」

「つーー！？」

筋肉を小刻みに運動させて体温を上げることなどガロウには簡単なことで、氷を僅かに溶かし無理やり足を引き抜いた。

そして爆豪の腕を掴んで轟に向けて投げ飛ばし、壁を壊した時に出た瓦礫を蹴り飛ば

して追い討ち。

「クソがア!!」

「っ!!」

爆豪は爆破で、轟は氷の壁で飛んでくる瓦礫を防いだが、その隙にガロウは二人の背後をとっている。

「っぐ!?!」

「がっ!?!」

その事に気付いたのはガロウに殴り飛ばされた時だ。

「どうした? 訓練とは言え、ヒーローにしては手応えがねえな」

「……死ねえ!!」

素早く体勢を立て直した爆豪の爆発と爆炎がガロウに迫るが真上に飛んで躲す。だが、どうやらその攻撃は陽動だったようで爆豪は既に右手で拳を握りしめて待ち構えていた。

「くたばれや!!」

「くたばらねえよ」

すぐ近くにあった柱を片手で力一杯に掴む。

すると、重力に従って地面に着地する筈だったガロウの身体が空中でピタリと止まっ

た。

よって、爆豪の拳は何も無い空を爆発と一緒に打ち抜いた。拳を振り抜いた爆豪は、格好の的。

「……では無かった。」

「おつらあ!!」

「……へえ」

爆発で身体を無理やり回転させて上、つまり空中に居るガロウに身体の正面を向けて掌をかざす。

そして、爆発。

腕を交差させて防ぐが、ガロウの身体は数メートル程吹き飛ばされた。

「……っ」

そのタイミングを見逃さず、轟がすかさず氷結を発動させる。

が、僅かに遅く、体勢を立て直していたガロウは柱を足場にして轟の攻撃を躲した。着地し、二人と正対。

「今の攻撃、中々良かったぞ」

肩で息をする爆豪と轟の二人に対して、肩を回して賞賛の声を送るガロウ。

爆豪も轟も、観戦しているオールマイトや他の生徒達も馬鹿ではない。

故に感じ始めていた。

圧倒的なガロウの実力を。

「次は、どうするんだ？」

だからと言つて諦めるほど、二人は弱腰ではない。負けを簡単に受け入れる程、プライドは低くない。

「ぶっ殺す!!」

やはり先に飛び出したのは爆豪。

そのせいで先程も轟が氷結を使えずにいた。

「合わせろや、半分野郎!!」

だが、今度は違った。

悔しさを顔に浮かび上がらせながら爆豪はそう叫び、同時に爆発で空中に飛ぶ。

爆豪の意図を察した轟は最速で氷結を発動させた。

「そう来たか」

爆豪を追い抜き、床を這つて迫ってくる氷をガロウは跳んで避けるしかない。

「死ね、割れ髪!!」

結果、空中に跳び上がったガロウを待っていたのは迫り来る爆豪の拳だった。

「――柱は……。」

見れば柱にも氷が登って来ており、この状態で掴めばわずかな間とは言え動きを止められてしまう。

今の状況でそれは避けたい。

「仕方ないか……。」

目前に迫る爆豪の拳に、ガロウはそつと自身の手を触れさせる。

「――流水岩碎拳。」

腕を弾く音もなく、静かに爆豪の拳が狙いを逸らされる。

「……んだと」

爆豪の表情が驚きで染まると同時に、ガロウが拳を爆豪の鳩尾に深々と打ち込む。

完全に凍り付いた地面に着地して、倒れ込む爆豪を横目に地を蹴った。

「ぐっう!?!」

一瞬で轟と間合いを詰めると、個性を発動させる時間も与えずに爆豪と同じように鳩尾に拳をめり込ませた。

「個性なんてモンに頼りすぎるから、そうなる」

倒れる二人に対して、呟くようにガロウは吐き捨てる。

それと同時にオールマイトの時間切れを知らせる声が、響き渡った。



「……恐ろしい程の才能！」

全ての戦いを見届けたオールマイトは静かに戦慄していた。爆豪も轟も実力が無い訳では無い。むしろかなりの実力者だ。

しかし、その二人を二対一という圧倒的不利な状況にも関わらず打ちのめした。

「……しかも、余力は有りかよ！」

息すらきらさずに建物から出ていくガロウのその姿。

正しく、圧倒的。

「め、めちやくちやだな、ガロウって」

「才能マンの二人がやられるとか、どれ程の才能マンだよ、アイツ……」

それを感じているのは生徒達も同様であった。

「どれだけの鍛錬を積んであそこまでの実力に迫り着いたのか、オールマイトにさえ想像する事が出来ないでいた。ただ一つ分かるのは、彼の力が紛うことなき本物とい

う事だけである。

オールマイトはガロウがヒーローを目指している事に心の底から安堵したのだった。
ヒーローどうか、彼が素晴らしいヒーローになる事を願おう。

訓練を終え・・・

不機嫌オーラを漂わせながら爆豪は歩いていた。それはもう、触れれば核レベルの爆発が起きそうなレベルだ。

一つ目のイライラの理由は入試が一位通過では無かったこと。

今までずっと自分が一番だった。何でもでき、雄英高校と言うヒーローを憧れるものにとつて最高峰の学校にも入学を果たした。

しかし、入試一位という称号、それが自分のものではないと知った時にかなりのショックを受けた。

それ程の衝撃。

本来、自分自身が立つべき場所に立ったのは特に珍しくもない普通の男。だが、爆豪は直ぐに突つかかることはせずに静かに観察した。

個性把握テストで直ぐに実力を見せつけられた。自分が出した記録を軽々と抜いていく姿を見て拳を握りしめた、歯を食いしばった。

しかも、その後に見せられた有り得るはずの無い緑谷の個性。今まで何ともなかった者の急成長が、爆豪を更に精神的に追い詰めた。

「……クソがあ……」。

今日の戦闘訓練を思い出し、さらに拳に力を込め握りしめる。

緑谷に虚を突かれて敗れた。

更にその後の事だ。

不本意ながらも轟と協力して、二対一という形でガロウと戦った。絶対的に有利な条件、勝てるはずだった。そう信じて疑わなかった。

しかし、結果は完全敗北。

なにか出来たわけでもなく、抵抗という抵抗も出来ないままに倒された。

舐めていた訳では無い。寧ろ全力で叩き潰してやるつもりだった。それでも負けた。今までなんでも一番だった故に、ショックだった。

「……クソが」

小さな声を吐き出して爆豪は足を進めようとして、足を止めて振り返る。

そして苛立ちのこもった目で自身を呼び止めた緑谷を睨んだ。



「離してくれよ、オールマイト。歩けねえ」

オールマイトの手を払って歩いていく爆豪の後ろ姿を緑谷はただ見つめていた。

自身の憧れが初めて見せる様な表情を見た。

「なんか・・・大丈夫、みたいだね」

決まりの悪そうな顔をしたオールマイトが腰に手を当てながらこちらに振り向いた。

オールマイトも緑谷の憧れであるが、爆豪もその対象だ。むしろ爆豪の方が緑谷にとって身近な存在である分、影響力は大きかった。

その爆豪を倒した少年の姿を緑谷は思い浮かべていた。

「緑谷少年も、そろそろ帰った方が・・・」

「かつちゃんを圧倒する戦闘センスを裏付けているのはなんだ？個性？技術・・・。いや、明らかにあの身体能力は常人のものじゃ無かったからだとしたらやっぱり個性？見るからには強化型の個性だろうけど、格闘技みたいな動きもしていたし・・・。その両方か？

いや待てよ、轟君の氷結を喰らっても直ぐに抜け出していたし・・・ただの身体能力

でそんなことが可能なのか？」

「……怖いっ！」

緑谷の絶え間ない独り言にビビりながら、オールマイトは率直にそう思った。

「お、おーい、緑谷少年？そろそろ君も帰宅した方が……」

「いや、けどやっぱり……ブツブツ……」

「緑谷少年！」

「へっ!?あ、オールマイト！」

何度目かの呼びかけでやっとな緑谷の意識が目の中のオールマイトへと向いた。

「拳獣少年のことが気になるかい？」

「え？は、はい、なんで知って……」

「うん、緑谷少年はもう少し考え事をする時は気をつけた方がいいかもな」

H A H A H A！と笑いながらオールマイトは話を続ける。

「拳獣少年のことは私も気になっている」

「オールマイトもですか？」

「如何にも！緑谷少年は彼を見てどう思った？」

「率直に言うのと、凄いと思いました。ただ凄いんじゃないかって、めちやくちやに……」

緑谷の言葉に頷きながら、オールマイトは続きを促す。

「増強型の個性と言う面では僕と一緒になのかもしれないけど、それ以前として体の使い方や身のこなしが一つ一つ洗練されていて……」

「とても今の僕では追いつけないって」

「確かに、今の君では無理だろうな！」

「ぐはっ！そんなハッキリ……」

「だがしかし！」

「ビシイッ!!と効果音が付くほどに真っ直ぐ伸ばした腕と人差し指を緑谷に向けて言い放つ。

「拳獣少年も君と同じ人間！そして君も増強型の個性だ！……つまり!!——」

「僕も努力次第でアソコまでやれる！」

「あ、それ私のセリフ……」

「気まずさを払い除けるように二度三度咳払いをしたオールマイトは気を取り直したように話す。

「勿論、まずはその個性をコントロールする所からがスタートだけだね。ゆっくりでもいい、だが確実に高いレベルを目指せる、君なら!!」

「はいっ!!」

「それじゃあ、もう遅いから緑谷少年も帰りなさい」

「はい、ありがとうございます！」

軽く頭を下げて帰っていく緑谷の背中を、オールマイトは手を振りながら見送る。くるりと後ろを振り向きながら言った。

「盗み聞きはあまり感心しないな、拳獣少年」

「流石に気付くか」

オールマイトの声に応えるかのように、柱の影からスツとガロウが姿を現した。

「一瞬だけ、気配を感じてね。・・・わざとだろう？」

「意外と気付かれないもんだったからな」

「まったく・・・君は末恐ろしいな。何処でそんな技術を？」

「そいつは企業秘密。」

それより、別に盗み聞きするつもりは無かったんだけどアンタと話してみたかった」

まるで先程のオールマイトの様に、しかし静かな動きでスツと人差し指をオールマイトに向ける。

「アンタは何でヒーローになった？」

人助けなら、他でもできるだろう？」

「なるほど・・・」

オールマイトは悩んだ。

「ヒーローになった理由は幾つかある。それは一言ではとてもでは無いが言い表すことなど出来ない。」

なので、自分の芯にある事を呟いた。

「象徴が必要だと思ったからさ」

「象徴？」

「そう！個性が発現したての頃は色々と酷くつてね、荒れていた。人の心が荒んでいたんだよ。だからこそ、心の拠り所になれる象徴が必要だと思ったのさ」

「そうか・・・、聞いて良かったよ」

軽く礼を述べるとオールマイトの横を通り過ぎて校門へとスタスタ足を進める。

が、くると振り返りオールマイトに尋ねた。

「アンタと闘うことは出来るか？」

「つーー」

雰囲気、ガロウを纏う空気がガラリと変わったようにオールマイトは感じた。さつきまで物静かだった少年が、一瞬ではあるが猛々しい獣のように見えた。

「ーー間違いない本気・・・！」

「いや、やっぱりいいや」

その一言で緊張が一気に霧散する。

その切り替えの速さで唾然とし、硬直していた口をオールマイトは何とか動かす。

「け、拳獣少年、あまりそういうことはするものではないよ」

「ダメっすか？」

「やめておいた方がいいね、かなり！」

かなり強めに念を押し。

そっすか、と静かに呟いてガロウは再び足を進める。が、その心の内では何時かオールマイトと闘うことだけを考えていた。

ガロウの後ろ姿が見えなくなってからオールマイトは深く息を吸いこんで、思いつきり吐き出した。

「いやあ、本当に未恐ろしい」

個性把握テストを見た時からずっと思っていた。轟や爆豪、八百万の様に優秀な生徒は多い。だが、ガロウは違うとオールマイトは感じていた。

優秀では無い、という事ではない。

優秀だ。

と言うよりも、優秀すぎる。不自然な程に。

「明らかに、あの歳で至れるようなモノでは無いのだがなあ・・・」
身体能力だけではない。

戦闘訓練の際に見せた身体の動かし方や、フロアでの動き方。

経験量が違つて見えた。

「彼のことは注意しておく必要があるかもな・・・ガフツ」

懸念を言葉に出しながら、オールマイトはマッスルフォームを解いて血を吐く。

「これから先、拳獣少年が他の皆にとっていい刺激になることを願おう」

不穏な気配

いつもと変わらない目覚めを迎え、いつもと変わらぬ朝食を取る。

いつもと同じように準備を済まし、いつもと同じようにベランダから飛び出して雄英高校へとガロウは向かう。

「なんだありや・・・」

いつもと同じ、ことの無い学校の校門前を見てガロウはポツリと呟いた。

ボイスレコーダーやマイク、カメラを持ったいわゆるマスコミ達が群れをなして校門前に人の障害物を作っている。

「相手するのも面倒臭い」

よくよく見れば緑谷や飯田と言った生徒達もマスコミに囲まれながら質問を受けているのがガロウには見えた。

それを見ながらググツと足を伸ばして力を溜めるように軽く膝を曲げる。

「あ、雄英高校の生徒さーんー」

「いよつとお!!」

こちらに気付いて近寄って来たマスコミの事など無視して飛び上がった。

加速から生じる風と、地面を蹴って空中を跳ぶ浮遊感が何とも言えず心地良い。目前まで迫った校門の上部に手を付き、バク転をする様に飛び越えて残り僅かな浮遊感を堪能した後に着地。

その全てを見ていたマスコミ一人を除いて、誰にも気付かれることなく、いつもと変わらぬ足取りでガロウは教室に向かった。



「昨日の戦闘訓練はお疲れ様、Vと成績はしっかりと見させてもらった」

鐘がなり、相澤が教室に入ると先程までマスコミの話で盛り上がっていた教室の中は静かになり全員が意識を相澤に向けて話を聞いている。

「拳獣」

「・・・おん?」

緑谷と爆轟に対する小言を半分、いや、ほとんど興味なさげに聞いていたガロウに充

血した目を向けながら相澤は名前を呼んだ。

「その気の抜けた返事は直せ。」

階段を壊して目標にたどり着けなくする判断は余り良いとは言えない。今回は読みが当たったのかもしれないが、個性で二階から入られるとかの、もしもの時の場合も考えろ」

「はいはい」

「返事は一回で十分だ」

相澤の話はほぼ聞き流していた。

仮にあの時二階から侵入されても対応する手段は幾つか用意してあったからだ。

「さて、それじゃあそろそろHRの本題に移ろうか。急で悪いんだが、今日は君たちに……」

作り出された沈黙に誰かがゴクリと生唾を飲んだのをガロウは聞いた。

「学級委員長を決めてもらう」

「学校つばいのきたあ!!」

何か効果音が付きそうな顔で言った相澤の言葉に、ドツと興奮の声が教室に沸き立った。

皆が手を挙げて我こそは、と主張する様子をガロウは詰まらなさげに見ていた。

勿論、手は挙げない。

やる気もないし、興味もない。

「静粛にしたまえ！」

沸き立つ教室を一人の男のよく通る声が鎮める。

「学級委員長は多をけん引する重要な仕事だ……やりたい者がやれるモノでは無いだろう!!」

「……うわあ、どこまで真面目なんだよ……」

「周囲からの信頼あつてこそ務まる聖務……民主主義に則りリーダーを決めるなら、投票で決める議案のはず！」

「そびえ立ってんじゃねえか!!」

歯を食いしばりながら、真つ直ぐ伸びた飯田の手は何よりも明白に飯田の思いと性格を表しているようだった。

「日も浅いのに信頼もクソもないわ、飯田ちゃん」

「そんなの皆自分に入れるだろ！」

「……やりたくないの、俺は他のやつに入れる。」

「だからこそ、ここで複数票を取ったものこそ学級委員長に相応しいということになるのではないか？」

結局その後は飯田の発案通り投票で学級委員長を決めることになった。特にこいつに、と言った考えもないガロウは配られた紙に適当な奴の名前を書いて投票した。

結果、学級委員長になったのは緑谷、副委員長として八百万が選ばれた。そしてどうやら話を聞いていると飯田はほかの人物に票を入れたらしい。

「ローヤやはりこいつは、馬鹿だ。」

ガロウの飯田に対する印象が固まりつつあった。

◎

「さあくとと、昼飯昼飯」

午前中の授業をほぼ聞き流していたガロウは食堂へと足を向かわせた。格安で大量に食べられる雄英高校の食堂はガロウにとってとても良い環境である。

「やあ、拳獣くん。今日はどうする？」

「肉料理を大量に」

初めて食堂を利用した時に見せたフードファイトの時からすっかり顔見知りになってしまったランチラッシュにガロウは注文して料理をまつ。

「なあなあ、君」

「あん？」

ちよんちよん、と肩を叩かれて目線を向けるとそこには一人の少女が立っていた。

「ちよつと横にズレてくれないか？取りたいものが取れなくなつて」

「ああ、スマン」

言われてガロウは自分がいる場所が少女にとって邪魔になっていることに初めて気づき、言われた通りに横にズレる。

目当てのモノを取った少女は、ガロウに礼を言った時何か思い出した様な表情をして口を開いた。

「君つてあれだよな、フードファイトしてた人だよな？」

「見てたのか？」

「そうそう。」

あたしは一年B組の拳藤一佳、よろしくな。えくと・・・

「ガロウでいい。一年A組だ」

「ならそう呼ばしてもらおうよ」

軽い自己紹介が終わる頃、ちようど合わせたようなタイミシングで注文した料理が出てきた。

「お待ち遠様！多いから気を付けてね」

「分かってるって」

大サイズのトレーふたつに乗せた大量の料理を両手で持って歩くガロウはまるで大道芸人の様である。

「その席空いてるみたいだな」

テーブル席を見つけた拳藤は自分の料理をそこに置く。ガロウも同じく料理をテーブルに置いて席に付いた。

「いつも一人なのか？」

「あたしはそんなに寂しいやつじゃないよ。」

最近の基本、うちのクラスの捻くれ者が他所のクラスのやつに迷惑かけないようになっているだけだね。今日は他の奴と食うらしくて」

「捻くれ者ね……」

ガロウは拳藤の言う、他人に迷惑をかけるレベルの捻くれ者を想像して出逢えば手が出るであろうという確信にも似た予感があった。

誰かと行動を共にしていると時間は早く感じるもので、気付けばガロウは全ての料理

を平らげ、そのガロウを見て拳藤は驚いたように目を見開いた後、乾いた笑いを見せた。

「流石はフードファイター」

「なつた覚えは無いな」

拍手と共に送られた賞賛の声に対して、ガロウは興味無さげに応える。

コップの水を一息で飲み、席を立つ。

ウウー……！！！！

食事で緩んでいた思考を瞬時に引き締める。

周りを見渡せば他の生徒達は突然の警報に浮き足立っている。

そしてそれは目の前の拳藤も同じであった。

「な、何これ？」

「落ち着け、慌てたら分かることすらも分からねえ」

「う、うん。ガロウは落ち着きすぎな気がするんだけど」

「俺は何時も落ち着いているからな」

もう一度辺りを見渡せばまるで慌てふためくアリの群衆のように慌てた生徒達で食

堂はごった返していた。

怒鳴り声や物が落ちる音、群衆が生み出す耳障りな騒音も相まって何が起きているの

か把握することが出来ない。

そんな状況の中でガロウは目を動かして他のテーブル席の位置を確認していた。

「拳藤、ここ動くなよ。何が起きてるか確認してくる」

「確認って・・・こんなにゴった返してたら動くことなんてー」

「何も通路なんか使わないさ」

いうや否やガロウは自分が座っていたソファの背もたれに足を掛けると隣のテーブルのソファの背もたれに飛び移った。

同じ要領で群衆の頭上を飛び越えていく様は体重など感じさせず、まるで羽のようである。

一番壁よりのテーブルにたどり着いたガロウは再び飛び上がり窓枠に手をかけて開けると外に出る。

「騒ぎの原因は・・・アレか？」

多くの人の声が聞こえてくる。しかしそれは食堂から聞こえるのではない。

目を向けると校門から僅かに離れた付近に朝に見たマスコミの群れができていたー雄英高校の内部にだ。

だが、ガロウの視線がマスコミに向いていたのは僅かな間である。

直ぐにそれは別のもの、マスコミの群れの奥にあるものへと向けられる。

「・・・どうなってるんだ？アレは」

マスコミの奥に見えるのは雄英高校の校門。マスコミなどの部外者が雄英高校に無断で立ち入れば即座に閉まり、誰の侵入も許さない鉄壁の門になる。……らしい。

それが開かれていた。

いや、正確にはぶち破られていてるように見える。

雄英高校は最新の設備を整えている……らしいので誤作動で開くことはまずないだろう。

幸いマスコミの方は集まってきた教師陣によつて沈静化しつつある。

「なんか……不穏な空気になってきたな」

ガロウは自分が出てきた窓から食堂に戻ると誰かが対応したのか生徒達も落ち着きを取り戻していた。

警告の印であるかの様な打ち破られた門の事を頭の片隅に残し、ガロウは待たせている拳藤の下へと戻った。

ヴィラン強襲

あの騒動の後、クラスの学級委員長は緑谷が辞退し飯田がやることになった。

どうやら生徒達の混乱を見事な機転を利かせて沈静化させたのが飯田らしく、それを知っている緑谷からの推薦らしい。

馬鹿は馬鹿でも、ただの馬鹿ではないようだ。

「決まったみたいだな。」

それじゃあ、話に入るぞ。今日のヒーロー基礎学だが、俺とオールマイト、そしてもう一人の教師を含めた三人体制で見ることになった」

寝袋から出てきた相澤が充血させた目を眠そうに開けながら教壇に立ってそう言う。

発言に対して手を挙げたのは瀬呂。

「はい。今日は何するんですか」

「災害水難何でもござれの、人命救助訓練だ。訓練の場所は離れたところにあるから各自素早く着替えてバスに乗るように。」

コスチュームでも体操服でも構わん、各自で判断しろ」

◎

バスの窓枠に肘をついて顎に手をやり外の景色を眺める。近づいては遠ざかっていく風景が何度も何度も繰り返し返される。

ガロウがいつも思っている事だが、雄英高校の敷地面積は一体幾らほどあるのだろうか。

「私、思ったことなんでも言っちゃうの、緑谷ちゃん、あなたの個性、オールマイトに似てる」

「そ、そそ、そうかなあ、ぼ、僕はそんな事ないと思うんだけど」

「オールマイトは緑谷みたいに怪我しないだろ、梅雨ちゃん。」

「けど増強型はいいよな！派手だし出来ることも多い!!」

騒がしい声を聞いて外の景色からバスの中へと視線を戻せば何やら自分たちの個性

について話し合っているようだ。

「派手で強えって言ったらやっぱ轟と爆豪だよな！」

名前を呼ばれた二人は興味が無いようでそっぽをむいている。

「爆豪ちゃんはキレてばかりで人気でなさそう」

「んだと！出すわコラ！！」

「ほら」

まるで売り言葉に買い言葉、興味なさげにしていた爆豪はいつペン、蛙吹の言葉に反応して怒鳴り散らした。

「この付き合いの浅さで既にクソを下水で煮込んだ様な性格って思われるのどうよ？」

「てめえのボキャブラリーはなんだゴラ！！殺すぞ！」

頭に血が上ると冷静になれないのか、蛙吹の言葉に乗っかるように上鳴が独特な表現で爆豪を煽るとオーバーリアクションと言って差し支えないぐらいにキレる。

「けどそれならガロウも凄いやな、その2人を圧倒してよ」

「チツ……」

「……………」

上鳴がこちらに振り向き話を振ってきたので意識をそちらに向ける。爆豪は舌打ちをして、轟は興味なしとでもいうかのように無反応。

「俺もガロウには驚いたぜ。増強型ってだけであそこまで戦えるモンなのか？」

「いや、別に増強型だからって訳じゃない」

「ならどういう訳なのかしら？」

バスの中にいる殆どの者が蛙吹の問い掛けに対してガロウがどう答えるのだろうか
と、興味を持った表情でガロウを見つめる。

対するガロウは再び肘をつき、顎に手を当てて至極当然のことを言うように呟いた。

「個性は無いものと思って、戦ってるからだ」

言い放たれた言葉を聞きながらも殆どのものが理解出来ていなかった。

「それってどういうー」

「お前らお喋りはそろそろ終わりだ」

理解しようとする為に発せられた緑谷の言葉は全てを言い切る前に相澤によって断
ち切られた。



見渡せば何でもある。

山、海、川、森に住宅街。

頭上を見上げれば雨風を凌ぐためなのかドーム状の屋根あるが、それが目に入ることさえ無ければ外だと思おうぐらいに広い。

「すつげー！でけえ！USJかよ！」

「水難事故、土砂災害、火事etc……」

「ここは僕が作ったあらゆる事故や災害を想定した演習場。その名もー」

「ウソの災害や事故ルーム!!」

（USJだったア!!）

教師としてこの場に来ていたヒーロー、スペースヒーローの「13号」の言葉に周りの生徒達が沸き立った。

名前が体を表すかのように、ヒーローネームに従った姿をしたヒーロー。宇宙服を模したスーツを身にまとった彼はとても戦闘などが出来そうには見えない。

「えー……、始める前にお小言を一つ二つ……三つ……、四つ……」
（増える……）

「皆さんご存知だとは思いますがー」

13号の言うことは個性飽和社会の現状、個性の危うさ、そしてその危うさを如何様にして人のために使うかである。

「以上、ご清聴ありがとうございます！ごさいました！」

「ステキー!!」

「ブラボー!!ブラーボー!!」

「んじゃ、そろそろ」

麗日や飯田、相澤、他の生徒たちの声が騒がしい中でもガロウは神経を張り巡らせていた。

頭の片隅に残っていた光景、警告。

崩れ落ちていた雄英高校の鉄壁の門。

だからこそ気づけたのかもしれない。

「っ……」

「……っ!!一塊になって動くな!!13号!!生徒を守れ」

闇が蝕むように空間に穴が空いていく。

次いで、それに相澤が気付いた。

相澤の大声に対する生徒達の反応は鈍い。当然といえば当然だろうが、そんな事を考

慮してくれる程に今の現状は親切ではない。

「全員動くな！アレは……敵だ!!」
ヴィラン

闇が一気に空間を侵食し、一人、二人とその闇から姿を現し出る。

「13号避難開始！学校に連絡を試せ、上鳴お前も個性で連絡を試してみろ」
「了解っす！」

「先生はどうするんですか？個性を消すって言ってもあの数じゃ!!」

「安心しろ緑谷、一芸だけじゃヒーローは務まらない。……13号、ここは任せたぞ」

生徒を安心させるような声言った相澤は現れた複数の敵へと駆け出す。それと同時に13号が生徒達の避難を開始しようとした。

だがそこで、誰かが気づいたように言った。

「ねえねえ……ガロウくんはどこ行つたの？」

言われて全員が周りを見回すもガロウの姿はどこにもない。ガロウが居ないという状況に何人かが慌て始めた時、ちょうど相澤が敵の射撃範囲に入ろうとしていた。

「真正面から突っ込んでくるとは！」

「大マヌーラー」

敵の言葉はそこで区切られた。

相澤による攻撃……では無い。

誰も気付かなかつた。敵全員が、生徒達全員が、相澤でさえも予想外だった。

立ち込める砂塵の中に意識を刈り取られて倒れ伏す敵が三人、その中心にガロウは立っていた。

「なにっ!？」

「えっ!」

「どこから!？」

敵も、生徒も、教師も誰もが三者三様、様々な反応を見せる中で既にガロウは動き出す。敵を一撃で昏倒させると次の敵を掴み未だ行動を起こさない複数の敵に投げ飛ばした。

そこまでの行動を見て相沢が、次いで敵が動き出す。

「拳獣!!」

近くの敵を二人捕縛して頭同士をぶつけさせガロウの下に駆け寄ろうとするも如何せん敵が多い。しかし、注視してみると自分よりも戦い方が上手く、危なっかしい所など何処にもない。

敵に蹴りを入れたガロウが名を呼ばれた事に反応したのか側に駆け寄ってきた。

「拳獣、勝手に行動をするな。」

と、言いたいが・・・事態が事態だ」

「……どうしろと?」

「二人だけ敵を逃した、他の生徒達の方に行ってる。厄介そうな敵だが13号のサポート……出来るか?」

「了解です」

「合理的に行動しろ、説教は…….その後だ」

話を最後まで聞き終えたガロウはすぐさま地を蹴る。僅かに足を曲げて、溜め込んだ力を解き放つように一気に伸ばした脚は速さに特化した飯田にも負けないスピードでガロウの身体を押し進める。

クラスメイトの方を確認すれば――生徒達の周りを黒い霧のようなものが覆っている。成程、あのモヤ自体が敵なら確かに厄介そうな敵である。

「まずは様子見だな」

遠くから見ていた限り、クラスメイト達が苦しんでいた様子はなかったため、あのモヤは毒の類ではない。モヤの中から敵が出てきたことから、恐らくあのモヤは転移や転送を行う能力がある。実際、何人かのクラスメイトはその能力で飛ばされたのか姿が見えない。

不用意に接近はまずい。

走りながら地面に腕を突き立て、抉り、舗装されたコンクリートの破片を思いつき

投げつけた。

「なんだ!!」

いきなりの奇襲は失敗。コンクリートの破片はモヤを突き抜けて飛んでいったり、モヤ自体に飲み込まれた。

しかし、幸運なことに警戒したのかクラスメイトと13号からその敵は間を開ける。生まれた隙を見逃さずにガロウは一瞬で13号の下に駆け寄った。

「拳獣くん!何をしてるんだ君は!」

「無事でしたか、拳獣くん」

飯田と13号の声を聞きながらもガロウは目の前の敵から目を逸らさない。

「まさか、いきなり攻撃してきたその彼は生徒でしたか。てつきり我々の知らないヒーローだと思いましたよ。」

「いやはや、油断は禁物。彼はとびきり優秀なようだ」

「褒められても嬉しく無いな」

敵の言葉を適当に聞き流していた時、13号が見えない口を開いた。

「ここから一人だけ、助けを呼ばせに生徒を逃がします。飯田くん、君が行きなさい。申し訳ないですが、ガロウくんはその援護を」

「な、何故僕が!」

「了解です」

驚く飯田に対してガロウは素直に頷く。様々な経験をしているガロウの決断は早い。

「飯田、お前は学級委員長だろ？何が自分に出来てその中で何が最善なのか分かるはずだ。お前は賢いからな」

「……分かった」

「行きなさい、飯田くん！」

13号の声に弾かれたように飯田は個性を使い走り出し、それに対応するように敵も動く。

そしてガロウも、未知なる敵に――僅かに心踊らせ――地を蹴った。

ヴィラン強襲 下

能力の詳細が分からない以上、下手に接近するわけには行かない。下手をすれば自分も他のクラスメイトたちのようにどこかに飛ばされかねない。

「行かせん!!」

「それはこっちのセリフだ」

床を抉り、舗装されていた地面の破片を全力で投合。さながら威力は規格外サイズの散弾銃と言った所である。

手応えも感じられず効いているようにも感じないが敵、黒霧の脚は止められる。

「こんなもの、効きはしない」

「僕の個性なら関係ないでしょう!」

既にガロウは攻撃を起こした場所に離脱していた。合わせたように13号の個性——ブラックホール——が発動。何でも吸い込み分解する超重力が黒霧に向けて解放された。

「ぬっ……ぐおおお!!」

光すら吸い込む超重力が黒霧を捉えた。徐々に徐々に黒のモヤが13号の許に引き寄せられていく。必死に耐えているのか中々、距離は縮まらない。

しかし、確実に黒霧は漆黒の重力場に引き寄せられている。

「全力……です!!」

「つなに!?!」

ガクンツ、と13号の吸引力が一気に上がり、その力に黒霧が負けた。

踏ん張りが利かなくなつたのか既に黒霧と13号との距離は2mをきつている。まるで掠れた筆をさつと引いた様に黒いモヤが吸い込まれ始めた時、

ガロウが13号の身体を横に突き飛ばした。

「つ……拳獣くん!なにを!?!」

「ほお……気付きましたか、やはり優秀」

体勢を崩した13号とガロウの横を黒霧が通り抜ける、目指してるのは出口に手を伸ばす飯田だ。

しかし、それをみすみす見逃す程にガロウは馬鹿でも弱くも無い。直ぐに足に力を入れ直し黒霧に向かって駆け出し……そして見た。

「やらせへん!」

飯田を守る為に動いていたのか、黒霧の直ぐ背後に麗日が迫ってたのだ。

「服を着てるってことは、少なくとも実体はあるんちゃうかな？」

ある種の賭けのような行動。

もし、実体と非実体の箇所を自由に切り替えられるとしたならば一瞬で麗日が危険な状態になるだろう。

「瀬呂！テープ！！」

「おう！！」

走りながら振り返らずに声を上げ、後からの短い返事を聞きながらもいつそう強く地を蹴り一気に距離をつめる。

「タッチー！」

結果だけを言うのであれば、麗日の行動は成功した。しかし、黒霧の身体にかかる重力が無くなったただけであり、麗日が危険なことに変わりはない。

「小娘！」

「伏せろ、麗日！」

案の定、標的を飯田から麗日に変更した黒霧のモヤが襲いかかろうとした瞬間に伏せた麗日の頭上を飛び越えたガロウの足が、黒霧の実態部分を捉えた。

重力を受けない黒霧はガロウの蹴りを受けて踏ん張ることすら出来ずに弾かれる。

「よし！捉えたー！」

「俺に任せろ、瀬呂ー！」

黒霧の身体に瀬呂のテープが貼り付き、逆端を砂藤が掴み力一杯に振り回し始め、投げ飛ばした間に飯田が扉を開けて外に出たのをガロウは確認した。

「……逃げられましたか」

焦ることなく、不気味な程に冷静に呟いた黒霧の身体が黒いモヤに包まれていく。

「ならせめてー」

「13号と、それから特に優秀な彼だけはここで始末しておきましょう」

「っ！避ける13号先生!!」

避けたのは本当にたまたまだった。

音もなく匂いもなく、だがそれでも本来感じることにすらなかつただろう物を感じて叫んでいた。

脊髄反射よりも早い反射神経で飛び退いたガロウの元いた場所が黒いモヤに抉り取られている。

「先生ー！」

誰かの叫び声で気が付き13号の居た方に目を向ければ、背中を黒いモヤに抉り取られている。

「まさか、あれを避けるとは．．．まあ、13号を始末できたので良しとしましょう」
その言葉を最後に黒霧は闇の中へと姿を消して行く。恐らく移動する場所は相澤が他の敵と戦っている広場だろう。

「麗日、13号先生を頼むぞ」

「ガロウくんは？」

「先生の援護だ」

短く答えて走り出す。

他のクラスメイトたちから制止の言葉をかけられるがガロウは止まらない。

未知なる脅威に心踊らせ、駆け出したのだから。



「だいぶ数も減ってきたな．．．」

相澤が捕縛武器を引き寄せて二人の敵を無力化する。既に何人もの敵が無力化されており残りは僅か数人といった所である。

そんな相澤のことを離れた所から見ていた敵が首筋を指で搔きながら見ていた。

「はあ……有象無象じゃ、どう足掻いてもこんなもんか」

身体中に手の様なオブジェを付けた敵はある種、予想していたように眩いた。

顔に付けた手のオブジェクト、上から被さるようにして伸びている前髪、その僅かな隙間からチラチラと見える目は相澤の事をじっと見ていた。

獯猛な猛獣の様な目ではない。冷静に、観察して分析するかの様な、普通の敵とはまた違った目をしていた。

その横で、黒いモヤが広がっていく。

「戻りました死柄木」

続きの言葉を促すように死柄木と呼ばれた男は黒霧の方を向く。

「すみません、生徒に一人逃げられました」

「は？……おいおいおい」

「……黒霧、お前がワープゲートじゃなかったら殺してたぞ？」

「すみません」

誰もが怯むであろう殺気を浴びせられているのにも関わず、黒霧は怯んだ様子すら見せずにやんわりと謝罪の言葉を口にした。

「だつたらせめて、ちよつとでも平和を守る者を打ち砕いていこうか」

「分かりました」

死柄木の意見に黒霧が同意したのと、相澤が最後の敵を無力化したのは同時だった。最初に動き出したのはやはり相澤。そして、焦っていた。

「……あつちには13号が居たはずだが……」。

考えても状況が好転する訳では無いのは知っていたが、嫌な考えが頭から離れない。それを振り払うようにして手を横難に払うがそれは避けられる。

「生徒を安心させる為に飛び出してきたのか？」

「……………」

「イレイザー、お前の個性、多対一には向いてないだろ」

見抜かれている。

僅かな焦りと共に繰り出した肘打ちは容易く受け止められた。

「無理をするなよ、イレイザー」

「っ!？」

鋭い痛みと共に肘にヒビが入り、ボロボロと崩れ落ちていく。

直ぐに蹴りを入れて距離を空ける。

異質な個性に驚きはしたが、辛うじて腕は動く。焦りを悟られないように構えた。

そんな相澤を見て死柄木は思い出したように表情を変える。

「ああ、そうだイレイザー……」。

本命は俺じゃない」

背後に立つ気配に気付き、振り返る。

「本当はオールマイト用に用意したんだけどな。対平和の象徴、脳無だ。

——楽しんでくれよ」

デカイ。

体格で言うのならオールマイトよりもデカいかもしれない巨体。

脳が剥き出しなところが嫌悪感を強く感じさせる。ハッキリと言って異常だ。

「……………何分もつか、楽しみだな」

V S 脳無!!

振り下ろさせた腕を間一髪の所で避けると身体がよろけそうになる。

——風圧だけでこのレベルか……。

脳無。

そう呼ばれた異形の巨大な男？はやはり異常であった。黒い皮膚の下にうねる様に発達した筋肉を包み込んでいる。身に纏っているのはズボンだけで、左右の膝部分には悪趣味な膝当て。

顔は、B級映画から飛び出してきたゾンビのように脳と目がむき出しだ。

無論、異常なのは見た目だけではない。

スピード、パワー共に規格外で、恐らくオールマイトに匹敵すると思われるその力は個性を持ってしても消すことは出来ない。

あのパワーでは例え捕縛が出来たとしても無意味、更に悪い結果にも繋がりがねな

い。

「……参ったなこいつは。」

死柄木と呼ばれていた敵が此方に手出しをして来る様子は無いが、もしもアレが参戦したとなると敗北はほぼほぼ決定的であろう。

死を意味していそうな拳を既のところまで避けて風圧で体勢を崩さないように距離を取る。

先程からこの状態が続いていた。

「……変化がないと面白くないな、時間稼ぎのつもりか？」

飽きてきたとでも言いたいのか、前髪と異様なオブジェのせいでその表情はよく分からないが雰囲気だけは伝わる。

徐ろに歩き出した死柄木に警戒を色濃くした相澤だが、その脚は此方に向かわない。

「仕方ない……子供を何人か殺してからずらかるか」

「つ……させる訳が」

わざと聞こえるような大きさの声で呟かれたのは明白。しかし、だからと言って畏だとかわかっていても行動しなければ行けないのがヒーローの欠点でもある。

「余所見すんなよイレイザー。言っただろ、脳無は対平和の象徴だって」

身体が警告を発する。

音を鳴らして振るわれるあの剛腕をまともに受けることは、死を意味するだろうとすら思えてきてしまう。

身体のあらゆる感覚、あるかどうか疑わしい第六感までもが相澤の脳に警鐘をけたたましく鳴らした。

「――っ!!」

脳無の腕が僅かに服を掠めた。

身体に当たりはしていないが、風圧だけで身体が揺らぐ威力の拳は相澤の姿勢を難なく崩した。

既に二発目の拳は振るわれていた。

「ぐっおう!!」

ひしゃげる様な音に僅かに遅れてから灼熱の鋭い痛みが片腕に広がる。

幸運なことに何とか身をよじることができ、直撃は避けられたがそれでもダメージはデカイ。

――腕は完全に潰されたか。

片腕は動かず、身体にも鈍い痛みが侵食する様に広がっていく。

もはや満身創痍。気を抜けば即この場に削れ落ちそうな身体と心に鞭を打って踏ん張っていた。

「へえ．．．頑張るなあ、イレイザー。」

けど、本当はもう限界なんだろう？ホントのところは直ぐにでも横になりたいんじゃないのか？」

死柄木の声には明らかに愉快そうな感情が含まれていた。この現状を楽しんでいるのだ。

「頑張れよ、イレイザー．．．続きだぜ？」

◎

相澤が敵と戦っている広場から僅かに離れた水辺に三人の人影がある。

黒霧によって水難事故ゾーンに飛ばされて、何とか協力しあって窮地から脱出を果たした緑谷、蛙吹、そして峰田の三人だ。

「なあ、緑谷。やめとけて！いま行ったところで俺達には何も出来ねえよ」

「けど、それでも．．．」

「緑谷ちゃん、勇気と無謀は違うのよ？」

三人の視線の先には敵と戦っている相澤の姿がある。

そこに飛び入ろうとする緑谷を峰田と蛙吹が止めている。緑谷とて無謀にも戦おうとしている訳では無い。自分に出来る限りのことをしようと考えている訳であるが——未だに良い案は浮かばなかった。

「けど、このままじゃ相澤先生が……」

「先生が苦戦する相手に俺らが勝てるわけないだろ！」

「勝てなくつてもいいんだ……とにかくこの窮地から脱出出来れば」

「緑谷ちゃん。さっきみたいにそう何度も上手くいくとは思えないわ」

二人にそう言われて緑谷は悔しそうに顔を歪める。

「ぐっおう!!」

苦痛により漏れ出た相澤の声が三人の下まで聞こえてきた。見れば相澤の片腕が妙な方向に曲がっているのが視認できる——折れているのだろう。

「まずい……あのままじゃ幾ら個性を消せる相澤先生でも……」

「だから行って行くなよ緑谷あ！」

「ダメよ緑谷ちゃん！」

水場から上がり今にも駆け出そうとする緑谷の腕を二人が必死に掴んで、何とか抑える。

打開策もない。

上手く相澤の下までたどり着けたとしてもそこから逃がしてくれるほどあの敵達は優しくはないのも分かっていった。

体格のどかい黒い敵が拳を振るい、相澤は後に飛び退きながら距離を取っている。緑谷たちがいる場所からでもそれが精一杯の回避である事が分かった。

「あつーー」

誰が声を漏らしたのか分からない。もしかしたら全員だったのかも。

敵の拳を躲した相澤が大きくよろけてしまった。身体が震えたのは半身が浸かっている水のせいではないだろう。

思わず目を背け、直後、ドギヤツ!!という衝撃音があたりに響いた。

ーーーやられた!

沈黙が不安や恐怖といったあらゆる負の思いを掻き立てる。

「いててて・・・。随分と強いパンチだな」

緊張感を感じさせない、とても聞き慣れた声が緑谷達の下に届いた。

ツンツンと尖り左右に分かれた髪型、つり上がった目、肥大してなくとも鍛えこんでいるのが遠目からでも分かる肉体。黒いヒーロースーツに身を包む彼は間違いなくラスメイトのガロウだった。

何が起きたのか、と思いいながら彼のそばを見ると相澤を守るようにして立つ彼の少し

離れた場所にはクレーターが出来ていた。彼が何かしたのだろうか。

しかし、先程の惨状を見ていた緑谷がこれからクラスメイトである彼が痛めつけられるのを見るのは出来ずに、叫ぶ。

「ガロウくん！そこから逃げて!!」

「ああそこに居たのか。取り敢えず無事みたいだなあ」

目の前に敵が立っているというのに彼は此方に顔を向けて安堵したように言った。

いったい何を考えているのだろうか。

「………なんだそのガキ？先生を助けるために出てきたのか？ま、いいや。脳無、そいつを殺せ」

死柄木の指示でガロウの目の前に立っていた脳無が、音を鳴らしながら拳を振り下ろした。

敵は相澤を一方的に打ちのめす程の実力者。どう足掻いてもガロウがなんとか出来る相手ではないと思っていた一ー寸前。

僅かな音の後に、必殺の威力をはらんだ剛腕が狙いであるガロウを逸れて地面を穿つたのだ。風と轟音が空気を揺らし、衝撃が地面を揺らす。

「なっ!」

見ていた緑谷達の三人はポカンと口を開け、死柄木は驚きの声を僅かに漏らした。

ガロウは無造作に左手を伸ばすと脳無の腕をがしつとつかみ体のひねりを加えて回転すると、死柄木に向けて投げ飛ばした。

「っ!!」

抵抗らしい抵抗もせずに投げ飛ばされた脳無はかがみ込んだ死柄木の頭上を飛び越えて地面に身体を打ち付けた。ズザアア、という擦りつけられたような音と一緒に。

ガロウは体の向きを変えると地面に伏す相澤に腕を回して立ち上がり緑谷達の下まで来ると地面に寝かした。

「相澤先生は任せるぞ?」

短くそう言うのと再び身体の向きを既に起き上がって此方に歩いて来ている脳無に向ける。

特に構えることもなく歩き始めると、力みを捨てたかのようにだらんと両の手を身体の左右に垂らした。

やがて二人の間の距離がほぼゼロへと近づき――

パンツ!!という破裂音と共にガロウの片脚が掻き消えた。そして脳無の顎が上へと打ち上げられている様子を見てから初めて、ガロウが脳無の顎を蹴り上げたことにこの場にいた全員が気付いた。次いでズドオツ!!という音が拳を叩き込んだということを教えてくれる。

しかし、どうかしたのかガロウは後ろへと跳び退いて距離を取った。

「妙だな……。二発とも結構力入れたんだが手応えがない……。それがお前の個性か？」

ガロウの質問に対して脳無は何も答えずに目の前で佇むだけ。

ガロウは短く息を吐くとそこでやつと姿勢を低くして構えを取って見せた。

「面白い個性だなあ。」

まあ、せいぜい楽しませてくれよ」

VS脳無!!2

脳無が一步前に進み出たのを合図に、ガロウは力強く地を蹴った。

恐ろしく速く、それでいて清流の様に静かで滑らかな動きを見せた拳がガロウの意志に従って吸い込まれるように叩き込まれる。

——だが。

拳が叩き込まれたとほぼ同時に脳無もガロウに対して拳を打ち込んできたのだ。

「ほお・・・」

感嘆の声をガロウが漏らす。

脳無に触れる拳からは、剥き出しの脳が少しばかりも揺れていないのが感じられる。

——流水岩砕拳。

迫り来る拳から自分の身体を守るために繰り出されたその技は、脳無の拳を見当違いの方向へと逸らせた。

再び脳無の腕を掴んで投げ飛ばした、そこでピリツと痺れている片手に気づく。別に問題は無いが僅かな驚きが生まれた。

「……金属バットと戦った時も手が痺れたが、パワーだけならアイツ以上だな」
加えてどうやら打撃技が効かないあの身体には流水岩碎拳は相性が良くないらしい。
「……ならば戦い方を変えるだけ。」

「フツ！」

気合いと共に短く息を吐きそれと同時に、ガロウは再び全力で地を蹴った。およそ二十メートル程の距離を一瞬で詰めて、身体を僅かに縮ませた。

弾き出された弾丸の様にスピードを乗せた右手の突きを二発、僅かにタイミングをズラした左手の手刀を左斜めしたから一発。

避ける様子を見せずに腕を振り上げる脳無の胴に最初の二発が、次いで振り下ろそうとする腕に手刀の一撃が吸い込まれた。

脳無に打撃は効かない……故にガロウが行った攻撃は打撃技ではない。

「……旋風鉄斬拳。」

駆け抜けたガロウの後に立つ脳無の片腕にパツクリと斬撃の切れ目が走り、胴には鋭い槍で突き刺した様な穴が空いた。

攻撃が通った事に対する僅かな歓喜と共に顔を後ろの脳無に向けて「……眉をひそ

めた。

斬撃と刺突によって付けた深い傷がみるみるうちに治ってゆくのだ。

「残念だったな。脳無には再生の個性がある、対平和の象徴としてのな。どういう原理で脳無にダメージを与えたのかは分からねえが・・・無駄だったな」

少し離れたところに居る死柄木の言葉にガロウは納得する。打撃の無効化に再生、更に超絶なパワーと来ている。対平和の象徴と言われるだけのことはある、ということか。

恐らくパンチのパワーは金属バット以上、もろに数発食らえば危ないかもしれない。

ドウツ、という音と風が顔に打ち付けられ、ガロウは目を見開きながら身体を縮めた。横風の剛腕が微かに髪を撫でる。

「・・・腕力だけじゃない、脚力も相当なものだな・・・これは。」

ガロウの両腕が霞のように消えたかと思うと、水を斬るような音と共に脳無の胴に二筋の斬撃跡が生まれる。

ガロウは攻撃の手応えを確認しつつ、再び深くしゃがみこむと相手の足を蹴りで払う。予想通りに脳無は体勢を崩して地面に手を付いた。

倒れる相手に向かって三度、地を蹴り飛び出す。関節、靭帯を鉄斬拳で深く切断すれば拘束する時間を稼げると思ったからだ。

だが。地を駆けながら繰り出した二発の手刀を、より正確に言うならガロウを、脳無は輝きの無い目でじつと見ていたのだ。

「……何のつもりだ？」

そう思った瞬間、脳無の腕が動いた。

バゴンツ!!という音と共にガロウの目の前には幾つものコンクリートの破片が迫っていた。先程に、ガロウが黒霧にやった事と同じ事をこの脳無は行つたのだ。

僅かに焦りを覚えたガロウは飛んできたコンクリート片を上下左右へと受け流す。

最後のコンクリート片を後に受け流した時、力一杯握りしめられた拳が大きく振り被災れていた。

脳無との距離感故に回避は難しいだろうと判断し、故にガロウはより近くにと歩を進めた。

振り抜かれる拳が最大速度に達する前にそつと手をあてがい、逸らす。伸びきつた腕の本来ならば血管が走っている部分に斬撃を放つてから距離をとつた。

そこで初めて自分の息が僅かに上がっているのを確認したガロウは笑みを浮かべる。

「こつちに来てから、初めてだな。こつちまでできる奴は」

腰を落として両の手を地面に触れるか触れないかの高さに落とすと、次の瞬間にはガロウの姿はその場から消えていた。

倒れこむ脳無、その後方に立つガロウと地に転がる二本の足。

浅い攻撃は超再生によりすぐさまに回復してしまうゆえの行動。

自身を支える足を失いながらも体を向ける脳無にガロウは足を向ける。

「だけど、それもここまでだな」

今から数十秒の間の状態の脳無にできることは何も無い。

黒霧と死柄杓もようやく動き出すが一瞬、

「すべてが遅い」

足は地を踏みしめて、腕は腰の横で構える。

狙いは首と胸部の間、そこを深く損傷させれば超再生で完全に回復するまでにかなり時間を稼げるかもしれない。そうなれば拘束する時間も十分だろうし、万が一脳無が死んでしまったとしても致し方のないことだろう。

僅かな思考ののち勝利の確信と共に打ち出した貫手はシヨック吸収に阻まれることなく、深々と脳無に突き刺さった。

「いよっしやあい!!」

だれかの歓声が遠くから聞こえたようにガロウは感じた。

しかしその表情が、笑みから驚愕と苦痛に耐える表情に変わる。

一秒、一秒と時間が経つごとに燃え上がるような鋭い痛みが神経を伝わってガロウの

脳に異常を伝える。

周りで戦いを見ていたものたちもその異常に気付き始めた。

「どういうことだ．．．あれ」

「．．．え」

「なんで拳獣の腕が．．．」

ガロウの腹部の激痛はガロウ自身の手によつて起こされていた。

ガロウの背後に浮かび出た黒い霧から腕が飛び出し脇腹を貫いていたのだ。しかしながら、死柄木の行動以上に黒霧の行動には最大の注意を払っていた筈なのに。

そこでようやく脳無の体から血液以外に予想してなかったもの、黒霧の霧が漏れ出しているのに気づいた。

「これは．．．予想の斜め上を．．．」

「ふむ、やはり理解が早い。しかし今回は、私の方の策が勝った様ですね」

つまり黒霧は自身の個性によるゲートを脳無の体内に作り出したということ。

一種の固定観念の裏をついた誰も予想せぬ奇策。

「――抜けない？」

咄嗟に体を守るように片腕を出した判断は間違つてはいなかっただろう。

だが、脳無に関してそんなことは関係なかった。



さつと振り向くとそこに居たのはコスチュームをボロボロにして脇腹の傷口から血を流し、木に打ち付けられたガロウだった。

敵の方を振り返り、緑谷は総毛立つ。

相澤を担いで避難していた緑谷達と敵の間には少なく見積もっても100、いや200mはあいていた。

「……その距離を一瞬……どんなスピードで!?

それだけのスピードで飛んできたのだから相当の力で殴られたはずだ。

ガロウはピクリとも動こうとしない。

「とにかく、厄介な生徒は消せましたね。一安心ですね、死柄木 弔」

「ばーか、時間かかりすぎだ」

ガロウを助けなければ。遠目で見ただけでも明らかに危険だとわかる。

だが、ガロウが負けた敵を相手がいる状況で助けて逃げることができるのだろうか。

「……いや、そうじゃない！」

「やらなきや、いけな……」

「ゲームオーバー、だな。帰るぞ黒霧」

「「え？」」

死柄木のつぶやきに緑谷達三人の声が揃う。

「帰る？……帰るつつたのか、あいつら？」

「ええ……そう聞こえたわ」

「やったな緑谷、俺たち助かるぞ！」

「う、うん……ならすぐにガロウくんを助けないと」

動き出す三人をチラリと死柄木は見ていた。そして僅かに口角を上げる。

「その前に少しでも……」

死柄木の眩きの意味をいち早く察知した黒霧が個性を発動させ、躊躇うことなく死柄木は腕を突っ込む。

ただただ単純なる、狂気に乗せて。

「平和の象徴としての矜持を少しでも、へし折って帰ろう！」

死を纏った手が目前まで迫り……

「……！！？」

その音が訓練所のドアをぶち破った音であることには直ぐに気付いた。
やって来たのだ。

「もう大丈夫」

僕達オールドのヒーローマイトが。

「私が来た！」



迫り来る拳を見ながら思う。

恐らく、あのムカつくハゲ程の力はなくとも金属バットやクロビカリのパワーなら余裕で超えてるであろう拳。

片手一本でも流せないことも無いだろうが……。

「……試すか？」

いつだって戦いを得て成長した。

死を乗り越えて強くなった。

——腹の傷に、あの拳……丁度かな。

笑みを浮かべて、衝撃を受け入れた。

自分の鼓動がやけに大きく聞こえる。

自分の命が全身を駆け巡り、染み渡る。
体とそして心が戦えと熱を発する。

「・・・あつちの時とおんなじだ」

ガロウの口から血と共に笑いが溢れた。

VS 脳無!! 3

よく通るその声が場に居る全員の意識を集中させる。表情に笑顔はなく、浮かんでいるのは怒り。

砂埃が舞う中で、怒気に身を包んだオールマイトが立っている。

「少し嫌な予感がしてね。」

校長先生の話を無理やり振り切ってこっちに来てたら、飯田少年とすれ違ったので何があつたかは粗方聞いたよ」

圧倒的な雰囲気とその身に纏い、もう一度声を張り上げた。

「もう大丈夫、私が来た!!」

平和の象徴の登場にある者は歓喜の声を上げ、ある者は僅かに戸惑いの声を漏らす。

「これは、コンテニュー行けるかな？」

「脳無はまだ問題なく使えます。時間は少ないかもしれませんが・・・」

黒霧のワープゲートから手を引き抜いた死柄木は眩きながら怪しげな目でオールマイトを見つめる。

その行動で察した黒霧も緑谷達の近くに開いたゲートを閉じて全神経をオールマイトに向けた。

「殺れ、脳無」

たったの二言、それが戦いの火蓋を切る。

一瞬にして移動したオールマイトの拳と、同じく一瞬で移動した脳無の拳がぶつかり合う。

「なるほど。中々のパワーじゃないか！」

「楽しめよ、オールマイト。脳無はお前専用のヴィランだ」

「悪いが楽しむつもりは一切無いぞ！」

お互いの連打のなかに生まれた僅かな空白。そこを見逃さずに距離をとったオールマイトは力強く叫ぶ。

「カロライナ スマッシュ!!!」

段違いのスピードで駆け抜けけると同時に、全てのエネルギーが乗ったクロスチョップが叩き込まれる。

が、脳無は少しも怯まなかった、やはりダメージもない。

「これが君の個性か」

「.....」

オールマイトの言葉になんの反応も示さずに両手を掴み取る。

「高いパワーに私の攻撃の無効化.....専用とはそういう事か」

「その通り。脳無の個性はショック吸収、改造サンドバッグ人間だ。倒すなら.....そうだなゆっくり肉を抉りるとかが効果的だぜ？」

「随分と親切じゃないか.....しかし、私は残虐なのは嫌いだね！ゆえにこうさせてもらおう!!」

掴まれた腕を振りほどき脳無の腰をガツチリと掴むと、野太い気合いの声と一緒にバックドロップで地面に叩きつけた。

衝突音と衝撃、砂煙が周りに一気に広がり、その威力を良く伝える。

だが、結果は想像と異なった。

「な、るほど.....これは想像してなかったな」

「.....」

「脳無を地面に突き刺して動きを止めようとしたのか。いい考えだと思っただけ、俺達が相手じゃなけりゃな」

地面に頭から叩きつけられた脳無の腰から上の上半身がワープゲートを通り、オール

マイトの腹部を力一杯に掴んでいた。

黒霧の機転により一瞬の間に攻めたてていた状況が一変し、ピンチとも言える状況にこわる。

「脳無の役目は貴方を捕らえること。そして貴方が中途半端にゲートに入ったところでゲートを閉じ、引きちぎるのが私の役目！」

「どうしたオールマイト。NO、ヒーローって言ってもこの程度か？このままじゃ死ぬぜ？」

「私の中に血や臓物が流れ込むのは嫌ですが、貴方ほどの物であれば喜んで受け入れましょう！」

死柄木と黒霧、二人からの声を浴びせられるオールマイトは必死に脳無の腕を振りほどこうとするが自身のパワーを持ってしても振り解けない。

さらに隠し続けている古傷に脳無の指がめり込み絶えず激痛がオールマイトを襲っていた。

それに、時間も残り少ない。

——これは・・・想像以上に不味い!!

だが、不意に手の力が緩む。

次いで爆音。

「っ!？」

「邪魔だ退けデク!!」

「グオツ!？」

オールマイトの視界に飛び込んだのは駆け寄ってきた緑谷とそれを飛び越えて爆撃を浴びせた爆豪と少し離れた位置にいる切島。

そして、轟が個性を使用して脳無を凍らせていた。

この機会を見逃すことなくオールマイトは脱出し、敵で無事なのは死柄木ただ一人。形勢は一気に逆転した。

「おっと！動くなよモヤモブ。少しでも動いたと俺が判断したら即座に爆破するからな
！」

「セリフが完全にヴィランのそれだぞ爆豪」

「半身凍らせたからこのデカいのも動けねえはずだ」

無事なのは死柄木ただ一人。

全員の視線が死柄木に向けられる。

「あくあ、子供だったのに優秀だな。一気に俺達がピンチじゃないか。

年上のこっちが恥ずかしくなる」

しかし、その表情は追い詰められているというのにどこか余裕が見え隠れしている。

「おい、脳無。起きろ」

はつきりと口から発せられた言葉はよくその場に通った。そして、ほとんど間を開けることなく氷漬けの身体を砕きながら脳無がムクリと起き上がったのだ。

痛みを感じないのか、自分の体を砕くことに抵抗を感じないのか。明らかに感情というものを一切持ち合わせていないだろうその行動は、見るものに嫌悪感と僅かな恐怖心を植え付ける。

「四人とも、逃げなさい」

それを見たオールマイトが四人の前に立ち、拳を構えた時、

脳無が真横に吹き飛んだ。

「なっ!?!」

驚きの声を漏らしたのは死柄木、そして声を漏らさずともこの場にいる全員が予想だにしない現象に驚きを見せる。

「揃いも揃って、時間掛けすぎ」

新たな声に視線を向ける。

吹き飛んだ脳無を視界に入れ、一同は更に驚愕した。

「まあ、タイムニングよく交代できたから俺としては願ったり叶ったりだが」

どこから現れたのかガロウが片腕で脳無を地面に叩きつけ、血走った目で睨みつけていた。

先程、脳無と戦い吹き飛ばされた時とは段違いの闘気が迸っているように思える。

「お前・・・脳無に殺された筈じゃ！なんで生きてやがる!?!」

「あれぐらいで死んだと思つてたのかよ？随分と温いんだな、ヴィランつて」

「つーー脳無！そのガキを今度こそ殺せ！」

声になっていない雄叫びを上げてガロウの腕を払い除けた脳無。しかし、立ち上がった頃には目の前に立っていたガロウは既に後ろへと回り込んでおりー。

「シッ!!」

回転を加えた鋭い突き、空気を切り裂く音と共に幾数発も打ち込んでいた。最後の突きから脳無が振り返るよりも僅かに早く首を掴み、投げ飛ばし、地面に叩きつける。

が、それだけやってもハッキリとしたダメージもなく怯む素振りすら見せないのは、流石は改造敵と言ったところだろうか。

「クククツ・・・」

僅かに喜びの感情がガロウの口から漏れ出す。

この興奮、と言うよりも喜び。常識を外れるほどのタフネス故に、自分の力がある程

度出さなければいけない事をガロウは喜んだ。

「……丈夫なヴイランサントバツクだな！」

離れたところでコチラを馬鹿にしたようにさけぶ死柄木の声も、ガロウの身を心配し叫ぶオールマイト達の声も自分にとっては不要なものであり、この状況にとっての不純物でしかない。

全神経を目の前の敵に向ける。

いつまで続くか分からない、つかの間の戦闘を楽しむために。

「……冥躰震虎拳めいていしんこけん！」

正面から向かって来るテレフォンパンチを流水岩碎拳で受け流すことなく、正面から拳で迎え撃つ。

衝撃が腕を伝わって身体に響いてくる。今まで流水岩碎拳で流していただけの、この敵の純粋なパワーを感じ取れた。

自分と敵を中心とした硬質な物体がぶつかり合う音が広がり、次いで衝撃波で周りの者達が吹き飛ぶが気にも止めない。

「やつぱりこうじゃねえと！」

しゃがみ懐に入り込み、旋風鉄斬拳せんふうてつざんけんで切り刻む。

「個性は身体能力の延長つてどこかで聞いたが……お前は何処まで持つ？」

一撃必殺、と言うよりは息もつかせぬ程の連撃に攻撃は変わっていく。時に脳無の攻撃を避け、流し、脳無の身体を自分の拳で打ち、斬り刻む。

打たせずに打つ。

正しく武の理想を実現しているガロウを誰もが息を呑んでただ見ていた。オールマイトですら付け入る隙を見つけられぬ程である。

僅か三分足らずでガロウの攻撃が千を超えた頃、変化が起き始める。

「脳無が・・・押されてるだど・・・！」

ガロウが一步前に出れば脳無は一步後ろに下がり、脳無が後ろに下がればガロウは前が出る。

ジリジリと脳無が押され始めている。一步、また一步、脳無が下がる事に無数に打ち込んでいる拳からは今までに無かった手応えが少しずつ増え、伝わってくる。

個性の力が弱まってきている。

なら、ここが勝機。

「ふん！！」

力の込められた突きが脳無の身体を数m後退させ、ガロウは一瞬の呼吸のあとすぐさま距離を詰める。

攻撃が変化する。

拳を躲し、流しながら打ち込む。

強く、鋭く、深く、重く。

脳無の身体を打つ、ただひたすらに。

大きく脳無の体勢が崩れ、ハッキリとした手応えが感じられた。

「じゃあな、久しぶりに楽しめた」

大きく息を吸い込み、自身の両脇に両手————流水岩砕拳と旋風鉄斬拳を構えて
全力で——打ち込む!!

——轟ごうきくうれつけん気空裂拳!!

V S 脳無!! 終

雄英の教師陣は皆、次から次へと舞い込む仕事に追われていた。

生徒の安否確認、怪我人の確認、治療、警察への連絡と話し合い。それらを終えてもまた直ぐに別の仕事舞い込んでくる。

そんな騒々しい職員室から少し離れた小部屋。

静かだが、どこか重苦しいような雰囲気を感じさせる。

「生徒で怪我をしたのは緑谷と拳獣だけだ。いずれも軽傷・・・」

「軽傷・・・ですか？」

「まあ、アンタの話が本当なのなら拳獣の方は重傷のはずだったんだけどね、オールマイト？」

「・・・ええ、緑谷少年の話では腹部に大きな傷を負っていたと」

リカバリーガールの問い掛けにオールマイトは緑谷に聞いた通りの事を話す。観察

と分析、緑谷のそれに関しては変態と言えるほどにレベルが高い。

故に間違いは無いとオールマイトは思っている。

そして、それを聞いたリカバリーガールは納得したかのように頷いた。

「軽傷は軽傷。しかし、それは治ってきていたからという事かい？」

今まで黙っていた人物——否、ネズミー——が立ち上がって再確認してきた。

ネズミであるが、その正体は雄英高校の校長である。

「傷口を見る限りはそうとしか言えないね」

「しかし、彼の個性は増強型では？」

「今は分からない。本人が何か隠しているのか、それとも単に増強型由来の物なのか。

どちらにせよ、調べる必要があるかもしれない」

校長の表情はどこか険しさを感じさせる。

考えている事はガロウの個性の事だけではないようだ。

「オールマイト、君の話聞く限りでは拳獣くんは戦いを楽しんでたって？」

「はい、嬉々として向かって行きました。私の制止を聞かずに・・・笑みまで浮かべて」

「もしかしたら、満足出来る相手が居なかったからかも知れないね」

「凶抜けた才能故に・・・ですか？」

校長は首を縦に振り肯定する。

入学試験や個性把握テストの結果からも分かっていたが、拳獣の力量は飛び抜けている。

「同じクラスで推薦入学の轟くんや、入学試験で二位の爆豪くんも目を見張るほどの才能の持ち主さ！」

けど、それでも彼は余裕でその上をいつている」

正直不安なのさ、と校長は呟く。

「自身の隣や前に立つ存在が無いと言うことは、慢心や油断、それらを引き起こすという事だね」

「その通り！」

言葉の続きを変わりに口に出したりカバリーガールに校長は頷いた。

「増長した力が理由で道を踏み外すものも少なくは無い。だから僕達が彼の様な子を導いて行くのさ！」

根津校長の宣言にオールマイトは力強く頷いた。



「おい・・・話が違ったぞ、先生！」

ボウツ、とモニターの光が朧気に照らす暗い部屋に死柄木の怒声が響く。

しかし、モニターの中から帰ってきた言葉は死柄木の怒りなど知りもしない様な声だった。

『ふふふ、失敗は成功の母だよ？ 弔』

「失敗以前の問題だ！あんたが寄越した脳無だつて糞の役にもたたなかつた!!」

『なに？ワシと先生の共同で作った対オールマイイトの脳無だぞ？』

「何が対オールマイイトだ!？」

ガキ一人にやられたんだぞ!？」

『ガキ・・・雄英高校の生徒にやられたということかい?』

「そうだ、あのガキ! アイツさえ居なけりや・・・」

クソがあ!!と再度、死柄木は自分と黒霧しか居ない部屋に怒声を響かせる。

モニター越しに男は死柄木の言葉に対して少しばかりの驚きを感じた。

ドクターの言う通り、アレは対オールマイト用に作った一級品だ。例え相性が良からうが悪かろうが生徒などに倒される程に弱いはずがない。

『それも含めてだよ、弔。今回は僕らの考えが甘かったようだ。

だが、この程度でめげてはいけないよ。君には才能がある。それこそ、僕を超えるほどのね』

優しく言い聞かせるように語る。

『今は牙を磨く時だ。近い将来、平和の象徴を打ち倒すためにね』

言葉を区切り、ニヤリと笑んだ。

「どう思う? ドクター」

「有り得ん・・・と言いたいのが山々だが・・・」

「つまり、あの話を信用すると?」

男は楽しそうに意地の悪い笑みを浮かべながら話しかける。

「そういう言い方は止してくれ先生。返答に困る」

「ふふふ、濟まない。この性格はどうしようもなくてね」

目や鼻といった通常の人間なら持っている顔面のパーツが欠陥している男は、残っている口だけで喜びに似た気持ちを表す。

「ワシと先生の共同制作。・・・一介の生徒に壊されたと聞けば否定したくなる気持ちも分かると思うが?」

「確かに、ドクターの言う通りだ。僕もアレを甘く作ったつもりは欠片もなかった」

だとするならば、死柄木の言っていた生徒の個性が余程素晴らしかったのか、はたまた地力が抜きん出ていたのか。若しくは、その両方か。

前者なら非常に欲しいものだ。

「どちらにせよ、非常に興味を唆られる」

「はあ、また悪い癖だな。先生」

「仕方が無いさ、そういう個性なんだから」

巨悪は笑む。闇の中で。

始まるよ、雄英体育祭

挑発

空を切り裂き、腕を振るう。

地を踏みしめ、足を振るう。

他に誰の姿もない海岸で風きり音と砂の擦れる音、僅かな息づかいの音だけがガロウの耳に入る。

正拳を空に打ち込み、動きを止めた。

「……まだ、前の感覚とズレがある」

構えを解いて砂浜にストンと腰を下ろし考え込むその顔は、なんとも言えない表情。

「身体能力は上がっていたが、それは最低値が底上げされてただけ、か……」

あの脳無との戦いで分かった事は幾つかあったが、その中でもガロウにとって重要だったのはそれだ。

身体能力の最低値は上がっている。しかし、それに対して最大値は下がっていたの

だ。それに気付いた時は自分の早計さを恥じた。

あの戦いでの最後の一撃、本来であればもっと威力があった筈なのだ。

ムラが少なくなると言えば聴こえは良いかもしれないが、ガロウに至ってはムラなど殆ど問題ではないので関係ない。

「鍛え直しか……」

が、別に面倒だとは思わなかった。

常人以上にストイックだからなのか、ガロウは一から鍛え上げれる事を喜んだ。

今はヒーローとしての新しい人生をスタートした所なのだから、丁度いいと思えたからかも知れない。

「完成してる、つてのも詰まんねえ」

やるなら、とことんやる。

思い出すのは圧倒的だったあの力、異様な存在感。が、それと同時にムカつくあほほまで脳裏に浮かんできたため思考を中断。

高く、分厚い壁、今は乗り越えることもぶち壊すこともイメージ出来ないが、何れにしろ超える。

超えてやる。

「さてと、帰って登校の準備をするか」

立ち上がり、身に付いた砂を払い落とす。

新たな決意を胸に、水平線から登る朝日を背に、ガロウは歩き出した。又、新たな一日が始まる。

◎

「おっすガロウ！ って、朝から爆睡か？」

降ってきた声により意識を覚醒させる。

僅かに顔を上げるとそこには見慣れたクラスメイトが居る。

「………醬油、顔」

「せめて名前で呼べよ!？」

身体の節々を軽く動かしながら早く登校したので寝ていた事を思い出す。

周りを見ればクラスメイトの全員が教室に揃っていた。

「よう、拳獣！ 怪我はもういいのか？」

「……赤髪」

「外見で!?自己紹介したよな?切島だ」

少し冗談を言ってみれば思った通りの反応が返ってきた事に笑う。

それを見た切島と瀬呂は自分達がからかわれたという事に気付いた。

「・・・わざとだな?」

「やつと気付いたか?」

「お前なあ・・・」

呆れた様な表情を浮かべながら二人、特に敵との戦い、脳無とガロウの戦いを間近で見ている切島は元気そうなガロウの姿に安心した様である。

あの状況をなんとも思わなかった者など、オールマイトを含めて誰も居なかったのだから。心配する事は当然でもあった。

残念ながらガロウ自身はそんな事を気にもしていないが。

「みんなあー席に着くんだHRが始まるぞ!!」

急な飯田の大声がクラスに響く。

USJでの一件後、彼の中で何が変わったのかもしれない。・・・いや、元から彼はああいう人間だ。

「おはよう」

そして一分と経たないうちにチャイムがなり教室のドアが開き、クラスメイトのほと

んどが目を見開いた。

包帯でグルグル巻きにされた担任が入ってくれば、誰だつて驚くだろうから。

だがアレは見方によればかなり怖い。相澤の鋭い目付きも合わさつて怖い。まるでダークファンタジーなゲームに出てきそうな敵キャラだ。

「相澤先生、復帰はや!!」

「ミイラマンだ、ミイラマン!」

「無事だつたんですね!」

ガロウのなんともない様子を見たせいとか、相澤の姿を見た時のインパクトは凄かったようだ。

「俺の心配はいい、それより……」

戦いはまだ終わっていない。

シンツ、と教室が静まり返り、何人かは不安で表情を曇らせた。

「雄英体育祭が迫ってる」

「クソ学校ツポイの来たー!!!」

クラスの雰囲気は一転。

割れんばかりの声で溢れ、ガロウは素早く手で耳を抑えた。

それよりも気になる事が一つ。

「敵に侵入されたところなのに大丈夫なのか？」

「だからこそだ。拳獣の言うことも無論わかるが、学校側としては開催する事で逆に磐石だということを示したいらしい。

警備も例年よりかなり増やすからな」

続けられた相澤の説明によると、そう易々と中止に出来るものでは無いらしい。

たかだか体育祭と思っていたガロウの考えは間違っていたようだ。

「拳獣さんは興味ないんですか？ 全国のトップヒーローも見ますのよ？」

「まあ、楽しむよ」

「そ、そうですか」

返答が思いもよらなかつたのか声を掛けてきた八百万との会話はそれ程続けられたなかつた。

「各々どんな心構えでやろうと個人の勝手だが、年に一回、計三回の少ししかないチャンスだ。それを棒に振るかどうかはお前達次第だからな」

相澤は話を区切り、ホームルームを終わらせる。ガロウはそれを確認すると腕を枕にして再び眠りについた。

時間というものはあつという間に過ぎ去っていく。いつも通りに授業は進んでゆき時間は既に放課後。

そして何人かのクラスメイトが帰路につこうとしていたが、出来ないでいた。何故なら、

「な、何でこんなにも人が集まってんだ!？」

教室の前の廊下は他のクラスから集まったであろう群衆に埋め尽くされていたからである。

「な、なにぞと・・・」

「何かやったか俺達!？」

何かあったか何かやったか、何人もが考えるように呟く中でただ一人、爆豪だけが何時ものように鞆を担いで出口まで歩いていき面倒そうにいう。

「敵情視察だろ? ヴィランの襲撃に耐えたやつがどんなのか、体育祭前に見に来たってハラだろな。」

意味ねえし邪魔だ、どけモブ共」

「おめえは知らない人を取り敢えずモブって呼ぶのやめろ!」

その言葉で群衆が向ける非難の色が強まる。

「随分と偉そうだな。ヒーロー科の奴らって皆こうなのか？」

「ああ!？」

「ちよつと幻滅しちゃうな」

面と向かつて真つ向から爆豪に言つた男子生徒、時々見かけるB組の生徒では無い。となると普通科かサポート科。

少なくともヒーロー科ではない生徒が爆豪に突つかかっているのを見て、ガロウは少なからず興味をそそられる。

「知ってるか？体育祭の結果によつては普通科や他の科からでも、ヒーロー科編入も検討してくれるんだぜ？逆もまた然りだけだな。

少なくとも俺は、調子乗つてると足元掬つてやるぞつてー宣戦布告に来たんだよ」

中々良い啖呵をきつたその男子生徒は言いたいことは言い終えたようで場をあとにした。

「おうおうおう!!」

隣のB組のもんだけどよ！えらく調子づいちゃつてんなオイ!!

本番で恥ずかしいことなつても知らねーぞオイ!!」

非難の声が増える中、爆豪は気にする様子もなく人混みを通つて帰ろうとする。

「ちよい待て爆豪！おめーのせいでヘイトが集まりまくってんだが？」

「知らねーよ」

「・・・は？」

「上に、頂点に立ちや関係ねえ」

いつもの様に不遜な態度を貫くその姿勢。この状況でもそうあれる爆豪に感心したガロウは短く口笛を吹いた。

それに気付いたのか少しガロウの方を見て睨みつけ、直ぐに人混みを通って帰ってゆく。

「ま、そういう事だな」

「ガロウ!?お前まで？」

同じ様に鞆を担いで出口まで向かうガロウに、これ以上悪い印象を与えないでくれと上鳴から心配する声が漏れる。

しかし、ガロウは発破をかけるつもり満々。

「敵情視察、大いに結構。宣戦布告、大いに結構。勝つために情報を集めるのも、自分を追い込むのも悪くない。」

だが、ここに居る殆どのやつはなんだ？」

言葉が続ける。

「殆どが興味本位で見に来ている。大した目的もない。さつき啖呵をきつた二人のような心構えのやつが何人いるか。

行動に心が伴っていない、形だけ。

「こうやって見に来ただけで俺達の手の内が分かるのか？ 違うだろ？」

一度言葉を区切り見渡せば、群衆もクラスメイトも黙ってガロウに意識を向けている。騒ぎに気付いてやって来たであろう教職員も群衆の後ろから黙ってガロウの事を見ている。

ガロウは気にせず口を開いた。

「今のお前らがすべき事はなんだ？ 俺達の外見を眺めるだけか？」

「勝ちたいと思つてないのならそれでいい。だが、少しでも勝ちたいと思つてるなら一度取るべき行動を考えろ。晴れ舞台で恥かいても知らんぞ？」

「まあ、お前らの勝手だけだな、と付け足して群衆の隙間を縫い歩き廊下へと出て帰路につく。」

「……………これで少しはやる気出せば良いんだけどな」

先の挑発が効いていれば万々歳。

多くなくても骨のある者が出てきてくればいい。せつかくの催し物なのだ、退屈でない方が良いに決まっている。

僅かな期待を胸にガロウは歩を進めた。

第一種目!!

『群がれマスメディア!!今年もお前らが大好きな催し物!』

雄英体育祭が始まるぞ!!』

プレゼント・マイクのアナウンスが響き、次いで観客達の熱狂的な歓声。

本日は雄英体育祭。

天気は晴れ、絶好の体育祭日和である。

開会前から熱気溢れる会場の裏ではこのビッグイベントに挑む生徒達が緊張と共にまだかまだか、と待ち構えている。

「みんなあ!しつかり整列するんだ!!」

「飯田の奴はいつも通りだな」

「いや、若干緊張してるみたいだぞ?声がちよつと上擦つてた」

「ほんとかよガロウ?耳いいな!」

緊張を隠すように話す上鳴にそもそも緊張していないガロウが返す。無駄口を叩い

てるのがバレて飯田の声が直ぐに飛んできた。

『どうせテメーらこいつらだろ!』

一年にしてヴィランの襲撃を乗り越えた奇跡の新星!』

さあ、入場だ。

『一年!!ヒーロー科だろお?!』

紹介と共に入場、瞬間、けたたましい歓声とカメラのフラッシュが入場した生徒達を叩く。殆どの生徒がそれに吞まれている。

「鬱陶しい……」

ただ一人、ガロウだけは誰とも違い煩わしげだった。

暫くして生徒全員が整列し、満を持して壇上上がったのはなんと18禁ヒーロー、ミッドナイト。

「18禁ヒーローが高校に居ていいのか?」

「いいに決まってるだろ、常闇!!」

「峰田くん!開会式中だぞ、静かにしたまえ!!」

「A組、そこ。煩いわよ!」

常闇の呟きに叫ぶように否定する峰田、それに注意する飯田達を一喝しつつも壇上に立つミッドナイトは開会式を進める。

「選手宣誓！一年A組、拳獣 ガロウ!!」
名を呼ばれて壇上に向かう。

普通なら選手宣誓などある程度決まっている文をつらつらと読み上げるだけで終わるのだが、ガロウにそんな事をするつもりは毛程もない。

「今日、一学年の頂点が決まる。」

が、誰もそこにたどり着けはしない」

一拍。

「俺が立っている、弱いやつに興味はねえ。覚悟のある奴だけ取りに来い、頂点を！」

「何で煽ってんだよ!!」

切島と上鳴、二人の突っ込みが続く様に整列している生徒達からブーイングの嵐が飛び交うが、ガロウは挑発が上手くいったことに笑みを浮かべる。

「拳獣くん!!選手宣誓であんなこと言うなんて、何を考えてるんだ君は!!」

「別にいいだろ?周りを見ろよ、一層やる気が深まったみたいだぜ?」

「な、成程、皆のやる気を出させる為か」

列に戻る時に叱責して来る飯田のことは適当に丸め込む。相変わらず、ちよろい。

が、約一名涙目になりながら訴えて来た、峰田が。

「どーすんだよ拳獣!!お前だけじゃなくて、A組自体にヘイト集まりまくりじゃんかよ

!!

「気にすんな、勝てばいいんだよ」

「・・・ふん」

もはや悲痛とも言えなくも無い峰田の叫びを、当たり前であるかのように切つて捨てたガロウ。その言葉を聞き、同意するかのように爆豪が小さく鼻を鳴らした。

「さーて、それじゃ早速第一種目の発表と行きましょうか！毎年、ここで多くの者が涙を飲むわ！

私は知ってるけど、第一種目は何かしら？

言ってる傍から・・・今年はこれよ!!」

ミッドナイトが示したディスプレイに映っていたのは障害物競走の文字。

「スタジアムの外周、約4キロのコースを一年全員で競う大規模障害物競走よ！コースを守ってあげれば何をしてもOK!!」

早速始めるから、生徒達は準備をなさい!!」

◎

スタート位置に向かう中、ガロウは呼び止められた。振り返って見るとそこには轟が何か決意をした顔で立っていた。

「どした轟？」

「・・・緑谷にも言ったんだが、俺はお前に勝つぞ、拳獣。」

だから、全力で戦えよ」

短く言い切るとガロウを置いてスタート位置に向かつてゆく。

しかし、その清々しい決意とは違い、余裕のない目をしているのをガロウは見逃さなかった。

「・・・全力、ね」

一年全員がスタート位置につく。

「出すとしても、それは最終種目だ」

スタートのランプが灯った。

『スタートオ!!!』

生徒全体が動き出す。

しかし、スタートの出口は狭いので必然的に起こる、押し合い。

人混みで詰まっているのを呆れ返って見つめていたガロウは前方から自身が居る後方へと流れてくる冷気を感じ、ある確信とともに跳び上がった。

「冷たっ!!」

「なんだよこれ!？」

「動けねえ!」

天井に指をめり込ませながら下を見れば多くの生徒の足が氷漬けにされていた。

確認しなくてもこれが誰の作業なのかなどすぐに分かる。最初から有象無象をふるい落としに来たようだ。

「こつちとしてもそれは願ったり叶ったりだ」

急ぐことなく動くことの出来ない人の合間を縫い歩き、スタートラインを越える。もう既に動ける生徒達は遙か前方を走ってるようだ。

『こいつは意外!拳獣、まだスタートしてなかったのかよ!?!全員もう第一関門に差し掛かってんぞ?』

『何を企んでる?』

ガロウの取れる選択肢は幾つかある。

全員をごぼう抜きにして一位に出るのも良いし、適当に流して次の種目に進出するのも良い。

どうするか考えつつ、暫く走ると直ぐに第一関門らしきものが見えて来た。入試の時に壊しまくった大量のロボット、大きいのも小さいのも居る。

「・・・何人かはもう通り過ぎてるな」

頭上から振り下ろされる巨大ロボットの腕を避け、駆け登る。頭部部分に到着すると思いつきり殴りつけ、一撃で沈黙させながら第二関門に向かう。

ここで躓いている程度ならば観察する意味もないだろう。既に半数以上の生徒は先に進んでいるのだから。

『流石の拳獣！あつという間に巨大仮想敵を無力化しちまいやがった!!』

『相変わらずの戦闘センスだな』

『てかなんであの高さから飛び降りて大丈夫なんだ？普通なら足の骨砕けるぞ?』

『グロいこと言うんじゃねえよ』

聞こえてくるプレゼントマイクと相澤の声を完全に無視して走れば第二関門である綱渡りが直ぐに見えて来た。

「あれ？何でガロウ?」

「見当たらないと思ってたら、先頭グループに居たんじゃなくって後ろにいたのかよ!」
瀬呂と上鳴が驚きの声を上げる。それに反応するかのように何人かがガロウに視線を向けたが本人は気にしない。

「観察してた」

「「夕チわりい!?!」」

「ばーか、情報収集は知らない奴と戦う時の常識だ」

恐らく現在第二関門にいるもの達の何人かが次の種目に進める最終ラインだろう。

「まあ、観察はここからがメインだけだな」

「どういう事だ？」

「第一関門で実力のない奴らが殆ど落ちてるだろう？ここからは粒揃いだ、ある程度な」

「・・・言い方、容赦ないな」

「事実だ、先行くぞ」

走り、そして跳ぶ。

暫く宙を舞っていたガロウは数秒の後、何人かが慎重に渡っている綱の上に立って着地。

人ひとりが突然一本しかない綱に着地したのだから当然揺れる。結果、着地した綱に残っているのはガロウ一人。

更に綱の張力を利用してより一層高く跳躍、一気に広い足場にと降り立った。

『WOW!!なんつーこった、拳獣のヤロー一瞬で中間ポイントまで到達しやがった！』

あ、けど何人かが巻き添えに・・・』

『仕方ないな・・・』

少しでも余裕があれば綱にしがみついてガロウの巻き添えを食わずとも良かったで

あろう。だがもちろん彼らにそんな余裕などあるはずも無い。

不安定な一本の綱を渡るのに精一杯の集中力を使っていたのだ。

着地したガロウの体全体に再び視線が打ち付けられる。驚き、戸惑い、そういった感情が込められている。

「あれ、拳獣!？」

呆気にとられた様な表情で、拳藤も此方を見てるのにガロウは気付いた。

「ああ、お前もここに居たのか」

「随分なことしてみたみたいだね」

「それでも無え、先行くぞ」

再び駆け出し、再び跳ぶ。

綱の上を走り、そして跳ぶ。

後ろや横に意識を傾けて見れば、空中を動くことができる個性を持つ者や、立体的な起動が可能な個性を持つ瀬呂などは追いつき、追い越そうと食らいついてくる。

ガロウは笑みを深めた。退屈しのぎになるかどうかも心配だったが、なかなか楽しくなってきたようだ。

その中で一際目を引く存在が居た。あの日、教室まで来て宣戦布告をしてきた普通科の生徒——がおんぶをされながら綱を渡っている。おんぶをしている奴を殴りながら。

「……面白いな」

最後の綱を渡りきり第二の関門を突破。

僅かに進んだ所で微かな音が聞こえてきた。何か爆発する音が連続的に聞こえる。それと同時に開けた道と立ち上る砂塵、そしてかなり前方に、ゴールがある。

『さあ！後続も続々と地雷原の怒りのアフガンに集まってきたな!!』

轟と爆豪は結構前で争ってるけど、一位目指して気張れや！たまご共!!』
確かにかなり前には爆炎と砕ける氷が見える。あそこに爆豪と轟が居る。

「取り敢えず、三、四位くらいでいいか」

僅かな起伏や土の色の違いで地面のどこに地雷が埋められてるか、観察眼の優れているガロウに取ってそれを見つけるのは難しいことではない。

地雷を踏まぬように慎重に進む者がほとんどの中で、全くスピードを落とすことなく、一切の地雷を爆発させることなく進んでいくその姿は目立つ。

それを真似して地雷を気にせず駆け抜けようとする者達もいるが、いくらか進んだところで体勢が崩れて失速。

『拳獣の奴スゲーな！ここ地雷原だぜ!?!』

『一瞬でよく地雷の場所を見極めてるな』

『つーか、ごぼう抜きで三位まで上がってきたるし!?!』

特に障害もなく爆豪と轟から少し離れた後方、三位の位置へと着く。ゴールまでは100メートルを切った時だった。

突然、爆音と爆風が自身の背を強く叩いた。

反射的に後ろを見れば、爆煙、そして爆風でゴールに向かって飛んで行く金属片とそれに乗っかっている緑谷が居る。

「へえ、面白い事を考える」

しかし、頭上を飛んでいった緑谷は一瞬だけ爆豪と轟を追い抜くも、失速し再び追い抜かれそうになる。が、三人の間でもう一度爆発が起こった。

妨害と加速。

この二つの出来事が同時に起きた時点で、もはや確定した。

『キアキア！序盤の展開から誰がコレを予想できた!？』

今一番にスタジアムに帰ってきたその男・・・

緑谷出久の存在を!!』

歓声で溢れる中を緑谷に続き、轟、爆豪、そしてガロウがゴールをくぐる。

「つく・・・」

「・・・くそ・・・!!くそがつ・・・!!」

悔しそうな表情をする二人の横を首を回しながらガロウは通り過ぎる。

「いやあ、良い準備運動にはなったな」

ここで一位を狙うのも良かったが、思っていた以上に先頭争いを眺めているのが楽しかった為、水を差す行為は控えた。

後続が続々と帰って来ており、ある程度の順位が分かってくる。次の種目に何名進むかは分からないが、四位ならば問題無いだろう。

第二種目【前編】

「予選通過の42名が出揃ったわね！」

まだ見せ場もあるから、落ちちやった人も安心なさい！」

会場のざわつきからして、恐らくはここからがメインになってくるだろう。全員の前
に立ったミッドナイトが声を張り上げながら説明を始める。次に行われる種目が何に
なるのか、殆どの者が緊張した面持ちだ。

「次からいよいよ本戦よ!!」

「ここからは取材陣も白熱してくるよ！キバリなさい!!」

確かに観客席の方を見てみれば決まった所にカメラや機材を担いだ集団が居る。相
澤が言っていた通り相当な数のマスコミが来ているらしい。プロのヒーローになる前
から自分自身の手の内を晒す事になるかもしれないと、ガロウは軽いため息を吐く。

「こういう所の危機管理は相澤の様に固くはないらしい。」

「さーて、第二種目よ!!」

「言ってるそばから、コレよ!!」

ディスプレイに映されたのは騎馬戦の文字。

二、三人でチームを組み、先程の第一種目での順位に応じたポイントの合計を奪い合うらしい。順位が高いものになるほどポイントが多くなる。

そして第一種目で一位になった緑谷に与えられたポイントが破格の、1000万ポイント。

「い、1000万ポイント……」

「うわあ……災難だな、緑谷」

取り敢えず頑張れよ、と肩を叩いてやったが反応がない。まるで屍の様だ。

周りには緑谷を獲物の様に見つめるクラスメイト達。いや、クラスメイトに留まらず第二種目に進出した全員が緑谷に視線を注いでる。当たり前のことだが、狙われるだろう。

「上を行くものには更なる受難を。Plus ultraの精神よ!! 気張りなさいな！」

告げられると同時に各々が動き出す。と言っても第二種目に残っている生徒達はその殆どがA組とB組のみなので、基本的にはクラスメイト同士で組む者達ばかりだ。

どうやら早め早めに行動しなければ、組みたいものとは組めなくなりそうだ。ならば、行動するのであれば早くするしかない。

「つー訳で、どうだ常闇？」

「拳獣か・・・俺は構わん。理由がしっかりとしてるのであれば」

「なら、問題ねえな」

互いの目標を確認するかのよう、固く握手を交わす。常闇の個性であれば、一人であつたとしても広範囲の攻防、索敵も可能。

「あと最低でも一人は必要だが、宛はあるのか？」

「考えてはある」

目的の人物に指を向ければ、常闇もその指先を追うように向け二人のクラスメイトを確認した。

「麗日、緑谷、組まないか？」

「え？」

「け、拳獣くんと、常闇くん!？」

急に声を掛けられた麗日と緑谷の二人は、明らかに驚いていた。まさか、声を掛けられるとは思ってなかったのだろう。

「もしかして嫌か？」

「い、嫌じゃないよ！というか、願ったり叶ったりというか・・・」

一瞬だけ断られるかと思つたが、その心配も杞憂だった。しかし、緑谷は何故自身な

のかと疑問を口にした。

「ハッキリ言えば麗日の個性で機動力を底上げしようと思つてな。まあ、緑谷のポイントを保持し続けて勝つてのもありだと思つてな」

「な、なるほど」

「策士だな」

全員から狙われるとしても、とにかく合計のポイントとしては緑谷のお陰で有利。麗日を加えた事で機動力の確保も、常闇を加えた事で中、遠距離の対応も索敵も出来る。完璧とは言えずとも、布陣は整った。後は勝つのみである。

◎

『さあ起きろイレイザー！15分の作戦タイムを経て、12組の騎馬が並び立った!!』
『・・・面白え組が揃つてるな』

緑谷チーム

・拳獣・緑谷・麗日・常闇

爆豪チーム

・爆豪・切島・芦戸・瀬呂

轟チーム

・轟・飯田・八百万・上鳴

葉隠チーム

・葉隠・耳郎・口田・砂藤

峰田チーム

・峰田・蛙吹・障子

鉄哲チーム

・鉄哲・骨抜・泡瀬・塩崎

物間チーム

・物間・円場・回原・黒色

拳藤チーム

・拳藤・小森・取蔭・柳

鱗チーム

・鱗・穴田

小大チーム

・小大・凡戸・吹出

角取チーム

・角取・鎌切

心操チーム

・心操・庄田・尾白・鬪千とうせん

『よオーし組み終わったな?!?!いくぜ!!』

残虐バトルロイヤルカウントダウン!!』

プレゼントマイクの声がスピーカーを通してカウントを進めていく度に、ステージ上の熱気が高まってゆく。

やはりと言うべきか殆どの視線が此方に向けられている。速攻で此方に攻めてくるつもりだろう。

「準備はいいか?緑谷」

騎手となった緑谷に問いかけてみれば、僅かに緊張しているのが伝わってくるが気合の入った良い返事が返ってきた。

「何時でも行けるよ、拳獣くん!」

「ならやるか・・・勝ち上がるぞ!!」

「よろしく!!」

いよいよ、合戦の火蓋が切られる。

『START!!!』

声と同時にいきなり二組の騎馬が迫ってくるが、予想していたことである。焦る必要すらない。

「頼むぞ、麗日」

「うん!!」

重力による枷が消失し、全力で跳躍した。地にクモの巣上のヒビを入れる程のガロウの脚力は麗日一人分の体重など感じさせぬ、誰の手も届かない大跳躍で迫っていた騎馬を跳び越えた。

やがて重力に従い落下していく中、ガロウは眼下に居る爆豪チームの騎馬を見据えた。

「肩借りるぜ、爆豪」

「あ? うごっ!?!」

地面に着地することなく爆豪の肩に短く着地し再び跳び、他の騎馬から離れた場所に今度こそ着地した。

「あの、割れ髪ヤロオオオオ!!!」

「落ち着け爆豪! って、来てるぞ騎馬!」

「G A A H H H!!」

「聞けよ!!」

後ろから聞こえる怒りに震える爆豪の声など気にしない。怒るだけ怒って、冷静さを欠けばいい。足元を掬われればそれだけでライバルが減る。

「な、なんだろう。拳獣くんが凄く悪い顔をしている気がする」

「黒き笑み」

横目でディスプレイに映る現在のランクを見てみれば、意外な驚きが起こった。上位のほとんどをB組が占めている。

しかも、案の定ではあるが爆豪は足元を掬われた様で物間にポイントを奪われていた。

周囲の様子を一瞥してから少し気を引き締めた。ここからが本番である。

「よう轟、そろそろ来ると思ってたぜ?」

「ああ・・・そろそろ、奪るぞ」

頂点を取りに、覚悟を持った者が立ち塞がった。

第二種目【後編】

「そろそろ、奪るぞ」

「親切な事にわざわざ口に出しながら騎手の緑谷とガロウ自身を睨むように見る轟。轟を支える騎馬は、飯田と八百万、そして上鳴の三人。機動力、攻撃力、防御力の三つがそろったバランスのいいチームとも言える。

「どーする緑谷？俺は相手しても良いと思うが、ちょっと面倒くさいぞ？」

「うん、この種目で轟くんの個性は動きを止められるから脅威だし、下手に空中に逃げても恐らく八百万さんに対応される」

「じゃあどうするん、デクくん？」

「位置取りを意識しながら、時間を稼ぐ。拳獣くん、頼める？」

「任せろ」

轟チームだけを警戒する訳にもいかない、他にも脅威になりそうなチームはいる。上

手く誘導、もしくはそう出来るように轟チームの隙を作れば他のチームが轟達を潰してくれるかもしれない。実際、何チームかは轟チームを後から狙おうとしている。

だが、やはりことはそう上手く運んでくれない。

「飯田、前進。八百万、上鳴」

「しつかり防げよ!!」

短な合図と一緒に、周囲に放たれた無差別の大放電。距離を取る事で感電は逃れたが、他のチームは避けることも出来ずに感電。

轟の氷結で完全に動きを止められて、あつさりとハチマキを奪われていた。

まずいかもしれない。

ほんの僅かだが、そんな考えが心の奥底でチラついた。一人でなら問題ない。しかし、荷物を抱えているこの状況では万が一もあるかもしれない。明らかなるハンデを現状、抱えている。

が、だからこそだ。だからこそ、面白い。

「常闇、通じなくていい。攻撃し続けて牽制しろ。緑谷、踏ん張れよ。隙が生まれたら速攻で行動するぞ」

「分かった」

「っ、うん!」

奪い掛かろうとして来る轟達に対し、常闇はダークシャドウで攻撃を続ける。伸びていく黒い腕が轟のハチマキに伸びるが、素早く創造された盾によって簡単に防がれた。

反撃に何度も放電が飛ばされてくるが、それに合わせて距離を空ける、出来なければダークシャドウでガードをさせる。

上鳴の電撃は無限に連発出来るものではない上に、使用を続ければ能力の低下を招く。ならばやはりここで注意すべきは、轟の広範囲の水結。

「なあ、緑谷。轟が逆側の個性を使うの見た事あるか？」

「いや、僕は見た事ないし。多分だけど轟くんは炎の方は使う気はないんだと思う。この前の模擬戦だって炎の個性は使ってなかったし」

「あく、そう言えばそうだったか・・・」

「うん、だからガロウくん。常に僕達と轟くんの中に、飯田くんを挟むように位置取りして欲しい」

「おっけー分かった。やっぱり、お前は余り実力ないけど頭が回るな」

「え、う、うん・・・あ、ありがとう・・・」

轟達が距離を詰めて来れば遠のき、横に動けばそれに合わせて飯田を壁にするように位置を取る。

分からない人には全く分からないだろうが、戦い慣れているもの、それこそ百戦錬磨

のプロヒーロー等は見抜いているだろう。

もちろん轟も分かっている。分かっているながら、対処が出来ずにいる。完全な手詰まり。

刻一刻と、時間が進む事にポイントの少ない轟達は不利に、逆にガロウ達は有利になつて行く。状況は膠着状態のまま時間だけが過ぎていき、残り時間が一分を過ぎようとしていた。

そんな中でまた、一人の男が覚悟を決めていた。

「轟くん、皆……」

この後、俺は使えなくなるから……とれよ！轟くん!!」

「……飯田？」

「トルクオーバー！レシプロバースト!!」

刹那の瞬速。

充分に空けていた筈の安全領域が、瞬間にして塗りつぶされる。緑谷、常闇と麗日は反応できない。ガロウですら一瞬であるが驚愕に目を見開いたのだから。特別に脅威を感じた訳では無い、言うなれば意外だと思つたのだろう。本来、出せるはずの無いものを出してきた、そんな感じだ。

緑谷に轟の手が伸ばされる。

しかし、触れる数瞬間にガロウは常闇と麗日を押し退ける様にして斜め後ろに下がった。僅かにハチマキを掠めたものの、轟の手は虚空を掴むだけに終わる。

『なんだ今のスピード！何が起きた!!?速いなんてもんじゃねえ!!そんな加速あるなら予選で見せろよ!!』

『アホか、奥の手は隠すもんだろ。』

「しかしー」

『けど拳獣も拳獣で反応しやがった！マジかよアイツ、スゲーな!』

『お前・・・俺のセリフ・・・』

プレゼントマイクの言葉は、会場に居る観客全員の気持ちを代弁した物であった。

「っ、くそ!?!躲された!!」

「ご、ごめん！拳獣くん、助かった!!」

あれだけの加速を残り時間僅かのタイミングで使ったということとは、何かしらの制限があるという事を公言しているようなものだ。

残り時間も少ない中、ガロウは更に念を入れに掛かる。

「くっ・・・すまん！もう一度、取りに行く」

「ああ、次でやろう」

体勢を立て直して、此方を正面に見据えた轟チーム。再び超スピードで取りに来よう

としているのだろうか、体勢を立て直す僅かな時間、それだけでガロウにとっては充分だった。

足を上げると飯田が駆け出すよりほんの少し早く、思いっきり地面に振り下ろした。地面がひび割れて激しく隆起する。飯田は足を止めるしかなくなり、更に行動範囲を制限していた氷壁もバラバラに砕け散った。

『ハアツ!!拳獣のやつ舞台を叩き割った!!轟チーム、足を止めざるを得ない!まさかのこのタイミングでの大妨害!!』

『合わせて緑谷チームの障害にもなっていた氷壁を壊したか』
不安定な足場と揺れによつて足を止めている轟チームは格好のポイント。狙わない意味がない。

「拳獣くん、取りに行こう!!」
「おっけー、任せろ」

飯田と違い、ガロウは足場の善し悪しに関係なく動き回ることが出来る上に、支えな
いといけない重量は麗日一人分のみ。細かな跳躍と着地を繰り返し、ハチマキを奪える
射程圏に入った。

「うおおおおおおお!!」

緑谷と轟が互いに手を伸ばす。

『しゅーりょーりょーう!!』

互いの腕が交差しあつたタイミングで、制限時間終了が知らされる。そこで緑谷と轟の二人は、ガロウの足が轟の腕に添えられている事に気付いた。それは僅かに時間的な余裕があつたとしても、轟はハチマキを奪えずに終わっていたことを示している。危ない橋は渡らない。

経験の少ない者、それこそ緑谷や轟達には分からないだろうが、経験量の違いを物語っている。

「っ……拳獣！」

ただ一言、振り絞るようにしてガロウの名を呼ぶことしか轟には出来なかつた。

『早速、上位四チームを見てみよか!!』

一位、見事な逃げ切り緑谷チーム!!

二位、轟チーム!!三位、爆豪チーム!!

四位、鉄てっ……アレ!?心操チーム!!』

意外そうな発表に会場がざわついたがその元に目を向ければ、あの先制布告をして来た普通科の心操という生徒のチームだ。もう一人見覚えのない……いや、第二種目の時に心操をおんぶしていた、確か鬨千とかいっただ普通科の生徒もいる。

どうやら、生き残っていたらしい。

「ありがとう、拳獣くんのおかげだよ！」

「……いや、そうでも無い」

轟と爆豪は発表が終わっているのに沈んだ表情のままだ。

「くそっ！負けたよ緑谷くん、拳獣くん」

「そ、そんな事ないよ」

「緑谷のその判断力は中々のものだったぞ」

「拳獣くん……」

思いもよらぬ賞賛に、緑谷は喜びとも悔しさとも言えない表情を浮かべていた。

◎

休憩時間になりトイレを済ませ廊下を歩いていると、人の気配を感じた。それに合わせるように、話し声が聞こえる。

「母は………煮え湯を浴びせた」

聞こえて来たのは轟の声。

僅かだが興味を惹かれて声の元に歩いていると、角を曲がったところで壁にもたれかかって居た爆豪と目が合った。

「何しー」

てるんだ、と聞こうとして口を閉じる。黙っているとジェスチャーで伝えてきたからだ。

（何してんだ爆豪？）

（うつせえっ！ちよつと黙ってる割れ髪！）

小声で怒鳴るというちよつと器用な事をしながら、爆豪はガロウと一緒に再び話し声に耳を傾ける。

「俺は、クソ親父の個性を使わずに一番になる。それで、アイツを完全に否定してやる」
全てを聞いてなくとも、ガロウは短い言葉で轟がどうのどのような内容の話をしてきたのか察した。横を見れば、爆豪が珍しいことに圧倒された様子の表情をしている。

無理もないのかもしれない。普通の生活を送っていれば、まして学生が負えるような生活では無いだろう。

ガロウには関係ないが。

「俺は右の、母さんの個性だけで上に行く。時間取らせて悪かったな」

「僕は・・・」

聞こえてきた声は緑谷の声。

轟がさつきから話していた相手は緑谷だったようだ。

「誰かに助けられてここにいるんだ。だからこそ、オールマイトみたいになる為にも僕だつて負けられない。」

だから僕からも・・・僕も、君に勝つ!!」

宣言が終わると、二つの足音は遠ざかっていく。離れていく二人の事を確認してから、爆豪はストーンと腰を下ろす。

「盗み聞きなんて趣味、あつたんだな爆豪」

「ああ!?!ンなもん無えわ、クソ割れ髪が!!」

ちよつとした冗談を掛けてやればいつもの様にキレて返事を返してくるが、その表情はやはりと言うべきか少し暗い。

「・・・関係ないだろ」

「あ?」

「お前がアイツの事を気にして、何か変わるのか?」

爆豪の返答は沈黙だった。答えられるはずが無かった。

「だったら、やることは多く無いはずだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「お前はいつもみたい、馬鹿みたいに爆発してた方が似合ってるぜ」

「うるせえよ・・・クソ割れ髪が」

腰を上げて歩き出す。確かにこんなのは自分に似合わない。ぶち当たったら思いつきり、ぶちのめす。紅白頭も、舐め腐っている割れ髪も、全員をぶち倒して頂点にと立つ。

あと少いで、正真正銘の一位だ。

「てか、俺の前を歩いてんじやねえよ!!」

「方向が同じなんだから仕方ないだろ、やっぱり馬鹿か？」

「誰が馬鹿だ！後ろ歩けや!!」

「俺に勝てたらそうしてやるよ。……無理だと思うけど」

「ぶっ殺すぞ、クソ野郎!!!」

実力差

昼休憩も終わり、いよいよ最終種目発表という事でグラウンドに降りてきてみれば少し異様な光景、と言うよりも何故かチアリーダーの格好をしたA組女子達が居た。

「・・・ねえ、拳獣。あれ何？もしかして、私らB組もやらなきゃいけないの？」
「そういう訳じゃ無さそうだが？」

丁度グラウンドに来たB組の中から、不安そうな表情で聞いてきた拳藤に適当に応えながら周りを見れば、この珍妙な光景を生み出した二人を見つけた。

「いやあく、良いですなあ」

「やっぱり、名案だったな！」

「ーお前らにしては、大成功つてところだろうな？」

「拳獣!？」

後ろめたさからか、それとも単に突然後から肩を組まれた事に驚いたのか、峰田と上鳴が肩を跳ね上げながら絶叫にも似た声音で叫ぶ。

「なんだよ拳獣!?!別にいいだろ!?!」

「そうだぞ！お前も嫌いじゃないだろ！」

ダメ元でも良いと、ガロウを仲間に引き込もうかと囁きかける二人。僅かに力を込められた腕にまた肩を震わせる。

だが、発せられたのは意外な言葉だった。

「まあ、悪くは無いな」

「へっ?」

「良く鍛えられてる」

「そつち!」

まさか同じ事を考えている同士かと喜んだ二人であつたが、自分たちとはそもそも見えていた視点が違つていた。

だが、どうやら説教をしてくる気配もなかつたので、結果的に二人は安堵する。

「騙しましたわね!? 峰田さん、上鳴さん!! って、拳獣さんもですの!」

「・・・こいつらと同類扱いはやめろ」

「もう手遅れだぜ、拳獣」

「ああ、俺らは既に同士だ」

迷惑でしかない仲間だぞ発言といい笑顔にイラツとしたので、安堵していた二人を女子達に投げ飛ばすようにして腕組を解いた。

裏切り者、と叫びながら叩かれまくる二人に頑張れとエールを送つてその場を離れ

る。二人の身体に幾つの紅葉が出来るか、楽しみにしておこう。

「なに？拳獣って筋肉フェチ？」

「………拳藤、絶対にそう呼ぶんじゃない、特にお前のクラスの物間に聞かれると——」

「聞かれると？」

「煽ってくるたびに、アイツを全力で殴ることになる」

「……うん、それはやめてくれ。多分、死ぬ」

吹き出しそうになるも寸でのところで堪えて集合する。既にミッドナイトが壇上に立っており、トーナメントの説明を始めようとする。

だが、その直前に待ったがかかった。手を上げたのは余りパツとしたところがない尾白。

「すみません。俺は最終種目、辞退します」

ざわめき声上がる。

ここまで勝ち上がって来たと言うのに、ここで辞退する理由が分からなかったからだろう。更に尾白に続くようにして、B組からも辞退するものが一人だけ現れた。

話を聞いている限りだと、何故か騎馬戦時の記憶がほとんど無く自身の実力を出せたかどうかも分からない。ならば、自分たちは最終種目に出るには相応しくないという考

えに至ったらしい。

『どうなんのこれ、イレイザー?』

『ミッドナイトの采配次第だろ』

「・・・そういう青臭い話はさ、好み!!」

尾白、庄田の辞退を認めます!」

好みで決めるという立場的には如何な判断によつて、二人の辞退は正式に認められた。

順当に考えれば抜けた二人に代わつてトーナメントに進出するのは拳藤チームの誰かになるのだがそれを拳藤達は断り、鉄哲チームから鉄哲と塩崎が進出した。

「それでは、対戦相手はクジ引きで決めるわよ!」

各自が順番にクジを引いた結果、ガロウは三回戦目に切島と当たる事になった。この試合を勝ち進めれば、第四試合のB組の鉄哲か少し気になっていた普通科の闘千と当たる事になる。

第一試合では、気になっていた内のもう一人の普通科生徒、心操が緑谷と当たっている。両名共に余り手の内を知らない、心操に至つては接点すらないため、観察できる機会があることを僅かにだが喜んだ。



レクリエーションも終わり、セメントスによる舞台建設も完了に向かうに比例して会場のボルテージが上がってゆくのを肌で感じる。

ここからが本番と言っても過言ではないだろう。最終種目が、いよいよ始まる。

『さあ、遂にここまでやってきた!! やっぱり最後はこれだ、ガチンコ勝負だ!! 準備はいいか卵共!?! 良くなくつても始まるかな!! 最後まで全力で戦い抜けや!!!』

「・・・全力か」

出すことにはならない、その考えは慢心でも何でもなく客観的に自身の実力と他の実力を比べて出た答えだ。

「そうだが、拳獣! 全力でやろうぜ!!」

「・・・そうだな」

己の拳をガンガンと合わせて言ってくる切島を見て考えれば、確かに硬化の個性を持つ切島と自分の相性は悪い。直接戦ったことも無いので、いったいどれだけの硬度を有しているのかも分からない。

しかし、それでも負ける気はしなかった。

既にガロウの興味は、舞台の上で緑谷と相対して立つ心操に向けられている。

「勝者、緑谷くん！二回戦進出!!」

結果として、心操は緑谷に負けた。

洗脳という、戦闘には向いていないが非常に強い個性で緑谷を追い詰めたが途中で緑谷が正気に戻ってからは早かった。

尾白から対策を聞いていたらしく、洗脳を解いた後は一言も喋ることなく勝負を決めていた。

「とんでもない個性だな．．．」

舞台を降りていく心操を見ながら、ガロウは若干安堵する。仮に、心操の個性を聞かずに戦うことになっていたら負けしていた可能性は大いにあったからだ。

だが、これで一つの脅威は去った。

「拳獣くん、切島くん。そろそろ控え室に行った方がいいのではないか？」

「そうだな！先行つとくぞ、拳獣！」

「頑張れよ、二人とも！」

背に受ける声援にヒラリと手を降って応え、控え室に向かう為通路に出る。

数分経ったぐらいだろうか。何やら轟音とどよめきが聞こえたかと思うと、轟の勝利

と二回戦進出を知らせる声が聞こえてきた。

「……早すぎんだろ」

制限範囲が決められていることを考えれば、轟の氷結の能力はとてつもなく有利だったが、それにしても早すぎる。

「さて……と、いよいよよか」

舞台の整備も済んだ。

控え室を出て、舞台に歩を進める。

『続いて第三試合!!』

男気一筋ど根性! 硬化! 切島鋭児郎!!』

「いよっしゃあ!!!」

プレゼントマイクの紹介に合わせて切島が舞台上がり、鼓舞するように気合いの入った雄叫びを上げた。

ガロウも舞台に足をかける。

『正直言つて実力が読めねえよ! けど絶対にコイツは強いぞ!! 拳獣 ガロウ!!』

「……………」

試合開始が知らされると同時に、切島は腕を硬化させると構えをとる。それに対するガロウはただ普段の様にゆっくりと歩を進める。

散歩でもしているかのように、警戒してる素振りもなくゆつくりと切島に向かって歩く。

『おっと、拳獣！構えることなく切島に近付いていく！』

『何のつもりか知らねえけど！遠慮なく行くぞ!!』

近付いてくるなら迎え撃つと、短くステップを刻むと全力で硬化させた腕を振り抜く。ガロウは迫る拳を難なく受け流した。

『まだまだまだまだまだまだまだ!!』

当たらなかつたからどうした、何度も何度も拳を打ち出しては引き戻し、打ち出しては引き戻すを繰り返す。

硬化の硬さにそこそこの速さも相まって、並の人間に当たればタダでは済まない。生憎とヒーロー科に在籍するものは皆が並の人間ではないが。

中でも特にガロウは一線を画す。

『ラツシユラツシユ、ラツシユ!!!切島、何度も拳を突き出す!けど……一発も当たってねえ!!どうなってんだよ!?!』

『襲撃騒動の時に見たが、全部の攻撃を完璧に逸らしてやがるな』

『はあ!当たってないなら切島の攻撃意味ないじゃん!?!』

『……いや、それはどうだろうな』

四十発以上の拳を流水岩碎拳で受け流した所で、双方が一度大きく距離を開けた。ガロウは自分の拳に視線を下ろしてから、切島を見据える。

「つ……、お前の攻撃なら効かねえよ!!」

「へえ、思ってたより硬い」

様子見として力を抑えて此方からも何発か攻撃を叩き込んでみたが、意外と固く完璧に打撃が通らなかつた。しかし、もう少し威力を上げれば問題は無い。実際に多少のダメージは入ってるようだ。

「切島。少しやり方を変えるぞ」

「何をしたって無駄だぜ、拳獣!」

走る勢いに乗せて繰り出されるテレフォンパンチ。それを弾いて手首を掴む。

「つくかまくえた」

「つうおお!」

前に進む力を利用し腕を捻りあげながら体重を掛けて地面に押し倒せば、綺麗な関節技が決まる。反射的に全身を硬化させて地面との激突をノーダメージにしたようだが、そのせいで動きは封じられたのだ。

「どんなにお前が硬かったとしても、こんな風に対処は簡単だ」

余りの早業にワンテンポ遅れてからの歓声。切島にとってはそれが悔しく、何とか逃

れようと藻掻くがビクともしない。

数十秒程が経ち、切島が僅かに諦めようとした所で不意に拘束が解かれた。

「なんのつもりだよ?」

「殴り合いだ。好きだろ、多分?」

一歩引いた位置から見下ろしてくるガロウに僅かなイラつきを覚えつつ、切島は立ち上がり全身を硬化させる。聞かなくとも、下に見られている事が切島には分かった。

「後悔しても知らねえかな!!」

「そういうのは、まともに一発でも当ててから言え」

向かってくる拳を、一歩も動くことなくガロウは迎え撃った。硬化された拳に生身の拳をぶち当てる、十人が聞けば十人が無茶無理と応えそうな荒業をガロウはやってのけている。

この荒業に誰よりも驚いたのが切島だ。硬化している拳はただ単に硬いだけではないことを、本人だからこそよく知っている。硬化した皮膚は剃刀のように鋭いのだ。幼い頃の実体験でそれはよく知っていた。

「つどーなってんだよ!?!」

疑問が困惑が、思わず漏れ出すが目の中の男は応えない。ガロウのその冷静さに、切島は焦ってしまった。焦りにより、パンチの威力に意識が傾いてしまい、ほんの僅かだ

がやや大振り気味になったのだ。

「もうそろそろ、いいか」

「っー!?!」

急に視界からガロウの姿が消えた。突き出した拳を潜り抜けて、懐に入られた事に気付くのが少し遅れた。視線を下ろせば、意地の悪い笑みを浮かべたガロウが自分の胸部に掌を添えている。

密着された状態からパンチは無理だと分かつてる。だが、猛烈に嫌な予感がする。反射的に全力で胸部を硬化させたのは勘だ。

「無駄だって」

「っ!?!」

それは切島にとって初めての体験となる。

身体が内側から爆発した様に錯覚した。強烈な痛み、次いでコンクリートの冷たさと固さが今の自分が舞台上に横たわっていることを教えてくれる。

彼方に飛んでいく意識の中で、ガロウという男と自分の間にある決定的な差を理解した。

「いい運動にはなった、ありがとな」

嫌味にしか聞こえない言葉を最後に、切島は意識を手放した。

既視感

『勝者、拳獣ガロウ!!二回戦進出!!』

ミッドナイトが、次の試合への進出を知らせる。運ばれて行く切島の事を見送り、ガロウは舞台を降りて通路へと入る。

良い運動が出来たことを満足に思い歩み続けるガロウは、前方から近付いて来る男を見て歩みを止めた。

「余裕の勝利、おめでとさん。まあ、アンタだったら当たり前か」

「・・・闘千、だったか?」

ガロウの十歩ほどの所まで来ると、男――闘千は足を止めて向き合った。髪を短く纏めた、どこか自分に似た感じがする男だ。尚且つ狡猾な雰囲気もする。

嫌いな感じではない。

「実はアンタにさ、礼を言いたくってな」

「礼だと?」

「そそ、礼だ」

少し長くなるだけでも言うように、鬨千は壁に背を預け此方に視線だけを向ける。

「知ってるかもだけど、鬨千形象だ。他の奴等はシヨウツて呼んでる。第一試合に出てた心操と同じクラスの普通科でー」

「本題に入ったらどうだ？時間ないだろ？」

「ああ！そうだそうだ、次の試合は俺の番だったな」

慌てる素振りを少しも見せることなく、鬨千は壁から離れて深々と頭を下げた。わざとらしく、どこか演技地味な行動を前に、僅かに目を細める。

「ありがとう！お前のお陰だ」

「・・・何がだ？」

「勝てるってことさ。とりあえず、見といてくれよ」

それ以上は何も言う気がないのか、舞台へ向かって自身の横を通り過ぎて行き、歓声と熱気が渦巻く舞台へと躍り出ていった。



『続いて第四試合!!』

男気一筋ど根性！鋼化！ヒーロー科、鉄哲徹鐵！！』

「いよつしやあああああ！！」

雄叫びを上げながら舞台上に上がる鉄哲に、酷く既視感デジャブを感じる。直前まで切島と戦っていたガロウならば尚更だ。

『それに対するのは心操に次ぐ普通科からの出場者！詳細のプリント忘れたから正直どんな個性か、実力すらかかんねーからゴメン！！闘千 形象！！』

『忘れてんじゃねえ』

ガロウも含め、会場の視線の半分以上は闘千に向いている。初戦で見せた心操の活躍もあり、実力が未知数だとその分観察しようと思うのは当然の事ではある。

だが、闘千の実力もこれからの戦いでハッキリするだろう。通路の壁にもたれ掛かり、興味と期待の混じった視線を闘千の背に向ける。

『START!!』

「行くぞオラア!!」

先に動いたのは鉄哲。

切島と同じような個性なら、接近してからの格闘戦が得意なのは明らかだ。

「お手柔らかに頼むわ！」

「ワリイ、手は抜かねえ!!」

笑いお願いする鬨千に断りを入れると、身体を鉄化させるや容赦なく一撃目を打ち出し、盛大にから振った。

無駄のない綺麗な動きで避ける。それを見て鬨千が格闘技経験者である可能性をガロウは見抜く。

「怖い怖い、流石はヒーロー科」

だが妙な事に、鬨千は決定的な隙を撃つことなく軽口を叩きながら距離を取るだけに留めている。

時間制限がある以上は体力切れを狙っている訳では無い。個性の特性上、攻撃が通りにくいとはいえ攻める方法が無い訳でもない。流石にそれが分からない程、馬鹿ではないだろう。

更にガロウに見せたあの妙な自信。

行動と言質が噛み合っていない。ボタンを掛け違えた様なモヤモヤが、ガロウの思考を深める。

「・・・何を狙っている、あの野郎」

呟きに応える者は居ない。いや、否だ。

一人だけ無言ではあるが、応えた。

鉄哲の猛攻を避けながら鬨千とガロウ、二人の両の眼が交差する。

「ああ、はいはい。見てろって事ね」

鬪千は意思が通じたかのように満足気に笑みを浮かべると、完全に動きが切り替わった。

「余所見なんかしてんなよ!!」

「つと、悪い悪い」

「本気で来ねえのかよ!?!」

「そーだな・・・アイツも見てるし、そろそろ真面目にやってみますかね」

向かう拳を眼前まで引きつけると、手首でそれを弾き、あらぬ方向に流すと同時に鉄哲の右頬に拳をめり込ました。

「つ、あれは!?!」

一目見て、それが何か分かった。

「いやあ、流石に硬い。手が痛え」

「つ!効かねえよ!!」

「阿呆、知ってるよ」

「つ!?!」

三発連続に打ち出された鉄哲の拳は、鬪千の手によって再びあらぬ方向に流され、投げ技による反撃を顔面から食らうことになる。

この時点で、既にガロウの中で疑惑は確信に変わった。間違いようがない、鬨千が使っているのは流水岩碎拳だ。

「どういう事だ……!」

見様見真似の即興で行っているとは思えないほどに、精度が高い。

『うえ?!アレって拳獣と同じ……!』

『同じ動きだな……』

ガロウの事を知っている教師や、同じクラスメイト達も気付いた。鬨千が使っているそれは、ガロウが普段使っている技と同じだと。

「効かねえって言ってるんだろ!!」

「ああ、そうかい」

ざわめく中でも試合は続く。

詰め寄った鉄哲を軸にするようにして後ろに回り込んだ鬨千は、両手で腰の部分を完全に拘束する。

重心を後ろに傾けて行き、鉄哲の足が地面から離れた瞬間を見逃さなかった。

「離せっ——」

「あ、よいしょっ!!」

力を込めた腹筋と背筋を総動員して、後ろに倒れていくスピードを一気に加速させ

る。

二人の身体が、綺麗な弧を描く。

僅かな浮遊感の後、強大な衝撃が鉄哲の脳天から全身に駆け巡った。

『ば、バックドロップ!!?てか、脳天から行ったぞ?死んだか?』

『アホな事を言うな』

『あ、そうか。鋼化・・・』

『・・・マイク、やっぱりお前はアホだ』

少し間の抜けた実況のお陰で雰囲気は保たれているが、舞台上では生徒が顔面をコンクリートに埋めており、何とも凄惨な光景になっている。

鉄哲はピクリとも動かない。

「・・・・・・・・あ、あれ?もしかして、死んだ?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「え、ちよつ・・・死ぬなつて!!」

『なあ、イレイザー。アレつて』

『・・・・・・・・』

『え!嘘だろ!?!死んでnーーー』

「死ぬかあああああ!!!」

コンクリートから頭を抜いた鉄哲が、叫びながら立ち上がった。衝突した際にかなり脳を揺らしてしまっただのか、フラフラと揺れており足元も覚束無い。

「見た感じふらっふらだけど、まだやんのか？」

「・・・問題ねえ!!こんなの・・・気合と、根性でなんとかなるんだよ!!」

「うわあ、タフだな」

鬪千の言葉にガロウも同意であった。個性由来の打たれ強さもあるのだろうが、あの打たれ強さの根本、それは恐らく強靱な精神力だ。

ガロウの中で、鉄哲のその姿がどこか生意気なリーゼント野郎と重なる。

「あゝ・・・嫌なこと思い出した」

そうになると、何とも厄介なことだ。

見た感じではあるが、鬪千の攻撃にはパワーが足りない。鉄哲も気付いたのか、勝機を僅かに感じ取っていた。

「行くぞ鬪千!!」

「面倒臭い・・・」

スパートをかけるように怒涛の連続攻撃が始まり、鬪千は攻撃を流し続ける。

試合が近かった事もあり、観戦している者は先程の試合を観ているかの様に、強力な既視感を感じていることだろう。

鬪千が半歩下がり拳を突き出すのと鉄哲が拳を突き出したのは、ほぼ同時だった。二人の腕が交差する。鉄の拳で殴られれば、大ダメージは免れない。肘で僅か上に弾いた。

鉄拳は頬をかするだけに終わり、鬪千の拳は顎を的確に撃ち抜く。一発、二発、三発。拳と手首、そして肘を上手く利用した三連撃は的確に脳を揺らす。

「つーーーーー」

大抵の衝撃には耐えられる鉄哲も脳を揺らされて目眩を覚える。――だが、それでも強靱な精神力で踏ん張る。

そこに僅かな隙が出来た。鬪千にとって、タメをつくるには十分な時間が与えられる。拳は握られること無く、開いてる。

「ふんっ!」

「っ!」

ガードの下から鉄哲の顎を、アッパー気味に掌底がかち上げた。想像していた威力と違う。鉄哲が少し宙に浮くほどの重い一撃。ガードが解ける。首元から股下にかけて、数瞬だけガラ空気になる。充分過ぎる隙が再び出来る。

鬪千は両手を胸部に添わせた。既視感と悪寒が混じりあつた嫌な感覚を鉄哲は感じるも、行動が間に合わない。

「一勝目だな」

「つーー!?!」

体内に弾けたような痛みが駆け巡り、吹き飛ばされて身体を地面に強く打つ。背が付いているのはラインよりも外側の地面だ。

「鉄哲くん場外！勝者、闘千くん!!」

自身の負けを知らされる。

一発もまともに攻撃出来なかった、呆気ない幕切れ。鉄哲は口に広がる鉄の味と悔しさ、それをただ嘔み締めながら意識を手放した。

格

「なあなあ! どうだった俺の試合?」

「・・・しつこい」

試合を見届けて観客席に戻ろうとした所を、試合を終えた闘千に捕まった。

ヒーロー科の鉄哲と普通科の闘千、二人の試合は未だ会場をどよめかせている。

「凄かったろ?」

「いや、全然」

「あれ、思ったより厳しい!?!」

「俺ならもつと上手くやる」

「・・・なんだ、つまんねーの」

闘千は面白くなさげに、溜息を吐く。

「もつとやる気出してくれるって、期待してたんだけどなあ」

「出すわけないだろ、余裕な相手に」

険しい雰囲気が少し漏れだしたのを感じる。

だが、ガロウが態度を変えることは無い。挑発しているつもりもない、本心由来の態度である。

それが分かっているからこそ、鬪千は憤慨を覚えていた。拳を握りしめて、そこを細かに震わせている。

「・・・あんな宣誓をしたのに、負けたら恥をかくレベルじゃないぞ?」

「勝てると思ってるのか?」

「思ってるさ、勝たなきゃ面白くない」

「あっそ」

留めようとする鬪千の手をすりとすり抜け、廊下を歩く。

抱いていた興味、その殆どがガロウの中から既に霧散していた。

「鬪千・・・期待はずれか」

「あ、お帰り拳獣くん!」

「おう……って、なんだあれ？」

「いや……なんとというか、瞬殺」

舞台上には二人の男女、A組の上鳴にB組の塩崎。一言で言うすとすれば、悲惨という他ない光景が広がってる。

ツルに縛られて動けないだけならまだ良かったーいや、良くないがー個性の副作用でアホ面を晒すという、少し哀れにも思えてしまった。

「頼りすぎだな」

「……頼りすぎ？」

「頭が足りてねえ」

上鳴がもう少し賢ければ、結果は変わっていたのかもしれない。闘千と話していた間に飯田と芦戸の試合も飯田の勝利で終わっていたらしく、残す試合は二試合だけになる。

「凄かったわ、拳獣ちゃん」

「引くくらいに圧倒してたね！」

「いや……勝って当然だ」

「出たよ、圧倒的才能マン……」

慢心でも増長している訳でもない、当然である事を言ってみれば何人からは何とも表

現し難い目で見られる。

ここに切島が居れば、拳を握りしめて、膝を打っていたことは間違いであろうことをガロウは躊躇うことなく、普段の会話の調子で話すのだ。

轟や爆豪は当然、聴き逃しはしない。

「簡単に言うんだな・・・」

「まあな」

「俺にもそんなこと言えるのか？」

ギラつく目で問いたただす轟に対しても、ガロウの態度は変わらない。

「なら改めて言おうか？俺が一位になる」

「んだとテメエ!?一位になんのは俺だ!!」

「会話に割り込むなよ爆豪。お前はまだ試合すらしてないだろ」

「爆豪、一勝もしてないから説得力ないぞ」

「お前ら・・・今ここでぶっ飛ばす!!」

飛びかかろうとする爆豪と、それを全力で抑えにかかる瀬呂達。いつ見ても、いつもより血気盛んで、罵詈雑言を吐くその姿はヒーローと言うよりは最早ヴィランだ。

「声が漏れてんだよ!!クソ割れ髪!!!」

「わざと漏らしてんだよ」

「ぶっ殺す!!!」

表情筋が切れるんじゃないか心配になるほどに、表情を歪ませまくる爆豪から視線を外して進行していく試合を観戦する。

上鳴のウエイな試合の次に行われた飯田と芦戸の試合。最後までスピードにもものを言わせて場外まで押し出した飯田の勝利に終わる。

「爆豪、そろそろお前の番じゃん。用意しなくっていいの?」

「それぐらい分かっているわドンマイ野郎!!」

「コイツ、ヒデエ・・・」

落ち込んだ瀬呂をよそに、目に見えるのでは無いかと思うくらいの闘志を溢れさせて観客席から出ていった。

一足先に出て行っていたのか、爆豪の対戦相手である麗日の姿も既にない。二人が準備をしている最中でも、他の選手達の試合は続く。

「八百万さんと常闇くんの試合・・・」

「時間があれば、ヤオモモが有利だよね」

「逆に、創造する隙を与えなければ八百万は何も出来ない可能性が高い」

「あ、そうか・・・。創造の個性が使えない以上、身体能力の点で常闇くんに劣る」

常闇と向き合っている八百万もその程度の事は分かっているだろうが、表情から見抜

く限りはいい案は浮かんでないようだ。

試合の結果は高確率で常闇の勝利だろう。

外れる方が難しい予想を考えて、ガロウは静かに目を閉じた。

◎

会場全体を震わせるような爆音でガロウの意識は覚醒した。砂埃の独特な匂いと、何かが焦げた匂いが鼻腔をくすぐる。

目を開けて見れば舞台はボロボロに砕け散っており、場外に倒れ伏す緑谷と壊れた舞台の上に立つ轟の姿を確認する。

どうやら、二試合分の時間を全て睡眠に費やしてしまったようだ。

「やっと起きたか、ちようど起こそうと思っていたところだ」

「んあ、悪いな常闇」

「お前の神経の凶太さには感服する」

「それほどでもないさ」

話の次いでに寝ていた間の試合の結果を教えてもらえば、予想していた通り爆豪が勝ち上がった。

「緑谷は敗北か？」

「ああ、中盤の粘りは見事だったんだがな」

「持久戦には向きそうに無いもんな」

「いや、それは轟も同じだった様だ」

説明を聞けば敵に塩を送ると言えはいいのだろうか、緑谷は轟に喝を入れた結果として敗北したらしい。

「何やりたかったんだよ、緑谷のやつ」

「それはあいつと轟しか分からんだろう」

「別にいいや、興味無いし」

運ばれていく緑谷、舞台を後にする轟の二人を見てもそこまで興味は湧かない。知る必要のないことまで調べようとする興味がガロウは持ち合わせていない。

「拳獣くん！次の試合は君が出るんだ！準備を始めなくっていいのかい？」

「ん？あー、舞台も修復中だしな、もう少しゆっくりするよ」

言われて次の試合が自身の出番である事に気付かされた。

対戦相手は例の普通科生徒、鬨千。ぼんやりと頭の中で思い出しても、脅威には思えない明らかな格下。理由は特にないが、そんな男が流水岩碎拳で己に張り合おうとしている。

虫唾が走る。

『さあ！準備は完了だ!!第二回戦、第二試合を始めるぞ!!』

プレゼントマイクの声を聴きながら、ガロウは思いついた。

「んじや、行ってくる」

常闇はハッキリと見た。ガロウの悪魔的と表現すべき笑みを。

椅子を破壊する勢いの蹴りで観客席を飛び出し、舞台へと飛び降りる。

『早速登場したのはヒーロー科、拳獣ガロウ!!』

それに対するのは拳獣と全く同じ戦い方で見せ付けた普通科、闘千形象!!』

「……同じ?」

入場ゲートから出てくる闘千を見れば不安など一切感じさせない、自信満々の表情を浮かべている。

絶対に勝てるとは思ってなくとも、可能性は有るとでも思っているのだろうか。

「自信有りそうだな?」

「おう、アンタには勝つき」

思っているようだ。

「自分の技で負けたら、アンタはどんな顔をするのか興味がある」

「……思ってた通り、性格悪いな」

「いまさらだ、気にしない」

鬪千は俺がしていたのと同じ構えをとる。

やはり流水岩砕拳を使うご様子だ。

『んじゃ、START!!』

合図と共に鬪千が駆け出す。

一步、二歩と確かに地面を踏みしめて向かって来る姿は、ガロウの目にかつてのB級程度のヒーロー達と重なって見えた。

お互いの射程圏内まで、既に残るは二歩程度の距離しかない。

ようやくガロウも拳を構える。

残り一步。意外にも、拳を打ち込む準備に入ったのはガロウが先だった。

鬪千は笑みを浮かべる。確かな自信を胸にその拳に己の手を、そつと合わせた。

「つーー」

次の瞬間には吹き飛んでいた。

ガロウではなく、鬪千が吹き飛ばされた。

自身の背に感じる激痛で、グラウンドの壁まで吹き飛ばされた事を理解する。口の中
いっぱい鉄の味と一緒に、脳内には疑問で溢れかえっていた。

「少し力を出せばこんなもんか．．．あまり調子に乗るなよ」

口いっぱいになっていた血と、苦痛を吐き出した時に、聞こえてくる声は冷ややかだ。「それ使うなら、せめてあと百倍は強くなってからにしろ」

聞きながら、意識朦朧とする中で何が起こったのか理解した。受け流そうと合わせた己の手は押し切られ、少しの軌道をも変えることが出来なかった。

流す事の出来なかった一撃が、自分を一瞬にして場外に吹き飛ばし行動不能へと追い込んだ。

「俺とお前じゃ、格が違うんだよ」

まさに言葉の通り。油断大敵とはこの事。

言いたいことは言い切ったのか背を向けてガロウは歩き出す。

血に濡れた顔で背中を見る事しか出来ない鬨千。その目にはとてつもなく巨大な壁が見えていた。

ましな試合

通路を歩く足取りは軽やかだ。

つい先程までの不機嫌が嘘のように、僅かな笑みを浮かべてガロウは歩く。

スカツと爽やかな、いい気分である。

だが、その気分も早々に害される事になるとは思ってもいなかった。

「ここにいたのか！探していたぞ！」

「・・・アンタ」

「試合を見ていた。一撃で勝負を決める、見事な強さだ」

「それで、有名なアンタが俺をただ褒めに来た訳ではないよな？」

「察しが良いな」

曲がり角より現れたのは、No. 2 ヒーロー・エンデヴァー。燃える炎が、荒々しい彼の性格を表しているようにも思える。

「轟焦凍、アイツは俺の息子だ」

「知ってる」

「反抗期でな、先の試合でようやく俺の力を使うように成ったのだが、まだまだ未熟」

「つまり俺をアイツの踏み台にしたいと?」

「ふむ、やはり察しいがいい」

エンデヴァーは笑みを浮かべて、応えるかのようにガロウも笑みを浮かべる。この男は余程、轟焦凍という男に期待しているらしい。

だからといって、ガロウがする事は変わらない。

「大人しく踏み台になる気は無いぞ?と言うより、容赦なく叩きのめしてやるつもりだ」

「構わん!君の働きに期待している」

「アンタの期待通りにはならないさ」

本気で来るなら、それ相応の力で迎え撃つだけだ。



『いよいよ、準決勝に進出する奴等が決まったぞ!!やっぱりヒーロー科が出揃った!一

気に紹介するぜ!!

準決勝第一試合!轟焦凍 v s 拳獣ガロウ!!

準決勝第二試合!常闇踏陰 v s 爆豪勝己!!」

プレゼントマイクのアナウンスにより会場のボルテージは、一瞬にして最高潮に達する。既に轟とガロウの両名は、舞台の上で相對していた。

「ついさっきなんだけどな、エンデヴァーに会ったぜ」

「っ!?お前も親父に何か言われたのか?」

「言われたな、けど関係ないだろ?」

「なにがっ!」

「ここに居るのは、お前と、俺だ。

どんな戦いにしたいのか、お前が決める」

二人の間の空気が変容する。

ガロウは少しでも楽しい戦いになるように願い、轟は未だ晴れぬモヤを抱えながらこれから起こるであろう激戦に備えた。

『んじゃ、サッサと始めようか!準決勝第一試合、START!!』

開始の号令。しかし、二人は動かない。

ガロウは兎も角、全ての試合で氷結を放っていた轟に対しては大勢の者達が疑問に

思った。

『なんで二人共動かないんだ？』

『ガロウは出方を窺ってるだけだろうな。轟は下手に氷結を撃てないだろう。避けられた場合のリスクがデカい。』

さっきの試合を見る限り、氷結を使いすぎると身体能力が低下する副作用も有るだろうしな』

『よく見てるんだなあ、流石担任のイレイザー』

『お前が見てないだけだろ』

相澤の言う通り轟はガロウを警戒している。避けきれない間合いに入った瞬間に最大の氷結を放って動きを止める。

動きの一つとて見落とすつもりは無い。

そして遂にガロウが動いた。

だが、轟の予想した動きではない。前進することなく、一步だけ後方に下がるとその場にしゃがみ込んでしまった。

「なにをーっ！？」

身構えた時にはガロウの姿は消えていた。

正しく言い表すならば、消えたのではなく見えなくなったのだ、巨大な壁によって。

『んなっ!!コンクリ引き剥がしやがった!!』

プレゼントマイクの声で状況を無理やり理解した轟の行動は素早かった。此方に向かつて倒れてくるコンクリート壁を氷結で止める。焦る気持ちを落ち着かせ心を冷静に保とうと努めるが、残念ながらそんな余裕はない。

舞台を分断したコンクリートと氷の壁に亀裂が入る。そこで漸く、自分の行動が悪手であったことを理解した。

破砕音と同時に壁が砕け、大小様々な破片が飛んでくる。躲し、凍らせ、向かって来る脅威から身を守る。

「・・・どこだ、アイツは?」

「コツチだ」

探した時には既に遅い。声に気付き振り返った時には、頬に強烈な痛みが走り殴り飛ばされていた。

追撃はない。体勢を立て直し、再び構える。

一撃で実力差を見せ付けられた。

「・・・場外に落とすチャンスだったぞ?」

「チャンスなら幾らでもある。力の半分しか使っていないお前ならな」

「なんだ・・・お前も緑谷と同じかよ」

「緑谷と一緒にするな。俺はアイツよりも確実に強いぞ」

「……後悔するなよ」

小さな赤い光が、一瞬にして豪火に変わる。身体を覆っていた霜が溶け、低下していた身体能力も元に戻った事だろう。

「まだ、加減は出来ないぞ?」

「気にするな、全力で来な」

先に動いたのは轟だった。

地を這うように氷結を全体に放ち、跳んで避けたガロウに向かい炎を放つ。

腕を振るって風圧を生み出し炎を散らす。

着地に合わせた回し蹴りを繰り返すが、ギリギリの所で避けられた。

「ちよつと熱いぞ、火傷しないように気をつけろ」

「……っ!」

蹴りを放った後の僅かな硬直時に合わせた広範囲の火炎に対するガロウの応答は、防御でも回避でもなく前進することであった。

後方に回避したと思っていた轟は、炎の壁を突き破って出てきたガロウに目を見開いて驚く。僅かに回避が遅れた轟の服を掴み、地面に向けて勢いよく投げつけた。

「いやあ、温まったわ」

焼き焦げたジャージのトップスを破り捨て、ぬけぬけと言うガロウの姿は未だ無傷で、息すら上がっていない。反対に轟はかなり追い込まれていた。体力的にも余り戦いを長引かせることは出来ない。

ガロウも察していた。

「決着、早めた方が良いか？」

「元から長引かせるつもりは無い」

「そうかい、ならさっさとどうぞ」

「どうなっても知らねえぞ？」

「今更だ」

動き始めたのはやはり轟、氷結を放つが先程とは違いガロウの左右に巨大な氷壁を築き上げた。

ガロウはそれを眺めるだけだ。

「逃げ道を塞ぐ、だけな訳ないよな？」

「ああ、次で最後だ」

この状況から避ける事は難しくない。それでもガロウは避けるつもりはなく、真つ向から轟の全力を打ち破るつもりでいる。

審判のミッドナイトやセメントスの動きが慌ただしくなるが、もう誰にも止められな

い。

唸り声を上げながら放たれた灼熱の獣は、ガロウという獲物に目掛けて一直線に駆け込む。

「いけええええええええ!!」

炎に阻まれ姿を確認することは出来ないが、聞こえた轟の雄叫び。

ガロウはそれに応えることにした。

炎が直撃するまでの僅かしかない瞬間に、身体のパネを縮み込ませて力を溜め込む。

身体が熱気を感じた瞬間に、溜め込んだ力を正面へと単純に、正拳突き形で解放した。

「りゃっ!!」

最初に起こったのは爆炎。緑谷と轟が戦った時と同様の爆発が起こる。

しかし、ガロウの打ち出した拳圧が爆炎諸共、轟へと伸びて行き身体を場外へと叩き出し意識を断ち切った。ガロウを中心とした衝撃波は氷壁も打ち壊し、舞台に残ったのはガロウ、ただ一人。

「勝負あり!!拳獣くん、決勝進出!!」

今日一番、肝を冷やしたであろうミッドナイトの声が勝敗を告げる。ミッドナイトもセメントスも安堵の感情を顔に浮かべた。

特にセメントスは舞台が凍りついたせいで、セメントの壁を作ることが出来ず本気で焦っていた。

圧倒されていた観客達から一つ、二つと歓声や拍手の音がなり、やがて巨大な音となってガロウと轟を包む。音の中に居ながら轟はロボットに運ばれて行き、それを見送ったガロウも舞台を後にする。

「思ってたよりは、ましな試合だったな」

誰かに伝える様に零れた小さな声。

誰に聞かれることも無く、巨大な音の波に飲まれて消える。

残るはあと一試合、決勝戦のみ。

喜ぶことはない。最後の試合を楽しむだけだ。

決勝戦

試合終わり誰かに呼び止められる呪いでもかかっているらしい。

初老の男性にガロウは呼び止められていた。

エンデヴァーの時と同じ展開、デジャブ。

「いい試合をする。度胸もいい」

「.....」

「もっと君の拳法を見れるかと思っただが、それを使わずにゴリ押し・・・見どころがある」
「褒めてくれるのは嬉しいんだけど、アンタ誰だ」

まるで気付かなかったかの様な反応で、失態を恥ずかしむように笑う。

「自己紹介がまだだった、私はクロ。一応だがプロヒーローをしている。そして武術家の端くれだな」

「武術家？アンタがか？」

「なるほど、そつちに食いつくか。益々いい男だ」

何が嬉しいのかウンウン、と頷く男にガロウはしびれを切らしそうになる。このままでは決勝の直前まで話が続きそうだ。

話の続きを促す。

「インターンがある事は知ってるかな？まだ聞かされてないかもしれないが、簡単に言えば一定の期間だけヒーローの仕事をする。職場体験もあるが、あれはあくまでも体験だ」

「それで？」

「率直にいう、君を私の事務所に招待したい。早めにスカウト、と言った所だな」

「・・・メリットがないな。俺はもつとトップのヒーローの所に行くぞ」

何が可笑しいのか、ガロウの返答を聞いて男は笑う。

「いやいや、期待通り期待通り。安心してほしい、私の所に舞い込む依頼はどれも一筋縄では行かないものだ。

きっと、君を満足させることが出来るだろう。君に与えられる事もある」

男の言葉はガロウの興味を引くのに、充分すぎる力を持っていた。詳しく聞いてみる価値はあるかもしれない。

「だが、まだ君を完全には見定めていない」

「・・・決勝戦で見定めよう？」

「ハツハツハ！察しが良いな、その通りだ。」

全部見せなくて良い、なにか一つだけでも良いんだ」

言いながらポケットからメモ帳とペンを取り出し、何かを書くときそれをちぎって渡される。

「どうやら住所と電話番号だ。」

「体育祭が終わってまだ興味が有れば、訪れてみて欲しい。そうだな、三日くらいは待とうか」

「翌日には行く」

「ハツハツハ！やはり君は面白い男だ。期待して待たせてもらおう」

また会おう、言い残して去っていく。

後ろ姿に隙はなく、綺麗な背筋をしている。武術家と言っていただけの事はある。

渡されたメモの切れ端を確認してから折りたたみ、ズボンのポケットにしまう。

「真面目に試合しただけの価値はあったな」

見た感じの印象からして、そこそこできそうな雰囲気はあった。立ち去っていく時の後ろ姿からも、エンデヴァーよりも隙を感じることもなかった。

面白そうな男。そんな印象が残った出会いである。

『勝ったのは爆豪勝己!!常闇を打ち破って決勝に進出!!』
「チツ!結局見逃したか」

聞こえてきたアナウンスで試合が終わった事に気付く。爆豪の試合は余り見ていなかったのを見ようと思っていたのだが、遅かったみたいだ。どうやら自分で思っていた以上に、時間を使って話し込んでいたようだ。

ガロウは仕方なく控え室に戻る事にした。

◎

『さあ!いよいよこの瞬間がやってきた!準備は良いかりスナー共!撮り逃すなよマス
メディア共!今からここで、雄英高校一年の最強の男が——』

『長い、煩い、さっさと始めろマイク』

『途中で止めないでくれよレイザー!?!んじゃあ気を取り直して——』

決勝戦を始めるぞ!お互い圧倒的な実力で勝ち抜いてきたのはコイツら!!

拳獣ガロウvs爆豪勝己!!

紹介と同時に足を踏み出せば、何百もの声が唸り、叩く。

そんなものを両者共に気にしては居ない。ガロウは歓声などに萎縮する事など当然

なく、爆豪もこれからの戦いに対するやる気に満ち溢れているからだ。

「ようやくだ、ようやくてめえをブツ飛ばすことが出来る」

「飛ばされるのはお前だろ?」

「言ってる、割れ髪野郎!」

小さな爆発を何度も起こす。

ウォーミングアップを入念に行つたのだろうか、体は充分暖まっている様だ。

「いい?二人とも、後悔の無いように全力で戦いなさい!!あ、けど観客に被害が出ないようにしなさいよ、アンタら二人」

「言われるまでもねえ」

「.....」

ミッドナイトの言葉を聞き終え舞台を下りると両者が構え、火蓋が切られるのを今か今かと待ち構える。

『もう待ちきれないって感じだな!じゃあ行くぜ!本日最後の大勝負、START!!』

爆音。爆発の煙が線となり、その先を爆豪が導いてる。行先は真っ直ぐとガロウに向かつて。

三度の爆発でガロウの頭上を飛び越えつつ、後ろに回り込み着地したが、勢いを制御できなかつたのか僅かに距離が開きすぎている。

「死ねえ!!」

思わぬ暴言を受けたと同時に、視界いっぱいには赤い炎と黒い煙が広がっていた。

距離を開けたのはミスでも何でもなく、確実にガロウを仕留めるための行動。開始早々で最大火力の爆発を起こしたのもそれが理由だ。

「まだだあー!」

一発では終わらない、煙が晴れないうちに一発、更に一発と計三発の最大爆撃を行った。

僅かに肩で息をしている爆豪は確かな手応えに口角を上げるも、構えは解かない。ガロウがこんなにも簡単にやられるはずはないと、ある種の信頼を持つていたからだ。

「チツ! やっぱりか・・・!」

煙が晴れていくうちにガロウの姿がハッキリと見えてくる。腕をクロスする様にして顔面を守っているその立ち姿は、服はボロボロになっていてもダメージは特に無さそうだ。

「いやあ、ビリビリ来るなあ」

「・・・クソが、余裕こいてるんじゃないやねえぞ!」

「ああ、そうだな。俺も見せないといけないもんがあるから、ちよつと真面目にやってみようか?」

「あ？……っ!?!」

防御を解いたガロウに対して一層気を引き締めるまでの少しの間、一秒にも満たない時間。爆豪の前から、ガロウの姿が消える。

咄嗟に動けたのは人間の、いや動物としての本能、危機察知の能力でも働いたとしか言えない。

前に大きく飛び上がった時には、地面に巨大な亀裂が入っていた。

「ワオ、今の避けるか？」

「ツガ!?!」

楽しそうな声が、前方から聞こえた。焦って視線を前に向けるよりも先に、鋭い痛みが頬に走り、重い衝撃が身体を駆け巡る。

場外に吹き飛びそうになる身体を咄嗟の判断による爆破で立て直した爆豪は、理解し難い真実を無理矢理に理解していた。

飯田天哉に匹敵する所ではない。それを軽く超えるほどの超スピードを持っている。なおかつ、スピードに振り回されること無く回り込み攻撃してくる完璧な制御。

認めたくはない。だが、目の前の男の事を改めて別格の存在だと認識させられる。

「なんだあ、隠してたのか？」

「使う必要ないと思ってたんだけどな」

「やっぱり、舐めてやがんなテメエ！」

「まあ、余裕だとは思ってる」

爆豪の身体の中で何か切れる音を、観客席に居る何人か、A組の生徒達はハッキリと聞いた。緑谷などはこれから起こるであろう展開を予想し、一人でオロオロとしている。

『爆豪のヤツめっちゃくちやキレてない？大丈夫なのこれ？』

『・・・知らん』

爆豪はこれまでに見た事の無いような、言葉にして表現する事が難しいぐらいに表情を歪ませた。

「オ、オ、オーーーーッガア!!」

飛び出してくるかかと構えたガロウに対する行動は予想に反し、目の前で小規模の爆発を起こすだけに留まった。

屈辱や怒り、その他全ての感情を無理矢理飲み込んだようにして、ガロウの目論見からはずれ少し冷静になった様だ。

「その余裕、直ぐにぶっ飛ばしてやる！」

「頑張れ」

「つーーーー死ねえ!!」

冷静になったのは勘違いだったらしい。

棒読みでエールを送れば、血走った目で本日四度目の最大火力爆撃を見舞ってきた。バカ正直に受けてやる理由もなく、超スピードで爆豪の頭上に移動したガロウは勢いそのまま踵を振り下ろそうとし、閃光に包まれた。

「つーー」

視界が塗り潰される。

先の、爆豪と常闇の試合を見ていた者なら知っている。閃光弾。

初見のガロウからすれば思わぬ攻撃だった。

「くたばれ!!」

爆豪はこれを勝機と捉えたのか、爆破を利用して距離を詰めると爆発と共に腕を顔面に突き出す。それをガロウは見えてるかのようになり、弾き流し逸らした。

驚きつつも、爆豪は攻撃の手を緩めない。ここで引けば恐らくチャンスはもう無い、心のどこかでそう感じていた。

だが、何度攻撃しても弾かれ流される。閃光の影響で眼を閉じているにも関わらずだ。

「そろそろ、限界じゃないのか?」

「黙れ!ぶっ飛ばす!」

「会話にならないな」

接近しているにも関わらず、ガロウの蹴り上げが爆豪の顎を撃ち抜いた。僅かに体勢が崩れるが、爆豪は踏みとどまった。

「テメエに、勝つ!!」

「……………」

「勝つて、俺が一番だ!!」

ガロウの目は既に回復している。対する爆豪は最大火力の連続使用で限界が近づきつつある。

最早、勝ち方を選んでは居られなかった。

「喰らいやがれ!」

弾かれ外側に向いていた両の手を手首で曲げて、無理矢理にガロウの方に向ける。

一瞬の発光、そして衝撃と爆煙。爆豪によるこの試合で最大の爆発が二人を包み込んだ。その衝撃波は会場全体を揺らす程だ。

自身に降りかかるダメージを無視した、自爆とも取れる攻撃に会場が静まる。

『おいおい!?!どうなった?二人は無事か!?!』

『ミッドナイト、直ぐに確認を!』

ミッドナイトが舞台に駆け寄るうちに、煙がゆっくり晴れて、二つの人影が見えてき

た。片方は倒れ、片方は立っている。

立っているのは、片腕を焼き、血に濡らしているガロウだ。

「爆豪くん、戦闘不能!!拳獣くんの勝利!

よって優勝は、拳獣ガロウ!!」

歓声を背に受けて歩き出す。

喜びを表現すること無く、ガロウは舞台を後にした。

終了、体育祭!!

「それでは、表彰式を始めるわよ!」

観客の目線、マスコミ達のカメラ、それら全てがスタジアム内の一点に、表彰台に向けられている。

表彰台を見つめるもの達が様々な表情を浮かべているが、生徒達は微妙な表情。

世間一般に思い浮かべられるような、晴れやかで、喜び溢れる雰囲気など無い。

「……ちよつとくらいは喜べよ」

俯く轟、歯ぎしりし何やら唸っている爆豪、そして優勝したというのに特に笑顔も見せない無表情なガロウ。

この空気に耐えられなくなったのか、又は突っ込まざるを得なくなったか。誰の声か分からないが、呟かれたその言葉はよく聞こえた事だろう。そして、殆どの生徒達が心の内で同意した事は言うまでもない事である。

「……あのね、締まらないから少しは喜びなさい! アンタ達は!!」

「「……………」」

「つーー!!」

この空気を変えようとしたミッドナイトには、進行役として満点をあげてもいい。

しかしながら悲しい事に、三人に向けて投げられた会話という名のボールは返つてくることも無く、更に言うなら受け止められることも無く何処かに消えていった。

これに青筋を浮かベコメカミをひくつかせても、怒鳴らなかつた彼女は偉い。

「お前ら、ちよつとは反応しろつて! ミッドナイト先生キレてんで!」

「そうだぞお前ら! 中年くらいの人がキレると怖いんだぞ!!」

少しでも場を和ませようとしたのか、無視されたミッドナイトの事がさすがに可哀想になつたのか、三人に向けて放つた瀬呂と上鳴の声は彼女の耳にもしつかり届く。

「二人、後で職員室に來なさい。それから中年つて言うのは、四十代くらいからのことを言うのよ!」

当然キれる。静かにキれる。

「……まつたく……気を取り直して! メダル授与式に移るわよ! 今年のメダルを贈呈するのは勿論この人!!」

「ハハッハッハッハッ!!」

高笑いと共に、屋根の上から飛び出す人影。

「私がメダ「我らがヒーロー！オールマイイト!!」たあ!!」
被った。

流石のオールマイイトもマイクの音量に勝つことは出来ずに、決めゼリフの殆どが聞こえなかった。

「んっん！さて、ではメダルの贈呈だ!!」

わざとらしい咳払いで、仕切り直される。

「おめでとう轟少年！最後の君の攻撃、個性の使い方考えた良い攻撃だった！これからもまだまだ君は伸びるよ！」

「・・・ありがとうございます」

「けど、周りの被害は最小限に！」

「分かりました」

轟にメダルを渡し、次に爆豪の前に立つ。

「爆豪少年、おめーー」

「要らねえ」

「・・・おめでーー」

「要らねえ」

二度の拒否にオールマイトは固まり、会場全体が沈黙する。メダルを掛けようとしても、爆豪は一步後ろに下がって避けていた。

「俺は負けたんだ、ビリと変わんねえ。だからソレは要らねえ」

「……なるほど。爆豪少年、その考えは素晴らしいものだ。だが、君は壁を乗り越える為の成長を見せてくれた。その証として私はこれを贈る。君は、今回のキズとしてこれを受け取ってくれ！」

「しつげえ！要らねって言ってるんだろ！」

「まあまあ、そう言わずに！よつと！」

渡そうとするオールマイトと受け取ろうとしない爆豪の二人。数分の攻防の後、爆豪の首からはしっかりとメダルが掛けられていた。

最後に、オールマイトはガロウの前に立つ。

「さてと、拳撃少年！開会式で言ってた通りに君が一位になった！おめでとう!!」
「ありがとうございます」

「いやあ、圧倒的」

「もうちよつと言うことないのかよ」

「最後の最後まで、他者を寄せ付けられないような見事な戦いっぷりだった！一度、君の全力を見てみたいものだよ!!」

「……あつそ」

「もう！照れ屋さんだな君は!!」

君の金メダルだ！受け取ってくれ!!」

ガロウが頭を少し下げ、オールマイトがメダルを掛ける。

オールマイトは表彰台の三人を眺めて、会場全体に、テレビの向こう側の人達に語る。

「今回は彼らだった！しかしながら、この場に居る誰もがここに立つ可能性があつた!!」

彼等、彼女等が、さらに先へと駆け上って行く姿!!次代のヒーローは確実にその芽を

伸ばしている!!」

オールマイトは右手を上に掲げて、大きく息を吸い込んだ。

「最後に一言！ご唱和ください!!せーの!」

「[[[[プルスウルー]]]]」

「お疲れ様でした!!!」

「トラ!!」

体育祭の最後の最後。

会場を包んだのは拍手ではなく、ブーイングであつた。

「皆、今日は一日ご苦労だった。今日の結果が良かったにせよ悪かったにせよ、各自しっかりとして次に活かすように」

「はい!!」

「あと、表彰台組。全力は出すべきだが、もう少し周りの被害を考慮しろ。」

さて、明日と明後日は休日になる。遊んだり何をしてもらっても結構だが、今日の疲れは二日間の休日ですっきり取り取るように」

解散の合図で教室内は一気に騒がしくなる。

誰もが今日の事を振り返りながら帰宅していく。

それに混じりながら教室を出ようとした時、ガロウは呼び止められた。振り返れば真面目な顔で轟が立っている。

しばらく無言だったが、話す事が固まったのか口を開いた。

「優勝おめでとう」

「・・・おう」

ガロウは少し驚いた。轟の口から飛び出した言葉を予想していなかった。

轟は続ける。

「完敗だった。両方の個性使って、俺の中で考えられる最良の戦いをした上でだ。」

正直、悔しい」

「それで？」

「けど、負けただけど清々しかったよ。なんでだろな？」

「知るか、そんなこと」

何を思ったのか、目の前に拳を突き付けられる。

「またやろう、今度はお前も全力で」

「考えとくー」

「何勝手に決めてんだ半分野郎!!」

空気を読み応えるように拳を合わせようとして、爆豪の怒声に止められた。鞆を担ぎ

近付いてくる爆豪の目は、酷く血走っている。

「なに勝手に再戦しようとしてんだよ！コイツをやるのは俺が先だ!!」

「先に言ったのは俺だぞ？」

「うるせえ！順位は俺のが上なんだから俺に譲れや!!」

「お前には負けてないぞ？」

「上等だ！だったら今からどっちが強いか決めようか!？」

二人が遂に演習室に行こうとした所で相澤から待ったが入った。

リカバリーガールから既に休むようにと言われていたらしい。獣のような唸り声を

上げながら爆豪はガロウに視線を向ける。

「いいか割れ髪!!今回は俺の負けだ!けど次にやる時は完膚無きまでにぶっ飛ばしてやるからな!!」

「程々に期待してる」

「なんだその態度!舐めてんのか!!」

「嫌いぞお前達!さっさと帰って休めって言ってるだろ!!」

勝手にヒートアップしていく爆豪、そしてとぼっちりを喰う形で轟、ガロウの三人に相澤の雷が落ちて強制的に教室から追い出された。

職場体験編

邂逅

日が傾き空が赤く染め上げられる頃、ガロウの姿は東京郊外にあった。

訪れていたのはプロヒーロー、クロの事務所兼道場。体育祭準決勝終了時にスカウトしに来たヒーローである。

その道場の中央で二人は相対していた。

「んで？一発ぶち込めばいいのか？一発と言わずに二発三発でもいいけど」

「ふふふ・・・冗談はよしてくれ。流石の私も君の攻撃はそうは流せない」

「じゃあ、遠慮なく・・・」

ガロウは重心を下げて拳を引く。

対するクロは構えない。

無防備なクロに向かって、ガロウは遠慮なく拳を突き出した。



「いやあ、はっはっはっ！大したものだよ君は本当に」

「知ってるよ。まだ強くなるけどな」

「頼もしい。どこまで強くなるつもりだ？」

「さあな。俺にも分からないさそんなこと」

日はとつくに沈み、辺りは街灯と住宅からの光で不気味に照らされている。

時間の事を気にしなくなる程度の事を経験出来たと言うことなのか。少なくとも、無駄足に終わらなかつたことは確かである。

「インターンの件、考えておいてくれ」

「分かってるよ。強くなるための階段だ、確実に上がってやる」

「そうか・・・。もう暗い、駅まで送ろうか？」

「線路沿いを走って帰るから、必要ねえよ」

「なら気を付けて帰れ。保須を経由することになるだろうが、そこは危ないからな」

「ご忠告、ドーも」

適当な返事をして走り出す。

夜になり人通りも少なくなつた分、あつという間に最寄り駅にまでたどり着き線路沿いに走る。

走りながら思い返した。

ガロウが去り際に聞いたクロの言っていた言葉。

『保須を経由することに成るだろうが、そこは危ないからな』

どうしても気になり、走りながら携帯を取り出して調べる。保須と言う単語で検索をかければ目を引く項目が目に見え込んできた。

【ヒーロー殺し・ステイン】

「ヒーロー殺しねえ・・・」

非常に興味が湧く。

ステインという男が何人ものヒーローを殺しているからなのか、ヒーロー狩りをしていた頃の己と被るのか。

恐らくその両方だろう。

気付けば足は、保須市の中心街に向いていた。体育祭の試合で少し感じた興奮、その残り火がガロウの足を動かす原動力になっているのだ。

「さてと、どこに居るのかねえ」

高いビルの屋上に上り、見渡す。保須市は予想よりも広い街だ。

殺人鬼一人を探すには骨が折れる。そう思っていたのだが、結果は予想を外れる事になった。

「・・・臭うな」

排気ガス、土埃、飲食店からの匂い。

様々な匂いが風に乗リガロウの元にも流れてくる中、嗅ぎ覚えのある鉄臭さが混じっていることに気付く。

そこからの行動は早い。

屋上から飛び降り、電柱に着地。電線を伝い走れば障害もなく、上を見上げる者も少ない為に目にも付きにくい。

「あそこだな。暗い路地裏とは典型的な」

強い血の匂いが漂う建物に飛び移り、路地裏を見下ろせば何かが居る。

プロヒーローだろうか。血に染まり、壁にもたれかかって居る者が一人、それを立ちながら見下ろして居る者が一人。

「誰だ？」

此方を見上げる。

ボサボサ髪で顔に布を巻いた、頬に返り血を付けた男だ。写真で確認したヒーロー殺

し・ステインに間違いない。

躊躇うこと無く、ガロウは路地裏に降りる。

「ガキ……ハア……ここから去れ。ガキの立ち入っていい領域で……お前……?!」

「ヒーロー殺し・ステイン、だな」

降り立った瞬間に近くのドラム缶を蹴り飛ばし、ヒーローを回収。

ドラム缶はステインに躲かれ、派手な音を立てながら転がって行った。これで誰かしらが来る筈だが、一応警察にも連絡。

「つと、危ない危ない」

連絡しようとして、ヒーローを抱えたまま飛び退く。目の前を幅広のナイフが掠めた。

「ハア……よく避けた……。体育祭の優勝したガキ……拳獣ガロウ……。だったか？」

「まさか殺人鬼に知られてるとは……」

「ハア……お前とは、一度話して見たかった」

鋭い眼光で睨みつけられる。ガロウも負けじと睨み返すが、それよりも担ぐヒーローの容態が心配だ。

息は荒く、出血も激しい上、意識がない。

「ハア……お前からは似た雰囲気がある」

「それは奇遇だな、あんたからは似た感じがするよ」

時間稼ぎのために話を合わせるが、そこに嘘はなく本心からの言葉だ。

何故ヒーロー殺しなんて事をするか分からないが、以前の自分自身に重なるようだ。かつての自分と違うのは、此奴は殺すと決めた者は殺す。殺さないという甘えがない分、油断もできない。

何よりも今はヒーローの容態が悪い。激しく動けば命に関わるかもしれない、受けに徹するしかなさそうだ。

「見た目は俺の方がいいけどな。てか、早く逃げた方が良くないか？さっきの音聞いてそろそろ、ヒーローか警察が来ると思うけど」

「ハア……賢い。時間が限られてるこの状況では、ソイツの粛清も容易ではないな……だが……ハア……」

増大したステインの殺気に反応し、後ろに大きく下がる。

「手負いのそいつを担いで……何時まで逃げてられる？」

気付けば、ガロウはステインの接近を許す。担がれたヒーローの吹く風より小さなうめき声により出来た、ほんの僅かな意識の切れ目を潜り抜けたのだ。

距離にしてあと一步。

ガロウが反応し、反撃するには充分な距離。

突き出された刃物を蹴り落とし、踏み付け折る。体勢の崩れたステインに足を掛けて飛び越えた。

「・・・ハア・・・その動き、正解だな。咄嗟の判断、中々のものだ」

「お前こそやるじゃん。ヒーローになってないのが惜しいな」

「ハア・・・ヒーローか・・・」

ステインから迫撃がない。しかし、下手に逃げるのは悪手だろう。

ガロウ自身は大丈夫だとしても、手負いのヒーローが耐えきれるかどうか。

「お前が担いでるそいつ・・・そいつは偽物だからそうなった・・・。お前は・・・良い。やるべき事、取るべき選択・・・よく分かっている」

「・・・褒めてくださってども」

「だが・・・ハア・・・不思議だな。俺と同じ匂いがするか・・・少し、試してやろう」

言い終わらないうちにナイフが数本投擲され追従する様にステインが向かってくる。

ガロウは足でナイフを払い、振り上げた足でそのまま踵落とし、横に躲したステインに向かい払ったナイフを空中で掴み投擲。ステインは二歩下がりにナイフを避けた。

「つーー!!」

ステインからの追撃の無さを疑問に思い数歩下がれば、そこに何本ものナイフが降ってきた。

ナイフを払い、視界から消えた一瞬に仕掛けていたのだろう。

「勘がいい、度胸も、何よりも真っ先にソイツを助けた。……救出した後も戦うことはしない……状況もよく分かっている」

何処からかサイレンが聞こえてくる。その音にステインも気付いたのかため息を吐いたあと、刃を収めた。

「ハア……時間切れだな……。拳獣ガロウ……お前の活躍に免じて、今回は手を引こう」

「最初からそうしろよ?」

「……ハア、喋る時間はもう無いな……。また、どこかで会うかもな」

それだけ言い残し、ステインは背を向けて暗闇の中に消えていく。完全にステインの気配が遠のいた事を確認してから、ガロウは路地裏を後にした。

この後、雄英から相澤を含めた何人かの教師や、警察の職員にあれこれ聞かれた事は言うまでもないだろう。

目指すべき姿

「・・・遅い」

「我慢しろ、行動の結果だ」

ヒーロー殺し、ステインとの攻防の後に助けたヒーローを救急隊員に預け帰ろうとしたがそう出来るはずが無かった。

言い訳を考えている間にパトカーに乗せられ警察署に連れていかれ、どうにかして帰ろうかと考えていた所に相澤と根津校長が到着。

大人しくする以外に選択肢はない。

「体育祭が終わって学校が始まるよりも早く問題を起こす。こんなの僕も初めてサ!!」

「態々来なくても良かったんですよ？」

「そももいかないサ！生徒がヒーロー殺しに襲われたって聞かされたらね」

「実際に着いてみれば外傷も無いようだが、余り厄介事に首を突っ込むな」

「分かつてる」

ため息を吐きながら、頭が痛むのだろうか額を手で抑える相澤。根津校長は何を言うことも無く静かにお茶を飲んでいる。

「失礼するワン!」

「・・・犬?」

「保須警察署署長の面構犬嗣だワン!」

人間が犬のマスクを被ったような男が室内に入ってきた。

「早速本題に入るワン。君がステインから救ってくれたヒーロー、幾つ物刃物による身体中の裂傷で出血多量でかなり危ない所だったワン。そして、君がそうなっていた可能性もあつたワン」

「それで、俺の処遇はどうなるんですか?」

「ふむ・・・要点を省き結果だけを話すならばお咎めなしだワン」

書類を後ろの人物から受け取り、何枚か捲りながら確認していく。

「今回の事で個性を使った証拠が無いので、君が個性不正使用の件で問われることはないワン。よって、君がステインからヒーローを救ったと言う事実しか残らなかったワン」

「なら、もう帰っても良いんですか?」

「聴くべきことは全て聴いた、君に怪我は全くないから帰っても大丈夫だワン」

そう聞いてガロウは立ち上がり、相澤と根津の二人も立ち上がる。部屋を出ようとして呼び止められた。

「本当ならここで感謝状を送りたいのだが」

「要らね。紙切れなんかで何かが変わる訳じゃないだろ」

「はあ・・・言うと思つたワン」

「うちの生徒がお世話になりました」

この後、一人で帰ろうとした所を相澤の捕縛布でぐるぐる巻きにされて車に乗せられた。

なんでも、一人で帰らせてまた厄介事に巻き込まれては堪つたものではないらしい。



「はい、おはよう。体育祭も終わってゆっくり休めたとは思いますが・・・約一名、馬鹿な面倒事を起こした奴も居たが・・・」

「何見てやがんだ、俺じゃねえわ!!」

ため息と一緒に吐かれた言葉に生徒の殆どの視線が何故か注がれた、爆豪に。
「爆豪落ち着け。」

漸く体育祭も終わったが、やる事がある。とても重要なことだ・・・」
クラスの殆どが固まる。

「コードネーム、ヒーロー名を決める」

「胸膨らむヤツきたアアア!!」

「静かにしろ」

大きくない一言だが、一瞬にしてクラスを黙らせた言葉には何か特別な力でも籠っているのだろうか。

「これから君たちは職場体験に行くことになる訳だが、その上でヒーロー名が必要になるという事だ。」

体験に行く職場についてだが、ここで先日話したドラフト指名が関わってくる」
モニターにグラフが映し出される。

「今回の指名は将来性に対する興味によるものが殆どだ。興味が削がれた時点で、一方的にキャンセルされる事なんてよくある事だと思っておけ」

「大人は勝手だ!!」

「それが大人だ。」

でだ、例年は指名がバラけるもんなんだが今年はグラフの通り偏ってる」

改めて確認すればガロウ、轟、爆豪の順に殆どの数を独占している。この中からの職場に行くのか決めるとなると大変な作業になりそうだ。

「うお・・・やっぱり上位三人凄いな」

「大暴れしてたもんな三人共」

「爆豪の自爆はちよつと引いたわー」

「引いてんじゃねえよ!!」

グラフを見て男子も女子もワイワイと騒ぎ出す。

「喧しい。とにかくお前達にはこれからヒーロー名を決めてもらうことになる訳なんだが、適当なものなんかを付けるとー」

「地獄を見ちゃうよ!!」

いきなり教室に入ってきたのは18禁ヒーローミッドナイト。いつも思っているのだが、教師としてあの格好は如何なものだろうか。

約一名は鼻息を荒くして大喜びしているが。

「この時につけた名前が認知されちゃって、そのままプロ名になってる人も居るから!」

「そういう事だ・・・俺にはその辺の事は無理なんでな、ミッドナイトさんに頼んだ」

「因みにイレイザーのヒーロー名はマイクに決めてもらったらいいわよ!」

「……言わないで貰えますかね?」

相澤の事はともかく、ミッドナイトの言うことは正しい。名は体をあらわすとも言うのだから、それなりの物を付けなければならぬだろう。

だが、ガロウは特別にこだわろうとも思っていない。ガロウが求めるものは名前などではなく、その内にある中身にあった。

「それじゃ、決まった人から発表してもらいましょうか!」

「まさかの発表形式!?!」

全員が驚き声を上げる。これにはガロウも少し驚いた。

そんな中で真っ先に手を挙げたのは、見た目に対して影の薄い青山だった。

「僕は輝きヒーロー!?! I can not stop twinkling」さ
!!」

「これなら、省略して読みやすくなさい」

「アリなのかよこれ!?!」

とんでもないヒーロー名が初手で飛び出した事にクラスの誰もが驚いた。

だが、これを切っ掛けに勢い付いたのか発表は加速していく。

「エイリアンクイーン!!」

「2のやつ!?!やめときな!」

「フロツピー。ずっと考えてたの」

「親しみやすいし、可愛いじゃない！」

「烈怒頼雄斗!!」

「うん！リスペクトに溢れてる名前ね！」

リスペクトと言う言葉に僅かではあるが、ガロウの耳が反応した。

ヒーローと聞いて思い浮かぶ姿は幾つもある。多くのヒーローを叩きのめしたガロウであるが、その中でも大きな存在が二つあった。

「爆殺王！」

「そういうのはやめた方がいいわ」

「爆発さん太郎にしろよ！」

「黙ってろアホ髪!!」

「ダサイ」

「んだと割れ髪！だったらテメエのも聞かせてみるや！」

そう言われたガロウはボードを持って立ち上がる。

名前で何かが決まる訳では無い。

だが、付けるとするならこの名前で始めようと、ガロウは思い至った。

「俺のヒーロー名は、『フアング』」

「へえ、格好良いじゃない！それに言いやすいわ！何か参考にしたの？」
「いや……」

ヒーローと聞いて先に思い浮かんだのはやはり、二度と会えないかもしれないかつての師匠であり、S級ヒーローであったシルバーファングの姿であった。

負けたつもりは無いが、勝った事は一度もなかった。癪ではあるが、認めていた。

あれは自分の求めるヒーロー像の一つだ。

「別になんでもねえよ」

だが、声に出してそれを認めるには自身のプライドが少し邪魔をしたのだった。

職場体験へ

なんとか全員のヒーロー名も決まり、授業が終了すると手渡されたのは大量の紙の束だった。

なんとこれら全てがヒーロー事務所からの指名の書類だそうで、珍しくガロウは深いため息を吐く。

「面倒だな・・・」

この一言に限る。

とにかく多すぎる書類の束を目の前にしてみると、一つ一つを確認する気など起こらないものだ。

考えてみれば書類の整理や確認などほとんどした事も無い。

「拳獣は幸せな悩みだな」

「どこがだ？俺は別にこだわるつもり無いんだよ」

「ふくん、何処から来てんのさ？」

ため息に反応して書類を確認したのは瀬呂と耳郎の二人。そんな二人は直後、驚

きの声を上げた。

「おまつ・・・！コ、コレツ!?」

「なにこれっ!?目が悪くなったのかな?」

「どうしたんだよ二人共?」

「なにになに?何処からの指名?」

二人からの声に反応したのか、今度はそれを聞きつけて上鳴と芦戸の二人が寄ってきて、同じように驚き声を上げた。

「ちよつとこれ!」

「ランク上位のヒーロー、総ナメしてんじゃねーか!!」

上鳴の言う通り上位ヒーローの殆ど全てから指名が入っている。

だがそれは爆豪や轟にだって言えるだろう。

「ランキングなんかは特に気にしてねえし、どれが良いとか正直分からねえ」

「確かに拳獣はランキングとか確認してなさそうだよねえ」

ヒーロー自体に興味はあるが、好きなヒーローというものがガロウには無い。そういつた訳でこの指名の量から一つだけ選ぶ作業に手間取っていた。

「まだ決まってないのか?」

「逆に聞くんが、お前は決まったのかよ?」

思わぬ轟からの質問に、質問で返す。

轟は頷いて一枚の書類を、N.O. 2ヒーローのエンデヴァー事務所からの指名書類を見せてきた。

「俺は親父の所に行く。まだ、決まってるなら拳獣も来るか？指名したって親父から聞いたけど？」

「あゝ……つと、あつたあつた。これか」

「それだな」

書類の山から探してみれば確かにあつた。エンデヴァー事務所からの指名書類。

「どうする?」

「悪くは無いな」

顎に手をやりながら考える。

クロの事務所からの指名があればそこに行きたかったが、職場体験は受け入れてない。

だとするならば他の事務所、それもヴィランに対応する可能性が高い事務所が良

い。
そして、エンデヴァーとは少しとはいえ話した事もある。全く知らないヒーローという訳では無い。

「じゃあ俺、ここにするわ」

こうしてガロウの職場体験先が決定した。

職場体験先の確定プリントを提出してから数日。職場体験当日。

「全員コスチュームは持ったな？公共の場所じゃ着用厳禁だからな、落としたりするんじゃないぞ？」

相澤からの注意を聞き終わるとA組一同はバラバラにばらける。向かう事務所が違うので当然のことだが方向が同じ者達も居る。

その中で、麗日が何やら飯田に向かって心配そうにしていたが何かあるのだろうか。

飯田の方は何か思いつめたような、これから職場体験に行く様な顔にはとてもじゃないが見えない。

「拳獣、早くしないと電車乗り遅れるぞ？」

「そうだな、行くか」

飯田の表情が僅かに引つかかったが、轟の言葉で視線を外す。

だが、真面目な人間ほど思い詰めれば先走ることがある事をガロウは知っていた。

「悪い轟、ちよつと先に行つといってくれ。直ぐに追いつく」

「分かった。改札で待つとく」

轟に断りを入れたガロウは、未だに思いつめた表情をしてる飯田に駆け寄り頭をちよつと強めに叩いた。

「いたっ!? け、拳獣くん? 何をするんだ?」

「ど、どしたん拳獣くん?」

いきなりの事に飯田も麗日も驚いて此方に視線を向ける。

「なんか変な事でも考えてるだろ、お前?」

「いや、変な事なんて考えては・・・」

「考えてんだろ。そういう顔になってるんだよ、バレバレだぞ。正直言つて、全く似合つてないな」

「ちよつと、拳獣くん!」

麗日は怒つたように声を出した。

しかしそのお陰なのか、飯田の表情は僅かに和らいだ様に思える。

「何考えてるかは聞かないし言わなくてもいい。けどそんな顔するのは止めろ。ヒーローが他人を不安にさせんな」

「……そんなに酷かったか？」

「おう、少なくとも麗日にはそう見えたんじゃないか？」

それだけ言つて飯田から離れる。そろそろ電車の時間だ。

「ありがとね、拳獣くん」

「なんにもしてないが？」

時間ギリギリで電車に駆け込み、轟と一緒に揺れに揺られて暫く。電車を降りてまた暫く歩いたころ。

エンデヴァーヒーロー事務所の立派なビルが佇んでいた。No. 2ヒーローともなればこれぐらいのスケールは当然なのかもしれない。

「お前は来たことあるのか？」

「いや、ない。親父のことは余り好きじゃないからな」

受付で話をする、社長室に通される。

社長と聞き、ガロウは改めてこの世界でのヒーローという存在の立ち位置を実感した。自分の目指しているヒーローとは違うヒーロー像に、少し気分が悪くなる。

「どうした？」

「ちよつとムカついただけだ」

「胃薬貰ってくるか？」

「そのムカつきじゃねえよ」

通された部屋に入れば椅子に座り此方を見つめてくるエンデヴァーが居る。

「よく来た焦凍。そして拳獣ガロウくん。」

ようこそ我がエンデヴァーヒーロー事務所へ、歓迎しよう」

椅子から立ち上がったエンデヴァーは、此方の前まで歩み寄ってくる。こうして近くから見ると鍛えられているのがよく分かった。

「拳獣くん、決勝戦は見事だったな。素晴らしい戦いぶりだった」

「ありがとうございます」

「さて本題だ。」

今回、お前達二人にはプロヒーローの真の姿を見せてやろう。テレビで見るとは違う裏面や現場で何が起きているのかなど」

エンデヴァーはそれだけ言うと書類持ってきて手渡した。

内容はこの事務所でこのルールや見取り図が記載されている。粗暴な人物と思っていたが、こういう所の気遣いは出来るようだ。

「さて、二人には早速コスチュームに着替えてもらおうか。更衣室に案内させる。着替え終わればよいよ職場体験の始まりだ」

思い思われ

「そっち行つたぞ、轟」

「職場体験中はヒーローネームで呼べよ」

わざと逃がしたひつたくり犯を轟の個性で凍らせて動きを止める。いつ見ても思うが、個性威力も範囲も広く応用の利く個性だ。

動きを止められたひつたくり犯に手刀を打ち込み気絶させる。

「どうもまだ慣れないな。ヒーローネームで呼ぶつてのは」

「だからつて、何時までもそれじゃ困るぞ」

「分かつてる分かつてる」

サイドバックから拘束用の縄を取り出して拘束、離れたところで様子を見ていたエンデヴァーに視線を向ける。

「中の上、と言つた所だな。だが、思ったよりも実践慣れしているのは良い」

「中の上かよ…厳しい評価だことで」

「おい、あまり浮かれるなよ。確かにお前は出来る奴だが、それは学生での話だ。それを

肝にめいじておけ。それから、年上には敬語だ！」

敬語は苦手だった。他人の下に着くこと、誰かに何かを決められることが苦手なガロウにとって、敬語とは縁遠いものであった。

それを予想して更生に定評があるベストジーニストが、爆豪と一緒に指名を入れていたがもはや関係の無い話だ。

「親父、警察に引渡し終わってたぞ」

「ご苦労……」までの一連の流れがヴィランが出た時に対する基本的な動きだ。今回は雑魚なヴィランだったが、個性によっては周りに甚大な被害が出ることもある。

覚えておけ！被害を出した時点で、ヒーローは負けだと心得ろ！殺すことはならないが、容赦はするな！舐めてかかればしつぺ返しをくらいかねんからな」

エンデヴァーの話に耳を傾けながら、少し考える。ガロウは何度か耳にした事がある、ヒーローで在るならヴィランを殺しても負けだと。

ぬるい。正直にそう思った。

「さて、次にヴィランが現れた時は俺が捕縛する。二人はよく見ておけ」

歩いていくエンデヴァーの背中を見ながら、ガロウはゆつくりと後に続く。

ともあれ目の前を歩くこの男。流星はN.O. 2なだけはある、かなりの実力者である事を直接見たガロウは実感した。

個性の使い方は今まで見てきた者たちの中でも抜きん出ているように感じる。そして何より容赦はなかった。

「ふんっ!!」

死ぬほどの威力にないにしても、吹き荒れる炎を躊躇い無く浴びせるその姿に容赦という言葉はない。

ぬるい、ガロウは先までのその考えを撤回することにした。

◎

事務所に来て早々、ガロウと轟の二人はエンデヴァーの居る部屋に呼び出された。

「さて、悪いな早くに来させて」

「別にいいさ、適当な理由じゃなければ」

「相変わらず生意気なやつだ」

僅かにイラつきを見せながら発せられた言葉を受けてもガロウは態度を変えようとしな。注意が無駄であることを理解したエンデヴァーは話を切り出した。

「保須市に向かう」

「ヒーロー殺しか」

ガロウは直ぐにエンデヴァアの目的を導き出した。ここから離れている保須市に向かうとなると、そのぐらいいいか思い浮かばなかったからだ。

「なるほど、だから俺を呼んだのか」

「察しがいいな。奴の事は知っておく必要がある。何か知っている事があればここで全て話すんだ」

「そうだなー」

少し時間をかけてあの時の出来事、ステインについてのこと、特徴などを話したがその殆どが既に被害にあったヒーローからの証言と一致していた為に有効な手掛かりというものではなかった。

特に、個性が何なのか分かっていないのが悩みどころだ。

体育祭で心操という少年を見てから、ガロウの中で個性に対する考えが大きく変わった。

「身体が動かなくなる個性。それは分かっているが、一番重要な発動条件が分かっている」

これはステインにとって大きなアドバンテージだ。初見殺しの可能性が消えてない以上、戦闘において飛び抜けているガロウだとしても自身が足を掬われる可能性はない

と言えない。

「肅清などと巫山戯た事を言っているらしいが、全く厄介なやつだ」

「それでも捕まえに行くんだろ?」

「当然だ。ヴィランを退治する、それがヒーローなのだから」

しかし、その様な厄介なヴィラン退治に職場体験中の学生を連れて行く判断は少し意外に感じた。

「普通ならお前や焦凍を連れて行く案件ではない。だが、多少は危険でも見ておくべきだ。厄介きわまる本物の悪とヒーローとの戦いが何を意味しているかを」

だそうだ。

何を思ってそう言ったのか分からないが、一応覚えておくことにしよう。

こうしてエンデヴァーと何人かのサイドキックと共にガロウ達は保須市に向かう。

「ステインか……」

保須市に向かう移動中、ガロウは考えていた。思う事は幾つかある。

相対したのは時間にしてさほど長くはなかったが、何かと感じる事はあった。

似ている。しかし、昔の自分自身とは違ってガロウに踏み越えられ無かった一線を踏み越えている。

あの頃の中途半端な自身とは違う。

本物だ。

そこに至るまでの何があったのか分からないが、折れることの無い芯を、覚悟を持っている。

それが未だ自分には足りないもののように感じた。

自身が求めるものと同じなのかは分からないが、確かめる価値は多いにある。

「戦えば何か分かるか……」

言葉で語るのは得意ではない。ステインもそうだろう。次に二人が出会えば起こるのは戦い、そしてそれを望んでいる自分が居る。

焦がれている。

柄にもない考えに笑いそうになりながら、その感情は心の中に留めておく。どうやって上手く行動するかを考えながら、ガロウはゆっくり目を閉じた。

ゆつくりと目を開ける。

風が頬を撫で、音が鼓膜を揺らす。見下ろせば、目に入ってくるのは繁栄している街並みと、そこを歩く人々。

そして、憐れな偽物の姿。

「ハア……あいつも偽物か……」

多すぎる。拝金主義の塵芥共が。

だが、ふと思い出す。アイツは違った。

おもえばここ最近はよくあいつの顔が脳裏に浮かび上がってくる。

「拳獣ガロウ……」

獣のようにギラついた目をしていたが、中々に真つ直ぐな目でもあった。なにより自身に似ている。

外見がどうのこうのという訳では無いし、そもそも根拠や理由がある訳でもない。だが、直感が囁いた。

いや、直感よりももっと確かな事かもしれない。

「ハア……俺を……焦がれさせるか」

あの時は時間切れにより多く言葉を交わすことは出来なかった。だが、元から言葉で伝えるのは苦手、なら一戦交えた方が分かることが多いだろう。

アイツが自身に似てると思うからこそその考えではあるが。

「ハア……アイツがヒーローを目指すなら……何れは何処かで交わるだろう」

これ程に焦がれる者はオールマイト以外に居なかった。いや、ガロウに対する思いはオールマイトのそれとは少し違う。

「ッ……」

思考の海に沈みかけていた意識が無理矢理に引きずり出された。急に現れた背後の気配に向けて、視認するより先に刃を向ける。

「この刃物をこちらに向けないで頂けますか？」

「ハア……何者だ？」

「突然申し訳ございません。私、ヴィラン連合の黒霧と申します」

保須市 動乱

あちらこちらから聞こえてくる悲鳴が鼓膜を刺激し、あらゆる情報を伝えてくれる。

だが、ガロウはの脳内にそれらの情報は入ってこない。ただただ、目の前の異形に対して全神経を集中させていた。雄英高校を襲撃した異形、脳無だ。

「黒い色にその姿……脳無ってやつか？」

「—————」

喋る機能を持ち合わせていないのか、喋ろうとしているのか、返事の代わりに低い唸り声を喉から響かせる。

エンデヴァーに連れられてやって来た保須市で何か起こるような気はしていた。再びステインに出会うことになるかと予想していたが、出てきたのは黒い色や白い色をした異形達であった。

そこからこの街がパニックに飲み込まれるまで、それ程の時間は掛からなかった。

「おいおいっ…いきなりかよー」

「……………!!」

弾き出されたように巨体が飛びかかってくる。咄嗟の判断で流水岩碎拳を使い、勢いそのままビル壁面に叩きつけた。

充分に開けていた距離を一瞬で詰めた速さに対して、ガロウは僅かに警戒する。今の速度は明らかにUSJに来た脳無よりも速かった。

(まだまだ余裕で追えるスピードだが、逃げられたら面倒だな)

自分が逃げることで、目の前の獲物が逃げることの心配をガロウはしていた。この瞬間を堪能したい思いが思考を埋めている。何故かヒーロー達やそのサイドキックがやって来ない状況も好都合だった。

勿論、周囲に被害を出さない為にもここから逃がさないと考えるもあるが、戦闘欲求に比べれば毛程のものである。

「やつぱり起き上がるよな」

少しもダメージを受けたように見えない脳無はゆっくりと瓦礫から抜け出て来る。

それを確認してガロウが再び構えたその時には、既に拳は目前まで迫って来ていた。

だがその動きもガロウは捉え、拳を躲しながら脚を振り上げて顎を蹴り上げる。ま

るで金属同士を叩きつけた様な音が響き、僅かに脳無の巨体が揺らいだ。

だと言うのに、巨大な拳が振り抜かれる。下手に避けようとせずに、衝撃を受け流しつつ拳を受ける。力に逆らわずに後ろに跳んだのでダメージは無いが、予想よりも速い速度で今度は自身が吹き飛ばされ、ビル壁に叩き付けられた。僅かに受け身がずれる。

生じた隙を狙い、脳無が突いてくる。

「体勢を整えるには充分だ」

吹き飛ばしたのは脳無の判断ミスとしか言えない。僅かな距離、僅かな時間がガロウに迎撃の態勢を余裕で整えさせてしまったからだ。

右、上、上、下——、怒涛の連撃が途切れること無く振るわれるが一つとしてガロウに届かず空を切る。

一步、また一步、ガロウが前に足を進めれば比例するようにジリジリと脳無はその足を下げる。

「————っ!!」

痺れを切らしたのか、言葉にならない様な声を上げて振り下ろされた大振りの一撃。当たれば重症を負いそうな威力が秘められてであろう攻撃は、非常に隙だらけだった。

横から強めに弾いてやれば、更に大きな隙が生まれる。隙が隙を生じ、ガロウに絶好の機会を与える。

冥躰鳳昇拳＋正中線五連突き

異形の体躯故に正確かどうかの判断はつかないが、人間にとって急所にあたる部位を的確に打つ。

金属を打った様な音が再び響く。異様な手応えと、接触時の感触が伝わってくる。――硬いな。

顎を蹴り抜いた時と同じ感触、切島の個性よりも更に強固な硬い皮膚が威力の殆どを削ぎ落としている。

クロビカリとやり合って直ぐの時はこんな感触だっただろうか、とガロウは思い出す。

だが、まだあの時程の力はない。

迫る連撃を受け流しながら、ガロウは脳内で如何にしてこの獲物を仕留めるか考えた。

◎

「なあ、先生よ。わざわざあのレベルの脳無を持ち出す必要があったのか？」

「ふふふ、ドクター。君がそれを言うのかい？ウキウキしているのが手に取るように分かるけどね」

言っている僕自身がウキウキとしているのは内緒だ。こんな気分になったのは甲を見つけた時以来だろうか。

初めて彼と言う存在を知ったのは、弔が雄英高校を襲撃して帰ってきた時だ。

脳無が一人の生徒に潰されたと聞いた時は、半信半疑だった。

オールマイトを倒す為に作り上げた、ドクターの傑作と言ってもいい黒脳無。個性の相性によっては有り得ない話ではないだろうけども、黒霧の話ではそういう訳でも無かったらしい。

「けど、コレを見てると嘘じゃないのが分かってしまうね」

本来の僕の目は無く視覚が潰れてしまっているが、よく見える。

笑みを浮かべて脳無に向かってくる、拳を打ち出してくる、脳無の攻撃を全て弾きとばし、逆に全ての連撃を打ち込んでくる。

強力な硬化の個性を与えている筈だが、僅かであってもダメージを与えている。

表情から焦りの色は窺えない。如何にして脳無を倒すか、この状況で焦ること無く観察しているようだ。

なるほど、学生レベルではない。プロヒーローとしてここまで冷静には居られない。恐らく彼は、戦いの中で生きる事に慣れている。

「面白い子じゃないか、まったく」

◎

「やつとその硬さにも慣れてきた」

何分も闘っていく中でガロウは既に攻略法を見抜いていた。この脳無、硬いは硬いが常に硬い訳ではなく、硬化する時に僅かだがインターバルが
存在しており連続での硬化の維持は出来ないようだ。

その僅かなインターバルで打ち、斬る。再生の個性は持っていないのか、徐々に徐々に傷が増えていく。

「ラストスパートだ！」

ギアを上げる。

連撃の回転率が上がっていく。

攻守の立場は完全に明確化され、もはや脳無に出来ることはない。

だが、思い通りにいかないのが闘いというものであるのなら、コレも当然の事なのか

もしれない。

「その少年！今すぐ離れろ!!」

「職場体験の雄英生徒発見、これより保護します!」

やって来たのはヒーロー、若しくはそのサイドキックと思われる二人だった。

やつとの援軍の到着だったが、喜べない。既に脳無がそちらに向けて駆け出していた。新たな脅威を排除するためか、ガロウよりも倒しやすそうと思ったからなのかは分からないが、確実に脳無はやって来た二人に敵意を向けている。

「っ!」

「はやっ!!」

拳を振り上げる脳無に対して二人は反応できていない。隙だらけな二人に脳無の拳が迫っていく。

だが、そんな脳無自身にも拳が迫っていた。

「隙だらけだぞ、お前」

ガロウの拳が、炸裂した。

保須市 収束

「大丈夫……じゃ、無さそうだなあまり」

「けれど……何とか、なった」

「本当にすまない。轟くん、緑谷くん」

路地にて血を流すも戦いを終えた三人がいた。緑谷と轟、飯田の三人、その背中には重症のヒーローを背負い、ロープで縛ったヴィラン、ステインを引きずっている。

「それ以上言うな飯田。もう終わったんだ」

「そうだよ飯田くん！話してくれなかったのはちよつと悲しかったけど、三人とも無事だったんだし」

「ああ……ありがとう」

お互いがポロポロ、どこから見ても大丈夫では無いがそれでもステインを倒し境地をくぐり抜けた三人は笑っていた。

だがそのうちの一人、緑谷の顔に何処からともなく飛んできた、蹴りが。

「小僧!!」

「ひぎっ!」

「座つてろと言っただろうが!」

「緑谷くぬー!」

「焦凍おお!!お前まで急に俺から逸れるとはどういうことだア!!」

いきなり現れて蹴りを放ったグラントリノに対して飯田が緑谷の事を呼びきる前に、今度はエンデヴァーが轟の名前を呼びながら現れる。

暫くのやり取りの後、ステインや怪我をして背負われているプロヒーローの姿を見て二人はある程度の現状を把握した。

緑谷には再び蹴りが入れられた。

「とにかく今は現状の解決が先だ」

「ご老人、それなら既に問題ないだろう。確認されている脳無は無力化してある」
「親父、ガロウの奴はどうなったんだ?」

「交戦中だ。サイドキックを何人か行かしている。俺もこれから向かう所だ」

「なら俺も!」

続けようとした言葉は、エンデヴァーによって止められた。

「焦凍、お前達は少し今の自分の立場を理解しろ。お前達はまだひよっこだ。ここは俺達プロに任せておけ」

「緑谷、お前もだ。また勝手に動くんじゃないぞ！」

そうして二人のプロは駆け出そうとした。だが、二人のその動きは予期せぬ自体によつて阻まれることになる。

何か大きな物が風を切る、そんな音が徐々に近付いてくる。

「上だ！下がれ！」

いちはやく気付いたグラントリノが周りにソレを伝え、自分を含め他の者たちを下がらせる。

数瞬後に噴煙と轟音を撒き散らしながら、何かは地面に激突した。全員の意識が一瞬で切り替わる。

「全員下がっているろ！」

エンデヴァアの指示でグラントリノ以外の者を更に下がらせる。拳には炎を纏い既に攻撃態勢に入っていた。

「つたく……最後の最後で逃げ出すなんてよ」

よく知っている声が聞こえてきた。直ぐに気づいたのは緑谷、飯田と轟の三人。直後、エンデヴァアも正体に気付いたのか燃え盛る炎を鎮めた。

土煙の中から出てきたのは見知った少年。今まさに助けに行こうと考えていた拳獣ガロウ本人であった。体は所々が血で濡れてはいるものの、何処を怪我しているようにも見えない。恐らく浴びているのは返り血だ。

「雑魚が、手間取らせやがって」

軽い足取りで視線を気にすること無く歩くガロウは不満げに呟く。集まっていた何人かのヒーロー達は自身達が手こずっていた脳無に対しての発言に驚愕した。

「お前はどこに行つたかと思えば、何をやってる!!」

「ああ? って、探してたんだぞ」

「こつちの台詞だ!!」

声を荒らげるエンデヴァーに対して、ガロウは全く悪びれる素振りを見せない。それどころか自身の行動に付いての正当性を示してエンデヴァーを黙らせた。

「おお? 緑谷に飯田か。お前らもここに居たんだな。ボロ雑巾みたいになつてるけど」

「ははは……拳獣くんはピンピンしてるね」

疲労感が満載な声で受け答える緑谷、その後ろにガロウの目線は吸い寄せられる。見知った姿のヴィランがボロボロの有様で捕らえられている。

「なんだ? ステインとやり合つたのか?」

「う、うん。そうだよ」

僅かに申し訳なきような表情に変わった飯田のことをガロウは見逃さなかった。そして、ある程度の事を察した。

「なるほどな。真面目君が原因かよ」

「っ！」

今度はハッキリと肩が震えたのが分かった。動揺が大きくなり、その動きの変化で予想は確信に変わる。

「まあ、いいんじゃないかねえの？誰も死んで無いんだからな」

視線を緑谷達やステインから外す。同時に今まで存在していたステインに対する興味も削がれていく様だった。

倒されてしまった敵に興味はない。

「もう少しすれば警察が駆けつけるつてよ。エンデヴァー、もうヴィラン共は居ないんだよな？」

「ああ。他のヒーローやサイドキック達と確認しあつて居るが、その生意気な小僧が倒した脳無でラストだ」

連絡を取り合い状況が改善されたことを確認し合うエンデヴァーやグラントリノ、ヒーロー達。聞いていた緑谷達三人もその会話の内容に安心したのか、大きく安堵の息を吐いた。

だが、安堵や安心はそのまま油断に繋がる。

戦闘の余韻が残っているガロウを除いた全員が、少しだけ油断していた。

現状が急激に変化する。それが現場の恐ろしさである。

「うわあ!？」

声を上げたのは緑谷だ。

何処からやって来たのか、脳無に捕らえられ空に舞い上がっている。

急転直下な状況の中で、二つの人影が脳無に迫った。一人はガロウ、もう一人は瀕死だと思われた男。片や頭部を刺し貫き、片や胸部を殴り抜いた。

一瞬で二回分の死を味わった脳無は、力なく地面に落ちた。

「なんだ、起きてたのかよ?」

視線が合わさる。

削がれた筈の興味が再び増幅して行くのを感じる。

「ハア………偽物だ………」

ゆらり、とボロボロの男は幽鬼の様に立ち上がる。

だが男は、興味の対象はガロウを見ていなかった。と言うよりも、ステインの目からは意識が感じられない。意識が途切れるかどうかの所を行ったり来たりしてるのだから。

だが、放っている雰囲気は違う。

他者を飲み込む様な強大な存在に変貌している。離れた所に立っているヒーロー達、そこに向けて話す度に場を支配していく。

ヒーローになり損なっただけの男だと思った時もあったが、やはり違うと確信できた。

「俺を殺していいのは、オールマイトだけだ!!——そして!

いま一度試してやる、拳獣ガロウ!!」

振り抜かれたナイフを、手を斬らないようにして受け止める。

「ハア……お前には覚悟があるか! ヒーローになる、その覚悟があるのか!？」

「へっ、上等!!」

ナイフを払い除けて殴り掛かる。

だがその攻撃はステインに届かなかった。顔面のすぐ側で拳は止められている。

「……………」

ステインはピクリとも動かなかった。

それはつまり、今度こそ完全に意識を失ったという事だ。

暫く無言だったガロウは拳を下ろして、つまらなそうに短く息を吐いた。

「普通そこで終わるかよ。つまんねえな」

ボロボロの姿で立っているだけの男から、先程のような雰囲気は感じない。

だが、それでも十分だった。僅かな時間だからこそ、より強く目の前の男の覚悟が感じ取れたのだから。

「さっきのは少し、カッコよかったぜ」

到着した警官たちに運ばれて行くステインを眺めながら、ガロウはそう呟いた。

先輩と有意義な時間

【英雄回帰】

ヒーローとは見返りを求めてはならない

自己犠牲の果てに得うる称号でなければならぬ

現代のヒーローは英雄を騙るニセモノ

粛清を繰り返すことで世間にそのことを気付かせる

「……あながち間違っちゃいねえ」

どこかで見聞きした言葉を思い出しながら呟く。殴りつけたコンクリートの塊が弾け飛んだ。

「よっぼど、ヒーローとしての心構えが出来ている」

蹴りを放てば、コンクリートの柱はばきりと折られ、落ちてきた破片も拳の連打でバラバラに砕かれた。

ガロウの身体にはあの時感じた、ステインのプレッシャー、その感覚がまだ残っていた。心身ともに震え上がらせられるあの感覚、常人では出せない。

「あのハゲの時とは違うが、多少は似ていたか？」

兎も角、あの感覚は忘れてはならない。あれは今後の自分自身にとっての鍵になる、そんな気さえする。

力だけでは手に入らない物があるということだろう。

が、今は力を鍛える。それが自分の性に合っているのだ。

「リアツ!!？」

小山と言つていいぐらいの塊を割る。

幾らここにあるコンクリートで作られた障害物を破壊しようが、教師であるプロヒーローがあつという間に元に戻してしまふと聞いた、故にガロウの破壊活動まがいのプロヒーローには遠慮がなかった。

コンクリートの地面に座る。地面から臀部に伝わる冷たさが心地いい。温まった身体からジワリと滲み出た汗を拭き取り、ペットボトルに入つた液体を一気に飲み干した。

喉の渇きは癒されたが、別の所の渇きは癒されない。

ステインのあの雰囲気を感じた時から、戦いに対する欲求が更にとめどなく溢れてくるのだ。呑まれるようなことはないが、それにしてもこの渇きは中々に堪えるものだ。

ヒーローを目指しているのと同時に、戦いも求めている。強いものと戦いたい。矛盾

を感じて、深く考えるのをやめよう。

「なんだい？考え事？」

「っ！！？」

急に聞こえた声に飛び上がった。

声が聞こえた方に視線を向けたが、誰の姿もない。気配も感じない。

「ごめんごめん、驚いちゃった？」

「……………」

「驚いたよね！まあ、驚かそうとしたんだけど！！？」

地面から生えている生首が、楽しそうに笑いながら話している光景は何とも言えないものがある。

取り敢えず軽く踏んでみようかと思ったが、実行する前に地面に吸い込まれるように消えた。

「君、体育祭で優勝した子だよね？」

「俺はミリオ！三年生で先輩だけど気軽にミリオ先輩と呼んでくれ」

「三年生？」

「そう！ビッグ3とかって呼ばれてるんだよね！」

「取り敢えず服着ろよ」

「おっと、これは失礼。調整が難しいんだよね」

全裸で仁王立ちをしていたミリオに声をかけると地面に落ちた服を着て、再び仁王立ちの体勢をとった。

服を着る前に見えた身体つきはガツシリとしており、かなり鍛え込まれているのが見て理解ができた。そして顔つきを見て分かったが、あの顔は恐らく現場を知っている顔だ。

「それじゃあ改めまして自己紹介！俺は通形ミリオ、雄英高校三年でヒーローネームはルミリオン！」

「1年A組、拳獣ガロウ」

「やっぱり体育祭で優勝した子だよね！うんうん、いい顔つきしてる」

「そりやどうも」

ニコニコしながらこちらを見てくる目の奥には明らかな興味の色が見え隠れしている。

お話だけをしに来た、という訳ではないのは明らかだ。

「それで、何の用だ？」

「タメ口！俺は気にしないけどね！」

けど察しいいね。もちろん話をしようと思ったのもあるけど、まず君には興味があった。そんな時に君がトレーニング場に入っていくのが見えて、話しかける以外に選択肢はないよね」

「それで、話しかけたから終わり。って、訳じゃないよな」

「ミリオは笑みを浮かべる。隠そうとしてはいるのだろうが、興奮が伝わってくる。

「察しいいいね。軽くだけど、君の実力を見ようと思つてね」

「見せて何か、メリツトがあんのかよ？」

「強い人と戦いたいならあると思うよ。こう見えて俺はこの高校じゃ凄く強いんだよね
！」

「その自信、折られても知らねえぞ？」

「遠慮なくこいよ、後輩！」

まるで挑発されてるようだが、気遣いのつもりなのだろう。

そしてさつきから見せられている自信満々な姿勢も、強がりや虚構の類ではないことぐらいガロウは理解していた。

目の前の相手は自分の実力を知っている。その上であの話なら自身と戦える力があるのだろう。

「勝敗の付け方は？」

「いいのを一発貰ったら負け、なんてのはどうかな？」

「んじゃそれで」

「それじゃあ、いつでもいいよー」

ミリオは動かない。立ったままじつとガロウがどう動くのかを窺っている。

ならこちらから行こうと、ガロウは一步を踏み出した。ゆつくりと歩いて行き、あと一步のところまで止まる。

「シッー」

「いきなり顔面、躊躇がないねー」

顔面に向けた蹴りは僅かに背中を反らすことで簡単に避けられたが、蹴り上げた足の勢いを利用して跳び上がる。上げた足に全体重を乗せた踵落とし、受けるのはよくないと判断されたのかこれも避けられた。一発一発がコンクリートを余裕で砕くことの出る威力だ、受けるのに自信がないのなら避けるのが正しい。受けに自信があつたとしてもオススメはできないが。

ミリオが初めて拳を握った。つまり、避けるだけなのはここまでだと言うことだ。ミリオの纏う雰囲気と彼の瞳がそう宣言していた。

右腕をしなせながら振るう、ガロウの手刀はギリギリミリオの顎先を掠めるだけで

空気を切り裂く。お返しと言うように顔面に向かって来た足を同じように足を使って叩き落とした。

まだミリオは個性を使用していない、ならこちらも流水岩砕拳を使わないで戦う、それがガロウの考えだ。そしてこの考えは未だに個性を使わないミリオも同じだった。お互いがまだ様子見、力を使うのであればそれは状況が変わった時、均衡が崩れた時。

「個性使わないのかよ?」

「使わせてみなよ、後輩!」

二人の距離が少し離れる。体を捻り片足を軸にして、ミリオは大振りの廻し蹴りを繰り出した。ガロウも同じ技を繰り出し対抗する。

二人の足がぶつかり合い、弾かれたのはミリオだった。だが、そうなることは分かっていたように勢いを殺さずに回転して、まだ体勢の戻っていないガロウに腕を突き出す。

(貫った!)

腕を掴み、引き寄せる。

「避けてばかりじゃ面白くないだろ? 軽く一発喰らつとけ!」

掴んだまま、引き寄せると同時に逆の拳を顔面に突き出す。

避けも受けも間に合わない完璧なタイミングに、ミリオは咄嗟の判断で個性を発動し

た。

思わぬ光景に目を見開く。当たっている拳が顔面を突き抜けて、後頭部から飛び出す。血や脳漿が飛び散ることもない、手応えすら感じない、つまりすり抜けている。

直ぐに距離を開けようとした所に、鋭い拳の一撃が飛んでくる。ギリギリのタイミングでスウエイで避ければ、拳が胸を掠めた。

「まさか、使わされるとは思わなかったよ！だからちよつとだけ、本気で行くからね！」
「んのヤロオ、つて消えた!?？」

その場に衣服を残して、ミリオの姿が消える。カメレオンなどの動物のように擬態したわけでも、葉隠のように透明になつたわけではない。気配を感じなくなった。

ガロウが先程の地面から生首だけを生やしていたミリオの姿を思い出すのと、地面からミリオが飛び出てくるのはほぼ同時だった。

完全に懐に入り込んだミリオは、飛び出すと同時に顎めがけてアツパーを放つ。深く懐に入り込む、逆にそこが安全圏になる。今までの経験があるからこそ、ミリオは超至近距離の安全性を知っていた。

だが、ガロウの反応速度がミリオの常識を打ち破る。

「それは想定内」

真つ直ぐに突き進んでくる拳ではなく、伸びきろうとしている肘に対して素早く手を

振るった。拳そのものを止めれなくとも、腕を動かしてやれば攻撃は弾き流すことが出来る。

「俺の方も想定内なんだよね！」

肘を弾く筈だった自身の手が、ミリオの腕を通過していく。拳は流れを変えることなく進む。だが、紙一重の差で躲すことができた。攻撃を流そうとした時に身体を逸らして無ければ、確実に当たっていただろう。

そして、ガロウは目の前に立つミリオとの、その相性の悪さを理解した。

単純なすり抜けではない。すり抜ける部分を任意で調節出来るというのは、物理攻撃しかできないガロウからすれば厄介以外の何物でもない。

「いやあ、まさか今のを避けられるとは思わなかったよ」

「分かりやすいんだよ、そんなのは当たらねえ」

「厳しいね！俺もまだまだ、ってことだね。だけど、当てられないのは君も同じだ」

正論に対して、思わず舌を打ち鳴らす。未だに攻略方法が思い浮かばないことに苛立ちを感じた。そしてそんな状況に喜びも感じた、これはミリオも同じだった。

「なに調子に乗ってんだよ。ここからだぞ」

「オツケー！満足するまで来なよ、後輩！」

お互いが相手を正面に捉え、構える。

「そこまでだ、お前達!!？」

声は入り口の方から聞こえてきた。

相沢とセメントスが歩いてきている。二人に気付かない程に熱中していたようだ。

「すぐに直せるとはいえ、随分と壊してるね」

「ちゃんとやってただろ？」

「ここまでに成るとは、正直思ってたよ」

「拳獣、教師には敬語を使え。それから、ここの使用時間はとつくに過ぎてるぞ、授業開始三十分前だ。遅刻は許さん」

久しく感じてなかった有意義な時間の余韻を楽しみながら、ガロウは教室に向かって歩き始めた。

成長と、焦りと、退屈と

汗を軽く拭き取り、もう着慣れた制服の袖を通す。

慣れた動作をこなして、見慣れた通路を通り、見慣れたドアを開ける。

「けどあれ見ると——って、ガロウ！」

何やら話をしていた上鳴が自身に気付くと、途中で話を切つて驚いた様子で声を上げた。

それに反応してクラスに居た全員の目が向けられ、何人か近づいてくる。

「無事だったんだな！」

「ニユースになつてたよ！」

「怪我は大丈夫？」

瀬呂や上鳴、切島や芦戸と言った面々が特にしつこく聞いてくるのが鬱陶しく、隙間を縫う様にして教室の中に入った。

が、気になる一言があり、思わず聞き返していた。

「ニュースになってた、つてのは？」

「知らないのか？」

ほら、と言って見せて来た携帯には、写真や動画に限らず燃える街を背景にヒーローとヴィランの戦う姿や、《ヒーロー殺し》ステインのニュースが数多くアップされている。

特にステイン関連のアクセス数が増加している。

理由は何となしに分かる気がする。あの本物の意思是、良くも悪くも人に何かを思わせることがあるだろう。

「ステインか、成る程な」

「そうそう、そのことで話してただけだよ。この動画見てる時、なんつーか……カッコいいつーか、何と言うか？」

「上鳴くん……!」

緑谷が制止の声を掛けたが、直接戦ったことのあるガロウには理解できた。

「上鳴、お前の言ってることは合ってるぞ」

「ちよっ、拳獣くん!?!」

驚き慌てる緑谷を無視して話を続ける。

「ヒーローを職業としてではなく、その本質を捉えてるんだからカッコよく見えても可笑しくないだろ。

まあ、ヒーロー殺しがヒーローとしての心構えを理解してるってのは、皮肉が効いてるけどもな」

クラスにいる誰もが、ガロウの話を聞いて言い返せなかった。納得できる部分が少なからずあるからだ。

暫く誰も話そうとしなかったが、沈黙を破って飯田が口を開いた。

「……ああ、確かにそうだな」

「意外だな、真面目くんが認めるなんて」

「認めるさ、認めなければいけない。あの時の俺は確かにヒーローに相応しくなかった……ヒーロー殺しの言う通りだった」

間違いを認めることは簡単そうで実は難しく、特に飯田のような真面目なタイプは追い求める目標ばかりを捉えようとして、そう言った傾向に走りやすいとガロウは考えている。

つまらないプライドに邪魔をされて、柔軟な思考が出来ない。元の世界でも、似たような者を何人か見て来たから分かる。

だが、と飯田は続ける。

「間違っていたなら変わればいい。俺は改めて、ヒーローの道を歩む！」
「あつそ……まあ、頑張れや」

欠伸混じりに返事を返しつつ、ホームルームまで寝ることにした。



「ハイ、私 came 来た。」

ってな感じでやっていくわけだけどもね。はい、ヒーロー基礎学ね！」
「何時ものテンションどうしたんだよ」

何日も授業をしてなかったせいで最初の掴みの重要性を忘れたのか、ヌルツと入り始めたオールマイト。

色々と言われながらも持ち直して授業を開始した。

授業内容はいたってシンプル。工業地帯を想定した運動場にて、救助者のオールマイトがいる目的地に誰が一番先に辿り着けるのかを競争する。そして、基本五人一組で行う。

唯一の注意点は、建物の被害を最小限に抑えることらしいが――

「……指差してんじやねえよ」

オールマイトは爆豪に指を向けて注意をしていたが、はつきり言つて物を壊しそうなのは満場一致で誰もが爆豪だと言うだろう。

「ドンマイだな、爆豪」

「うっせえ！ 黙つてろ割れ髪!!?」

順番が回つて来るまで観戦室で待つっていると、最初の一組目から面白いものが見れた。

「おお！ 緑谷凄ええ！」

「何だあの動き!?!」

今まで見たことも無いような動きで緑谷が進んでいく。

見ていて分かるが、明らかに以前の緑谷と比べても動きが良い。と言うよりも、体の動かし方とそれに合わせた個性の扱いが上手くなっている。もしかすれば、インターンで最も成長したのは緑谷かもしれない。

「なあ爆豪、あれお前の動きに似てないか?」

「……うっせえ、黙つてろ」

思っていたことを口に出して問いかけても、爆豪からまともな返事は返ってこないが間違いなくあの動きは爆豪が見せる動きだ。

しかし、未だに慣れていないのか足を滑らせて落下する、情けない結果となった。

「お前、ちよつと焦ってるだろ？」

「……うるせえ」

からかい混じりに声を掛けても突つかかかって来ないことから、少なくとも無い焦りが見て取れる。

「焦んなよ、まあ……怠けてたら、ヤバイかもな」

「——ツチ、何だ励ましのつもりか？ ああ!？」

「いや、焦ってるお前の反応を楽しんでる」

「おちよくつてんのか!!？」

「——おう」

「——!」

声にならない怒声を上げて表情を変質させる爆豪を笑いつつ、ガロウはせつせつとその場を後にした。

上手くいけば、緑谷と爆豪の二人は化けることに成るかもしれないと、ガロウは少しだけ笑った。

軽くその場で飛び跳ねてから、体の筋を伸ばす。

退屈し始めた頃、ようやく回って来た自分の組みは六人、爆豪や常闇など機動力のある者もいる。その中でも爆豪は何か思うことでもあるのか、ずっとガロウのことを睨みつけていた。

「なんか用か？」

「澄ました顔してんじゃねーよ」

「ヴィランみたいな顔してんじゃねーよ」

「——殺す!!？」

「……やはり、悪鬼羅刹」

馬鹿なやり取りをしていると呆れたように常闇が呟いた。

兎に角、始めるために位置につく。

爆豪は何かと意識しているようだが、それに対して応えるつもりは特に無い。淡々と、目の前の退屈な課題を終わらすだけだ。

『スタート!!』

スタートの合図が聞こえた瞬間、場所を確認して一直線に走る。

障害物が道を遮っているように見えても、ガロウからすればそうでは無い。横や上に

迂回するよりも、障害物であるパイプの隙間を潜り抜けるようにして走るのが最も効率的。着地を加速に置き換えれば減速はしない、結果として出せる最速で目的地に辿り着ける。

観戦室から様子を見ている者からすれば、まるでガロウが障害物をすり抜けて移動しているようにしか見えなかった。

「——つえ、はや!? もう来たの拳獣少年!？」

開始から僅か二十秒程で辿り着いたことに、オールマイトは驚きの声を上げる。もちろんガロウとオールマイト以外に生徒たちの姿は無い。

「す、凄いな……」

「先に戻っていても問題ないか?」

「へ? ああ、問題ないぞ」

一応の確認を取ってからガロウは観戦室に足を向ける。

オールマイトから称賛の声を受け取っても、特に喜びを感じることは無く、退屈だった。

前の脳無や、ステインとの戦いの方がよっぽど刺激的で楽しかった——楽しすぎたからこそ、つまらない課題との落差が酷いのだろう。

「あー、暇だな」

空を見上げながら、心の底からつまらなそうに呟いていた。